

2019年度 学位申請論文

八代集における形容動詞について

文学研究科日本文学専攻

14PG002C

謝 静

目次

序 主題と構成	1
1 主題	1
2 構成	2
第1章 研究史と概要	4
1 研究史	4
2 「形容動詞+けり・ける・けれ」	12
3 「～がほなり」型形容動詞	17
第2章 個別語彙の研究	27
1 「あだなり」	27
2 「あはれなり」	40
3 「さやかなり」	57
4 「そらなり」	72
5 「つねなり」	87
6 「はつかなり」	99
7 「はるかなり」	104
8 「ほのかなり」	116
9 「まれなり」	132
結び	140
参考文献	145

序 主題と構成

1 主題

古典和歌では、形容動詞を使用することが少ない。そのことについては、平安時代の和歌を中心として、すでに複数の指摘がある。また、その原因については、伝統を重んずる和歌において、また発達途上であった形容動詞は、用いるのに好ましい言葉ではなかったからだろうと推測されている。

上記の指摘が行われた時は、古典和歌として主に古今集・後撰集が取り上げられていて、古今集から新古今集にいたる勅撰集、すなわち八代集の全体についての調査は行われていなかった。けれども、調査対象を八代集に広げた場合にも、和歌において形容動詞があまり使われないことについては、基本的に先行研究が指摘するのと同様の傾向が確認できる。

八代集あるいは古典和歌と形容動詞についての研究では、そのような形容動詞の使用例の少なさが障碍となっているのが現状である。特に、網羅的に語彙を取り上げ、それに統計的な処理を行うような手法は、用いることが不可能である。

その一方で、個別の語の使用の様子を、総索引などで調べてみると、八代集において、ある程度まとまった数の用例が検出される形容動詞も存在する。一語あたりの用例数で言うと、10例を超える語が13語あり、そのうち、用例数が20例を超える語が7語ある。このような現象は、形容動詞が発達途上であったからというような観点からは、説明しつくすことができない。

形容動詞がなぜ古典和歌で用いられないのかを明らかにすることは難しい。用例が乏しい中では、抽象的な推測に頼らざるをえないからである。一方、用例が一定数以上ある形容動詞については、それがどのようにして用いられているのかを考えることはできる。

全体として古典和歌に形容動詞が用いられない中で、ごく一部の形容動詞が、どうして相対的に多く和歌に用いられているのか。それを明らかにするには、それぞれの形容動詞について、個別にその使われ方について調査、確認して見る必要があるだろう。

そこで、本研究では、一定の用例数を示す形容動詞の中から、9語を選び、それぞれの形容動詞が、八代集の和歌でどのように用いられているのかを、個々の用例に即して検討することにする。

個々の形容動詞の検討にあたっては、それがどうして和歌に用いられるのかという問題

だけを、性急に追及することは避けたいと思う。それは結局、それらの語が和歌と相性が良かったからだという、単純で抽象的な結論に落ち着いてしまうことが予想されるからである。

また、個々の形容動詞の和歌における使用の実態は、語によってさまざまに簡単にまとめることもできない。

したがって、個別の語彙の研究では、まずは、それぞれの語がどのように使われているのかを一首一首の用例に即して検討し、その上で個別にその傾向を概観しまとめることを目指したい。

その上で、それぞれの語の特徴を見渡して、何らかの共通点が見出せれば、それを最後に指摘してみたいと考える。

2 構成

本論文は、序、本論（第1章、第2章）ならびに、結びから構成される。

本論第1章は、

- 1 研究史
- 2 「形容動詞+けり・ける・けれ」
- 3 「～がほなり」型形容動詞

の三節から構成される。

- 1 では、形容動詞と古典和歌についての先行研究を踏まえながら、八代集における形容動詞の使用の概要を確認する。
- 2 では、古典和歌で形容動詞が使われにくい理由について、その一端を探るために、和歌（短歌）の第二句ならびに第五句に用いられた「形容動詞+けり・ける・けれ」について考える。検討にあたっては、名詞・動詞（助動詞を含む）・助詞に断定の助動詞「なり」、詠嘆の助動詞「けり」が接続した形を参照する。
- 3 では、先行研究で対象とされている「～がほなり」型形容動詞について考える。八代集に見える用例を取り上げ、「～がほなり」型形容動詞が形容動詞全般の中で相対的に多く用いられていることについて検討する。

第2章は、以下の9節から構成される。

- 1 「あだなり」
- 2 「あはれなり」
- 3 「さやかなり」
- 4 「そらなり」
- 5 「つねなり」
- 6 「はつかなり」
- 7 「はるかなり」
- 8 「ほのかなり」
- 9 「まれなり」

それぞれの節で検討を加える形容動詞は、八代集において相対的に多くの用例が検出される形容動詞の中から選んだものである。

各節の形容動詞の検討については、先に述べた通り、まずは個別の用例を具体的に検討し、それに適宜分類・整理を加えながら、その使用の実状とそこに見られる傾向を把握することを目指した。

用例数の調査にあたっては、ひめまつの会編『八代集総索引 和歌自立語篇』（1986年、大学堂書店。以下「自立語篇」を省略する）を利用した。

また、八代集の和歌の引用については、岩波書店刊行の新日本古典文学大系所収の八代集¹に拠った（一部表記を改めた場合がある）。個々の和歌の解釈についても、基本的に同書の解釈に従っている。学恩に深く感謝申し上げる。

結びは、主に本論第2章の検討結果を踏まえて、検討した9語から伺える傾向について、そのあらましを記述する。

¹ 書名と校注者は以下の通り。『古今和歌集』（小島憲之 新井栄蔵）、『後撰和歌集』（片桐洋一）、『拾遺和歌集』（小町谷照彦）、『後拾遺和歌集』（久保田淳 平田喜信）、『金葉和歌集 詞花和歌集』（川村晃生 柏木由夫 工藤重矩）、『千載和歌集』（片野達郎 松野陽一）、『新古今和歌集』（田中裕 赤瀬信吾）。なお同書への言及に際しては、「新大系」と略称する。また、和泉書院刊行の和泉古典叢書の『後撰和歌集』（工藤重矩）、『後拾遺和歌集』（川村晃生）、『千載和歌集』（上条彰次）もしばしば参照した。同書への言及は「古典叢書」の略称を用いる。

第1章 研究史と概要

1 研究史

古典和歌では、形容動詞を使用することが少ない。そのことについては、平安時代の和歌を中心として、すでに複数の指摘がある。

山口仲美氏は、平安時代の散文作品と歌集（万葉集・古今集・後撰集）に含まれた和歌における形容動詞の使用（形容動詞の異なり語数における比率）について比較され、さらに新古今集の和歌も対象に加えて、

こうして、歌集、つまり韻文学は、奈良時代のみならず平安時代から鎌倉時代と、一貫して、散文学よりも、形容動詞の比率が低かったという傾向が指摘できる。

と述べておられる。² また、その理由については、

歌の世界は、随所で指摘されているように、伝統を重んじる世界である。従って、最も考えやすいのは、形容動詞の未発達な奈良時代に成立した万葉集の傾向を、古今集以後の歌集もそのまま継承したためだと考えることである。

と推測されている。

漆谷広樹氏は、いわゆる「～ゲ型形容動詞」について研究された論考の中で、「中古初期でも目立って「～ゲ型形容動詞」の少ないのは『古今集』である。」と述べられ、古今集に見える「～ゲ型形容動詞」の用例が、

をりとらばをしげにもあるか桜花いざやどかりてちるまでは見む

(古今集・春上・65・よみ人しらず・「(題しらず)」)

² 山口仲美『平安文学の文体の研究』（明治書院）第2章「仮名文学と形容詞・形容動詞」

の1首しかないことを指摘された。³さらに古今集における形容動詞全体を含めた使用の少なさとその理由について、漆谷氏は次のように述べておられる。

『古今集』では接辞を伴い「形容動詞」化している語も「形容動詞」全体の数も少ない。これは和歌の性格を考えればいわば当然のことなのかもしれない。つまり和歌では好んで古い語を使う傾向があり、中古に入って発達をとげる比較的新しい語である「形容動詞」は和歌にとって好ましい語ではないのだろう。参考までに『古典対照語彙表』によると『後撰集』においても「形容動詞」の語は少なく、異なり語数で40語、そのうち「～ゲ型形容動詞」は（中略）3語のみである。

両氏の研究では、平安時代の歌集として古今集・後撰集が取り上げられ、山口氏は、新古今集も参照されている。そこで指摘された、和歌において形容動詞があまり使われないことについては、調査対象を八代集に広げた場合にも、基本的に同様の傾向が確認できる。

今、村田菜穂子氏が作成した「中古散文作品の形容動詞対照語彙表」⁴によって、そこに挙げられた形容動詞の異なり語数と、『八代集総索引』に項目として立てられた形容動詞の語彙数を比較すると下記の通りである。

[形容動詞 異なり語彙数]

散文作品 1092 語

八代集 64 語 (5.9%)

ここに見られる八代集における使用語彙数の少なさは、これまでの研究で指摘されてきたことと符合するものである。

また、「中古散文作品の形容動詞対照語彙表」で20以上の用例数が示されている語に絞って、八代集の使用数と比較対照することによっても、その傾向は顕著に確認できる。(7ページ以降の表を参照。)

その一方で、個別の語によっては、ある程度まとまった数の用例がある形容動詞も見出される。『八代集総索引』によれば、用例数が20より多い形容動詞として、次の語が挙げ

³ 「「形容動詞」語幹構成要素の「ゲ」に関する一考察」(『専修国文』42号、1988年2月)

⁴ 『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』(和泉書院、2005年)。

られる。(疑問を意味する「いかなり」「なになり」を除く。)

そらなり	51	はるかなり	41
あはれなり	40	あだなり	39
つねなり	29	ほのかなり	29
まれなり	23	ときはなり	22
ことなり	21		

さらに 10 以上の用例が見つかる形容動詞は左記のようである。

かずなり	16	さやかなり	15
ただなり	12	はつかなり	13
まことなり	12	さかりなり	10

このように全体には使用数が少なくても、中には一定数以上の用例が検出できる語があるということは、先行研究で言われるように、形容動詞が発達途上であったから古典和歌には用いられなかったというような説明では、十分でないことがわかるだろう。

これらの語は、相対的に用例が多いとは言え、語数も用例数も限られていて、統計的な処理に基づく研究にはなじまない。

そこで本論文では、その中から 9 語を選んで、個別に検討を加えていくこととする。

それに先立って、形容動詞に詠嘆の助動詞「けり」が接続して述語となる用例と、「～がほなり」型形容動詞の八代集における使用の概況について、やや広い視野から検討を行うこととする。

形容動詞用例数比較表

	散文対照表	八代集総索引	対散文比	～に*
あえか	44	0		
あからさま	82	0		
あきらか	37	0		
あさはか	39	0		
あざやか	86	0		
あだ	44	39	88.6	
あて	190	0		
あてはか	23	0		
あてやか	32	0		
あながち	286	1	0.4	
あはれげ	67	0		
あはれ	2077	40	1.9	
あまり	87	1	1.2	
あやにく	53	0		
あらは	91	6	6.6	
あららか	27	0		
いかさま	29	0		いかさまに 3
いか	2280	93	4.1	
いかやう	43	0		
いささか	64	0		
いたづら	158	0		いたづらに 36
いとほしげ	37	0		
いまさら	110	0		いまさらに 22
いみじげ	26	0		
いろいろ	35	0		いろいろに 4
うしろめたげ	20	0		
うちつけ	70	0		うちつけに 6
うつくしげ	192	2	1	
うらめしげ	31	0		
うららか	21	0		
えん	79	0		

おいらか	66	0		
おそろしげ	40	0		
おほかた	83	0		おほかたに 7
おほき	215	0		
おほどか	59	0		
おぼろけ	152	6	4	
おもはず	105	0		おもはずに 2
おもひのほか	102	0		
おもふさま	37	1	2.7	
おもふやう	48	0		
おもりか	30	0		
おろか	332	9	2.7	
かうやう	38	0		
かすか	55	0		
かたは	69	0		
かたほ	28	0		
かやう	455	0		
かりそめ	59	0		かりそめに 3
かり	34	0		かりに 19
かるらか	23	0		
きやうさく	20	0		
きよげ	267	0		
きよら	311	0		
くるしげ	122	0		
けうら	30	0		
けぎやか	79	0		
け	54	1	1.9	
けんしょう	28	0		
ここちよげ	60	0		
こころぐるしげ	64	0		
こころごころ	35	0		
こころこと	135	0		
こころづくし	32	0		

こころのどか	79	0		こころのどかに 1
こころひとつ	53	0		
こころぼそげ	84	0		
こころよりほか	60	0		
ことざま	22	0		
ことさら	92	0		
ことずくな	43	0		
こと	879	21	2.4	
ことのほか	58	2	3.4	
ことやう	29	0		
ことわり	317	0		
こまか	176	1	0.6	
こまやか	178	0		
さかり	87	10	11.4	
ささやか	35	0		
さすが	548	0		さすがに 17
さだか	34	2	5.9	
さはやか	45	0		
さまこと	56	0		
さまざま	315	0		さまざまに 2
さやう	347	0		
さやか	58	15	25.9	
さら	172	0		さらに 26
したりがほ	21	0		
しづか	134	1	0.7	
しのびやか	153	0		
しめやか	69	0		
しらずがほ	41	3	7.3	
すくよか	66	0		
すずろ	151	0		すずろに 3
せち	225	0		
そら	43	53	123.3	
たしか	101	0		

ただ	154	0		
たのもしげ	36	0		
たひらか	99	0		
たまさか	58	0		たまさかに 9
つつましげ	40	0		
つね	388	29	7.5	
つややか	30	0		
つれづれ	174	0		
とみなり	181	0		
とりどり	58	0		
なかなか	117	1	0.9	なかなかに 16
なげ	41	2	4.9	
なだらか	59	0		
なつかしげ	23	0		
なのめ	92	0		
なほざり	36	0		なほざりに 3
なめげ	38	0		
なやましげ	49	0		
なよよか	22	0		
にくげ	50	0		
にはか	266	0		にはかに 2
にほひやか	41	0		
ねたげ	26	1	3.9	
ねんごろ	98	0		
のどか	141	0		のどかに 8
のどやか	127	0		
はかなげ	23	0		
はづかしげ	131	1	0.8	
はつか	32	13	40.6	
はなやか	183	0		
はるか	168	41	24.4	
ひたぶる	105	0		ひたぶるに 6
ひとかた	21	0		ひとかたに 4

ひとずくな	60	0		
ひとわらはれ	23	0		
ひとわらへ	46	2	4.3	
ひややか	21	0		
ふくらか	27	0		
ふびん	46	0		
ふよう	29	0		
ほそやか	32	0		
ほのか	290	29	10	
まこと	648	12	1.9	
まちどほ	24	0		まちどほに 3
まほ	58	1	1.7	
まめ	32	2	6.2	
まめやか	244	0		
まれ	40	5	12.5	まれに 18
みそか	66	0		
むげ	158	0		むげに 1
むつかしげ	21	0		
めづらか	200	0		
めもあや	33	0		めもあやに 1
ものあはれ	90	0		
ものきよげ	21	0		
ものしげ	20	0		
やすらか	44	0		
やはらか	28	0		やはらかに 1
ゆたか	28	0		ゆたかに 1
よのつね	78	0		
よわけ	36	0		
らうたげ	188	0		
わかやか	72	0		
わづか	61	0		
をかしげ	336	0		
をこ	41	0		

* 『八代集総索引』で、「～に」という形で立項されて語とその用例数。

2 「形容動詞＋けり・ける・けれ」

八代集における形容動詞の使われ方の概況を知る手がかりとして、形容動詞が詠嘆の助動詞「けり」を伴って、和歌の第二句・第五句に述語として用いられているものを取り上げてみたい。

「名詞＋なりけり・ける・けれ」という形が、和歌の第二句・第五句は置かれる表現は、数多く目にするものである。これに対し、「形容動詞＋けり・ける・けれ」の例は、とても少ない。

その両者ならびに近似する表現の用例数をまとめたのが、次ページの表である。⁵ これを見ると、形容動詞を含む用例の少なさは顕著である。

形容動詞には、これを独立した品詞とは認めず、「名詞＋なり」に分解して理解すべきだとする説が根強くある。そのことの当否に関わらず、和歌において、「名詞＋なりけり・ける・けれ」と「形容動詞＋けり・ける・けれ」の間には、それをを用いる際に、大きな差異が存在することが知られる。

別の観点から見れば、古典和歌に形容動詞が用いられないのは、そこに含まれる「なり」の部分が示す断定の意味合いが影響しているのではなく、その語幹の意味内容が影響していることが予想される。

秋のよの月のひかりはかはらねどたびのそらこそあはれなりけれ

(永縁奈良房歌合・月・二番左・31・三郎君)

上の歌の第五句「あはれなりけれ」について、同歌合で判者をつとめた源俊頼は、

左歌、すゑの、あはれなりけれ、ぞ、まことにをさなくあはれげにきこゆめる

と評している。「おさなし」は、「考えが未熟である。おろかである」「子供っぽい。幼稚で

⁵ 「動詞＋」の欄には、動詞の連体形に接続したものに加え、「咲けるなりけり」のように、助動詞に接続したものも加えている。また、「助詞＋」は「咲けばなりけり」のような表現をいう。

「～なりけり・ける・けれ」の用例数（第二句・第五句）

歌集	形容動詞	名詞＋	動詞＋	助詞＋	合計数	形容動詞使用語彙
古今	0	31	6	5	42	
後撰	4	38	22	7	71	あはれなり 2 さかりなり 1 まことなり 1
拾遺	2	35	11	4	52	あはれなり 2
後拾遺	4	42	12	5	63	あはれなり 2 さかりなり 1 ときはなり 1
金葉	1	25	11	2	39	さかりなり 1
詞花	1*	19	3	0	23	あはれなり 1*
千載	3	56	9	1	69	あはれなり 1 さかりなり 2
新古今	0	48	7	0	55	
合計数	15	294	81	24	414	

* 拾遺集歌と重複。

ある」（日本国語大辞典）の意である。俊頼は、この歌の「～は～ねど～こそあはれなりけれ」という素朴な詠み方を、子供っぽくて未熟だとし、その分いかにも「あはれ」だったのでろうなと思われると、皮肉まじりに評している。

このように、述語に「形容動詞＋けり・ける・けれ」を用いて述語にすると、心情を単純素朴に表現する詠み方になりかねないということが、八代集に用例が少ない理由と考えよう。

1

「形容動詞＋けり・ける・けれ」の句をもつ歌で、八代集に選ばれた歌は、どのような歌であったのか。形容動詞ごとに簡単に概観しておきたい。

「あはれなり」

- ・撫子はいづれともなくにほへども遅れて咲くはあはれなりけり
 (後撰集・夏・203・太政大臣・「師尹朝臣のまだわらはにて侍ける、常夏の花を折りて持ちて侍ければ、この花につけて内侍のかみの方に贈り侍ける」)
- ・ながらへてあらぬまでも事の葉の深きはいかにあはれなりけり
 (後撰集・恋一・600・よみ人知らず・「男につかはしける」)
- ・思出もなきふるさとの山なれど隠れ行くはたあはれ也けり⁶
 (拾遺集・別・350・弓削嘉言・「帥伊周筑紫へまかりけるに、河尻はなれ侍けるに詠み侍ける」)
- ・あしひきの山の木の葉の落ちくちばいろのをしきぞあはれなりける
 (拾遺集・物名・417・輔相・「くちばいろのをしき」)
- ・音もせで思ひにもゆる蛍こそなく虫よりもあはれなりけれ
 (後拾遺集・夏・216・源重之・「蛍をよみ侍りける」)
- ・過ぎてゆく月をもなにかうらむべき待つわが身こそあはれなりけれ
 (後拾遺集・恋二・689・読人不知・「大式高遠物言ひ侍りける女の家のかたはらに、また忍びて物言ふ女の家侍りけり、門の前より忍びて渡り侍りけるを、いかでか聞きけん、女のもとよりつかはしける」)
- ・分けわびていとひし庭の蓬生も枯れぬと思ふはあはれなりけり
 (千載集・雑中・1145・法眼兼覚・「題不知」)

「(~は) あはれなりけり」という表現を用いると、歌が素朴で陳腐になりかねない。上記の歌では、それを回避するための工夫が行われているように見える。特に目立つのは、別の何かを話題にしておき、それに対して「~は、~ぞ、~よりも、~こそ」というように主題になるものを取り立てて、その述語として「あはれなりけり」を使う詠み方が多用されていることである。

同じ構文は、先に見た、永縁奈良房歌合の「秋のよの…」詠にも見られるが、それよりもずっとうまく特定の主題を取り立てて「あはれなりけり」と詠嘆しているのが看取できるだろう。

「あはれなり」については、第2章の2で、改めて取り上げたい。

⁶ 詞花集・雑下・391に同じ歌が重出している。

「さかりなりけり」

- ・ 春近く降る白雪は小倉山峰にぞ花の盛りなりける
(後撰集・冬・501・よみ人しらず・「題しらず」)
- ・ 沼水にかはづなくなりむべしこそ岸の山吹さかりなりけれ
(後拾遺集・春下・158・大弐高遠・「題しらず」)
- ・ けさ見ればよはの嵐に散りはてて庭こそ花のさかりなりけれ
(金葉集・春・58・左兵衛督実能・「落花満庭といへることをよめる」)
- ・ 春をへてにほひをそふる山ざくら花はおいこそさかりなりけれ
(千載集・春上・71・源仲正・「每春花芳といへる心をよめる」)
- ・ 池水にみぎはのさくらちりしきて波の花こそさかりなりけれ
(千載集・春下・78・院御製・「御子におはしましける時、鳥羽殿にわたらせたまへりけるころ、池上花といへる心をよませたまうける」)

「春近く…」詠は、小倉山の白雪を桜の花に見立てて、山の峰（山のいただき。山の頂上のがったところ）に花が盛りだと興じている。

「けさ見れば…」詠、「春をへて…」詠、「池水に…」詠は、本物の桜を詠む。それぞれ、散った桜について、「庭こそ花のさかりなりけれ」、「波の花こそさかりなりけれ」と詠嘆し、人とは違って「花はおいこそさかりなりけれ」と興じている。それぞれ、常識を覆す発想を詠んでいることに気づく。

「沼水に…」詠は、先に蛙の鳴き声を話題にしておいて、そこから山吹の花盛りに気づくという構成にしている。

「まことなり」

- ・ 人言はまこと也けり下紐の解けぬにしるき心と思へば
(後撰集・恋一・523・よみ人しらず・「女のもとにつかはしける」)

この歌では、「人言はまこと也けり」と、それだけではどうしてそういうのかわからない

句を先に示して、第三句以下で、その謎を解いている。

「ときはなり」

・惜しむには散りもとまらで桜花あかぬ心ぞときはなりける

(後拾遺集・春下・140・藤原通宗朝臣・「承暦二年内裏後番の歌合に桜をよみ侍りける」)

この歌では、はかなく散る桜の花と、それを惜しむ心を対比させて、植物ではない心の方に、「ときはなりけり」を用いて詠嘆している。

おわりに

以上、八代集に用例の少ない「形容動詞+けり・ける・けれ」について検討を加え、どうしてその用例が少ないのかについて推測を述べるとともに、数少ないながら八代集に選ばれた歌には、それぞれ工夫がこらされていることを確認した。

3 「～がほなり」型形容動詞

はじめに

「～がほなり」型形容動詞の「かほ」（顔）は名詞で、それが接尾語として用いられ「なり」を伴って形容動詞となったものと理解されている。

今、『日本国語大辞典 第二版』（以下「第二版」を省略する）と『角川古語大辞典』の記述を見ておこう。

『日本国語大辞典』は、名詞「かほ」の解説の中に、接尾語の項目を設け、次のように解説している。

「かほ」

【一】〔名〕

- (1) 目、口、鼻などのある、頭部の前面。つら。おもて。
- (2) (比喩的に用いて) 物の表面。また、一部分だけが外に見えているもの。→顔を出す。
- (3) (1)の状態、様子。
 - (イ)かおかたち。かおだち。容貌。
 - (ロ)表情。顔つき。顔いろ。
 - (ハ) (比喩的に用いて) 様子。態度。

〔以下(6)マデ省略。〕

【二】〔接尾〕

そのような表情、または、そのような様子であることの意を表わす。この場合、多く「がお」となる。

『角川古語大辞典』にも、「かほ」は名詞として掲出され、接尾語の用法も記されている。その記述は、以下の通りである。

○かほ【顔・貌】

【名詞】

顔面。「かたち」がそのものの類としての特徴を示す外観を意味し、目鼻立ちなどその場で直ちに換えられないものを表すのを限度とするのに対して、そのものの個としての特徴をいう語で、その場その場の顔色や表情などを表すことができる。「かほ」の形で接尾語として用いるのもそのためである。「顔、貌カホ」〔名義抄〕

- ①人体の部分としての目鼻を中心とする顔面。
- ②物の表面。外部から見えるおもて。
- ③様子。顔つき。その場その場の表情。実際の心とはうらはらの表情を意識的に作る場合に用いることが多く、通常サ変動詞を伴う。接尾語「がほ」はこの意を添える。
- ④面目、名誉。信用、名声。「顔を立てる」「顔をつぶす」などの形で用いる。
- ⑤顔の化粧。「顔を作る」「かほをなほす」など、主として女性や役者の場合にいう。

【接尾語】

一、③が接尾語化したもの。連濁により「がほ」となる。動詞連用形、形容詞語幹、時に名詞やそれに助詞の付いた形に接する。「なり」を伴って全体として形容動詞化した用い方が普通である。態度・表情から見て、そのような意図や心境にあると判断されるさま。外面にある状態・様子のがかえるさま。様子。ふり。内面的なものの発露としての場合と、内面とかかわりなく、あるいは内面に反してそのように見える場合とを含む。歌にも「かこちがほ」「ならはしがほ」などと詠まれ、西行は好んで用いたが、俊成は『御裳濯河歌合』の判詞で、「みせがほにといへる詞、我も人も皆よむことばなり…歌合などにはひかふべきにやあらむ」といっている。〔下略〕

以上のように、『角川古語大辞典』は、「～がほなり」型形容動詞について、詳細に解説を加えている。以下、これを参考にしながら、八代集の和歌における「～がほなり」型形容動詞の用例を検討したい。

1

漆谷広樹氏は、中古・中世の散文作品（29 作品）と、和歌（八代集、躬恒集、新勅撰集、新後撰集、続後撰集、山家集）を調査対象として「～がほなり」型形容動詞の使用状況を比較した上で、「ジャンルについては、作品の分量の割には、和歌の世界にガホは比較的多

く見ることが出来ると言えるのではないだろうか」と述べている。⁷

今、村田菜穂子氏作成の「中古散文作品の形容動詞対照語彙表」(『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』)から、「～がほなり」型形容動詞を抜き出して、その異なり語彙数を数え、『八代集総索引』によって検出される、八代集における異なり語彙数に補正を加えたものとを比較すると、下記のようなになる。

〔「～がほなり」型形容動詞 異なり語彙数〕

散文作品… 81 語

八代集 … 15 語 (18.5%)⁸

この15語という語彙数は、決して多い数字とは言えないが、上記と同様に集計した、形容動詞全体での語彙数比較、ならびに、「～げなり」型形容動詞の語彙数比較と突き合わせると、漆谷氏の見解が首肯できるものであることがわかる。

〔形容動詞全体 異なり語彙数〕

散文作品 1092 語

八代集 64 語 (5.9%)

〔「～げなり」型形容動詞 異なり語彙数〕

散文作品 386 語

八代集 13 語 (3.4%)

今、次ページの表(「～がほなり」型形容動詞用例一覧)に基づき、歌集ごとの用例数を集計すると、下記の通りである。

古今集	1 首	後撰集	4 首
拾遺集	1 首	後拾遺集	2 首
金葉集	1 首	詞花集	0 首
千載集	6 首	新古今集	6 首

これによると、「～がほなり」型形容動詞は、八代集を通して用例が見られるが、千載集

⁷ 「中古・中世における「～顔(がほ)」の語構成と語法について」(『文藝研究』124号、1990年5月)。

⁸ 15語のうち、「かこちがほなり」「ねたるがほなり」「もちがほなり」は、「中古散文作品の形容動詞対照語彙表」には見られない語である。

と新古今集に特に用例が多いことがわかる。

「～がほなり」型形容動詞用例一覧								
	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今
ありがほ							819	
あるじがほ					604			
うらみがほ								1231・1821
かこちがほ							929	
ことありがほ		588		679				
しらずがほ		997						1309・1767
しらぬがほ							657	
しりがほ							623	832
ならしがほ		1182						
ぬるるがほ	756	1270*						
ねたるがほ				298				
ひとまちがほ			1220					
みなれがほ							201	
もちがほ								1738
わすれがほ							1163	

* 古今集756番歌と重複。

2

高木和子氏は、源氏物語に用いられた「～がほなり」型形容動詞の使われ方について検討を加え、その傾向について、以下のように述べている。⁹

- ・「～顔なり」とは、期待されるもう一つの別の姿を前提として、表層の「顔」との差異

⁹ 「『～顔なり』の表現について—『源氏物語』の例を中心に—」（『日本語学』36巻1号、2017年1月）

を意識化した表現なのではなかろうか。

- ・〔草木や露ニツイテ〕 これらは本来感情を持たない風景に、感情を読み取るのだから、内実との差異が前提であることは疑いない。
- ・〔人物ニツイテ〕 「～顔なり」の表現は、実際の姿を隠して演技的に振る舞ったり、期待する姿と異なる相手への不満を表明する際に多く用いられているのである。
- ・『源氏物語』における「～顔なり」の形容は、往々にして演技的であったり、内実とかけ離れていたり、期待に反したりする。その差異に対して、何らかの不満や批判を籠めて用いるのが「～顔」の表現だと言えよう。

高木氏の論述は、源氏物語の用例についてのものなので、そのまま和歌に適用できないところもある。けれども、「～がほなり」型形容動詞が、内面と表層との差異を意識した表現であることは、基本的に和歌にも当てはまることであると思われる。

以下、八代集の用例について、① 自然の事物に用いられた「～がほなり」と、② 人に用いられた「～がほなり」に分け、個別の和歌を取り上げて検討を加えたい。

3

① 自然の事物について

自然の事物について用いられた「～がほなり」については、高木氏が、「本来感情を持たない風景に、感情を読み取るのだから、内実との差異が前提であることは疑いない」と述べるのが、ほぼそのまま当てはまる。

- ・あひにあひて物思ふころのわが袖にやどる月さへ濡るる顔なる

(古今集・恋五・756・伊勢・「題知らず」)

この歌では、袖の涙に映る「月」について、心のない月までもが涙に濡れている様子だと詠んでいる。「ぬるる顔なり」を用いることによって、詠者自身の顔が涙で濡れていることを想起させている。

- ・人しれずものをや思秋萩のねたるがほにて露ぞこぼるる

(後拾遺集・秋上・298・中納言女王・「同じ心をよみ侍りける」)

本来心を持たない「秋萩」を、寝ている様子でいるが悲しみの涙を流している人に擬えて、「ねたるがほなり」を用い、さらにその心中を「人しれずものをや思」と思いやっている。

- ・むかし見し主顔にて梅が枝のはなだにわれに物語せよ

(金葉集・雑部下・604・藤原基俊・「公実卿かくれ侍りて後、かの家にまかりけるに、梅の花盛りに咲けるを見て枝に結び侍りける」)

この歌では、「梅」に「主顔なり」を用いて擬人化し、亡くなった友人の代わりに話をしてほしいと願っている。

- ・むかしわがあつめし物を思ひいでて見なれがほにもくるほたるかな

(千載集・夏歌・201・藤原季通朝臣・「百首歌たてまつりける時、蛍のうたとてよめる」)

- ・千世ふべきはじめの春と知りがほにけしきことなる花ざくらかな

(千載集・賀歌・623・左のおほいまうち君・「二条院御時大内におはしまして初めて、花有喜色といへる心をよませ給けるによみ侍ける」)

この2首では、心のない「蛍」「桜」を心をもっているように擬人化して、「見なれがほなり」「知りがほなり」を用いている。ともに、詠者（詠者たち）と対象との心の通い合いを表現しようとしている。

- ・いまはただ心のほかに聞く物を知らずがほなるおぎの上風

(新古今集・恋四・1309・式子内親王・「題知らず」)

この歌では、本来心のない「萩を吹く風」を擬人化し、詠者の気持ちを理解しないかのように、「知らずがほ」で吹く風を、不満に思う心を詠んでいる。

・なげけとて月やはものを思はするかこち顔なる我が涙かな

(千載集・恋五・929・円位法師・「月前恋といへる心をよめる」)

・身を知れば人のとがとは思はぬに恨みがほにもぬる袖かな

(新古今集・恋三・1231・西行法師・「題知らず」)

この2首の歌で擬人化されているのは、詠者の「涙」「涙に濡れた袖」である。心のない涙や袖に「かこち顔なり」「恨みがほなり」を用いることによって、詠者自身の悲しみを涙・袖に投影している。

和歌では、心のないものを擬人化して詠み、そのことによって詠者の心を詠む技法がしばしば用いられる。以上の歌で用いられた「～がほなり」は、そのような和歌の傾向に合致したものである。

4

② 人について

「～がほなり」を人について用いた和歌については、さらに、a 他者について用いた歌と、b 詠者自身について用いたもの、とに分けて検討したい。

a 他者について用いた歌

・怨むれど恋ふれど君が世とともに知らず顔にてつれなかるらん

(後撰集・恋六・997・読み人しらず・「女のもとにつかはしける」)

・おぼつかなるまの島の人なれやわが言の葉を知らぬがほなる

(千載集・恋一・657・前大納言公任・「うるまの島の人ここに放たれきて、この人の物いふをききも知らでなむあるといふころ、返事せぬにつかはしける」)

上の2首の恋歌は、ともに相手に対する不満を述べている。「怨むれど…」詠では、どれほど恨み恋慕しても、そのことを知らないようである冷淡さを責め、「おぼつかな…」詠

では、手紙の返事を返して来ない女に対して、まるで「うるまの人」のように詠者の使う言葉を知らないようだと言っている。ともに実際は知っているのにまるで知らないようだと言っている。内実と表層の差異を取り立てている。

・ みな人の知りがほにして知らぬかなかならず死ぬる習ひありとは

(新古今集・哀傷・832・前大僧正慈円・「題しらず」)

この歌では、人々が、命の無常を本当は知っていないのに、それをわかったようであることへの不満を詠んでいる。

・ わが宿を何時馴らしてか檜の葉を馴らし顔には折りにをこする

(後撰集・雑二・1182・俊子・「枇杷大臣、用侍て、檜の葉を求め侍ければ、千兼があひ知りて侍ける家に取りにつかはしたりければ」)

この歌で「馴らし顔なり」は、実際は馴れ親しんでいないのに、馴れ馴れしい様子だと、相手をとがめている。この歌では、内実と表層の差異というよりは、実際と振る舞いの差異を表現しているといったほうがよいだろう。

・ 人知れぬ人待ち顔に見ゆめるは誰が頼めたる今宵なるらん

(拾遺集・雑恋・1220・小野宮太政大臣・「まだ少将に侍ける時、采女町の前をまかりわたりけるに、明日香の采女ながめ出だして侍けるに遣はしける」)

この歌の「人待ち顔なり」、『角川古語大辞典』が記す、「内面的なものの発露としての場合」に当てはまるだろう。高木氏も、「見える姿と内実との間に落差がほとんどないと思われる例もある」と記している。

b 詠者自身について用いたもの

・ 見る時は事ぞともなく見ぬ時は事有顔に恋しきやなぞ

(後撰集・恋一・588・読み人しらず・「題しらず」)

- ・ながめつつことありがほに暮らしてもかならず夢に見えばこそあらめ

(後拾遺集・恋二・679・相模・「時時物言ふ男、暮れゆくばかりなど言ひて侍りければよめる」)

この2首の恋歌は、ともに「ことありがほなり」を用いている。

「見る時は…」詠は、「見る時」と「見ぬ時」を対比し、「事ぞともなく」と「事有顔に」を対比して、それを互い違いに結びつけている。実際と心理との差異を取り立てた歌で、自分自身の心を自分で訝る気持ちを詠んでいる。

「ながめつつ…」詠は、男が「暮れゆくばかり」と言って約束した言葉を信じない詠者が、逢瀬など期待していないのに、「ことありがほ」に夕暮れまで過ごす空しさを詠んでいる。

この2首は、実情がどうであるのかを自分でよく知っていながら、心がそれとずれてしまうことの差異を詠んだ歌といえる。

- ・数ならぬ身にも心のありがほにひとりも月をながめつる哉

(千載集・恋三・819・遊女戸戸・「藤原仲実備中守にまかれりける時、具して下りたりけるを、思薄くなりてのち月を見てよみ侍りける」)

- ・数ならぬ身をも心の持ちがほに浮かれては又かへり来にけり

(新古今集・雑下・1748・西行法師・「題知らず」)

この2首はよく似ている。ともに、自分を対象化して、「数ならぬ身」で風流な「心」を持たない者と認識しながら、「心のありがほに」「心の持ちがほに」行動してしまうことの矛盾を詠んでいる。

- ・…… あはれをかけて 問ふ人も 波にただよふ 釣舟の 漕ぎ離れにし よなれども 君に心を かけしより しげき愁ゑも 忘れ草 忘れ顔にて 住の江の 松の千歳の はるばると 梢はるかに 栄ゆべき ときはの陰を 頼むにも ……

(千載集・雑下・一一六三・待賢門院の堀河・「同じ御時百首歌たてまつりける時の長歌」)

- ・をしかへし物を思ふはくるしきに知らず顔にて世をや過ぎまし

(新古今集・雑下・1767・摂政太政大臣・「題しらず」)

・秋風はすごく吹くども葛の葉のうらみ顔には見えじとぞ思ふ

(新古今集・雑下・1821・和泉式部・「返し」)

この3首に用いられた「忘れ顔なり」「知らず顔なり」「うらみ顔なり」は、高木氏が、「見える姿と内実との間に落差がほとんどないと思われる例もある」というのに当てはまるものと思われる。ここでは、内実と表層の差異ではなく、他者からどう見られるかについての意識が看取できるだろう。

おわりに

八代集の和歌における「～がほなり」型形容動詞は、自然の事物について用いられるものと、人に用いられるもの到大別され、後者は、さらに、他者についての用例と、詠者自身についての用例に分けられることを示した。

自然の事物について用いる使用法は、和歌にしばしば見られる、心のないものを擬人化して表現する傾向に添うものであり、そのことによって、事物に詠者の思いを投影している歌も散見した。

詠者以外の他者について用いられた例では、すでに指摘されている内実と表層の差異への意識が看取され、相手に対する不満の表現に多く用いられていた。詠者自身について用いられた例では、自分を対象化して用いる例が多く、また、他者の目を意識した歌も複数見られた。

以上検討した和歌で、「～がほなり」型形容動詞は、一首の基本的な趣向と結びついているものが多く、それ自体が技巧的で修辭的な表現になっている。これは、散文よりも和歌に似つかわしい性格であるといえるだろう。

第2章 個別語彙の研究

1 「あだなり」

はじめに

『八代集総索引』によれば、八代集における形容動詞「あだなり」の用例は、38例が検出される。その歌集ごとの用例数は、下記の通りである。¹⁰

古今集……7首	後撰集……9首
拾遺集……8首	後拾遺集…3首
金葉集……3首	詞花集……なし
千載集……3首	新古今集…5首

上記のように、「あだなり」は、古今集、後撰集、拾遺集の三代集に用例が比較的多く、後拾遺集以後になると、相対的に少なくなっている傾向がみられる。

次に、部立ごとの用例数を示すと次の通りである。

四季歌…14首（春7 夏0 秋6 冬1）
雑春歌…1首
物名歌…5首
哀傷歌…4首
羈旅歌…2首
恋歌 …8首
雑恋歌…2首
雑歌 …1首
釈教歌…1首

¹⁰ 拾遺集の1213番歌には「あだなり」が2語用いられているが、これを2首として数える。また後撰集の82番歌は、拾遺集の1054番歌と同一の歌であるが、これもそのまま数えている。

以上を、さらに、四季、雑春、物名を、(i) 事物の歌とまとめ、哀傷、羈旅、恋、雑恋、雑、釈教歌を、(ii) 人事の歌というようにまとめると、用例数は次のようになる。

(i) 事物の歌…20 首

(ii) 人事の歌…19 首

このように事物の歌と人事の歌で、「あだなり」はほぼ同じくらい使われていることがわかる。これは、「あだなり」が主題としても表現としても、多面的に用いられていることを想像させる。

『日本国語大辞典』では、「あだなり」について、次のように解説している。

○あだ【徒】〔形動〕

表面だけで、実のないさま。まれに「の」を伴う用法もある。

- (1) 空虚なさま。むだなさま。実を結ばないさま。
- (2) 一時的でかりそめなさま。はかなくもろいさま。
- (3) いいかげんでおろそかなさま。粗略なさま。
- (4) 浮薄なさま。不誠実で浮気っぽいさま。

以下、『日本国語大辞典』が掲げる意味を目安として参照しながら、八代集の和歌における「あだなり」の用例について検討し、概観を試みたい。

1

先に示したように、部立から見ても、「あだなり」は、自然などの事物にも、恋などの人事にも、多く用いられている。さらに、発想や表現の面からみると、事物と人事にまたがった用いられ方も多くみられる。

そこで、まず、部立や歌の主題に関わらず、どのような対象について「あだなり」が用いられているのかを概観してみたい。用例の数がかなり多いので、自然などの事物について用いられた例と、人について用いられた例とに大別して検討する。

① 自然などの事物について

「あだなり」と表現される事物としては、桜の花が最も多い。それを例示してみよう。

- ・ 枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ
(古今集・春・81・菅野高世・「東宮雅院にて桜の花の御溝水に散りて流れけるを見てよめる」)
- ・ ひさしかれあだに散るなと桜花瓶に挿せれどうつろひにけり
(後撰集・春・82・貫之・「桜の花の瓶にさせりけるが散りけるを見て、中務につかはしける」)
- ・ あだにこそ散ると見るらめ君にみなうつろひにたる花の心を
(後撰集・恋一・541・読人しらず・「返し」)
- ・ 定なくあだに散りぬる花よりはときはの松の色をやは見ぬ
(後撰集・恋一・596・源信明・「まからずなりにける女の、人に名たちければつかはしける」)

桜の花は、上の4首に「あだにちりにし」「あだに散るな」「あだにこそ散る…」「あだに散りぬる」と詠まれるように、咲いてまもなく散ってしまう花である。ここでの「あだなり」は、「一時的でかりそめなさま。はかなくもろいさま」(日本国語大辞典)の意と判断される。

- ・ あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり
(古今集・春・62・読人しらず・「桜の花の盛りに、久しく訪はざりける人の来たりける時によみける」)
- ・ あだなれど桜のみこそ旧里の昔ながらの物にはありけれ
(拾遺集・春・48・貫之「宰相中将敦忠朝臣家の屏風に」)

上の2首では、「散る」ということを詠まずに、桜について「あだなり」を用いている。この「あだなり」は、「はかなくもろいさま」に加えて、「浮薄なさま。不誠実で浮気っぽいさま」(日本国語大辞典)の意味も表しているものと思われる。

- ・ さく花は千種ながらにあだなれど誰かは春を怨はてたる
(古今集・春・101・藤原興風・「寛平御時后宮歌の歌」)
- ・ 我はけさ初にぞ見つる花のいろをあだなる物といふべかりけり
(古今集・物名・436・貫之・「薔薇」)
- ・ をみなへし花の心のあだなれば秋にのみこそあひわたりけれ
(後撰集・秋・276・読人しらず・「おなじ御時の女郎花合に」)
- ・ 句をば風に添ふとも梅の花色さへあやなあだに散らすな
(拾遺集・春・31・大中臣能宣・「題しらず」)
- ・ 野辺ごとにをとづれわたる秋風をあだにもなびく花すすき哉
(新古今集・秋上・350・八条院六条・「撰政太政大臣、百首歌よませ侍けるに」)

上記の歌は、桜以外の花、あるいは花一般を詠んでいる。

「さく花は…」詠は、春のすべての花の「散りやすくはかない」さまを「あだなり」で表現している。梅の花を詠んだ「句をば…」詠の「あだなり」も同じ意味であろう。

「我はけさ…」詠の「花」について、新大系は「私は今朝はじめて「さうび」の花を見たよ」と解釈しているが、これは物の名の歌であるから、バラに限定する必要はないだろう。今朝初めて見た花が、その日のうちに散ったか萎れたかしたものと思われ、その「はかなくもろいさま」を「あだなるも物」と表現していると考えられる。

「をみなへし…」「野辺ごとに…」は、それぞれ女郎花、薄を、「あだなり」で表現している。ここでは、「浮薄なさま。不誠実で浮気っぽいさま」の意で用いられているものと考えられる。

「露」についても、「あだなり」を用いた歌が複数見られる。

- ・ 露をなどあだなる物と思けむわが身も草にをかぬ許を
(古今集・哀傷歌・860・藤原惟幹・「身まかりなんとて、よめる」)
- ・ 千年まで君がつむべき菊なれば露もあだには置かじとぞ思ふ
(金葉集・秋・242・修理大夫頭季・「鳥羽殿前裁合に、菊をよめる」)
- ・ あだにちる露の枕にふしわびてうづらなくなりとこの山風

(新古今集・秋下・514・皇太后宮大夫俊成・「題しらず」)

・ あだなりと思ひしかども君よりはもの忘れせぬ袖のうは露

(新古今集・恋五・1342・道信朝臣・「題しらず」)

「露をなど…」詠、「あだなりと…」詠には、露を「あだなり」と思っていた、という内容が含まれている。露は、すぐに落ちてしまうし、日の光によって消えてしまう存在である。「あだにちる…」の歌には、そのような露の「一時的でかりそめなさま。はかなくもろいさま」(日本国語大辞典)が、端的に表現されている。「千年まで…」詠では、長寿を願う菊の上の露について、はかなくもろい露についての常識を逆転させて、「あだには置かじ」と「君」の長寿を祝っている。

「露」には比喩的な意味もあるので、それに応じて「あだなり」の意味も複雑になることが多いようである。「露をなど…」詠では、はかなくもろいところから、「無常だ」という意味が含まれている。

「あだにちる…」詠の「露」は涙の比喩となっていて、「あだにちる」は、「露がわけもなく散る意に、いくら泣いても思う相手は来ず、甲斐がない意を兼ね」(新大系)ている。

「あだなりと…」詠では、「もの忘れ」と関連させて「浮薄なさま。不誠実で浮気っぽいさま」(日本国語大辞典)の意も表している。

「あだなり」は、さらに多様な事物について用いられている。それを「あだなり」の表す意味ごとに見ていこう。

・ 蜘蛛の糸のとぢめやあだならんほころびわたる藤袴かな

(金葉集・秋・236・神祇伯頭仲・「蘭をよめる」)

この歌の「あだなり」は、「蜘蛛の糸のとぢめ」の「はかなくもろいさま」(日本国語大辞典)を表現している。

・ 霜枯れの草のとざしはあだなれどなべての人を入るものかは

(後拾遺集・冬・396・大中臣能宣朝臣・「屏風絵に、十一月に女の許に人の音したる」)

この歌では、「草で閉ざされた戸は、何の役にも立たないものですが…」(新大系)と解釈されているように、「あだなり」は「はかなくもろいさま」「粗略なさま」の意を表しているが、「なべての人を入るる」との関係で、「不誠実で浮気っぽいさま」の意も表している。

- ・ あだなりと我は見なくにもみち葉を色のかはれる秋しなれば

(後撰集・秋・390・読人しらず・「題しらず」)

- ・ 君が音にくらぶの山の郭公いつれあだなる声まさるらん

(後撰集・恋四・867・読人しらず・「題しらず」)

「あだなりと…」詠では、紅葉が色が変わるところから、「一時的でかりそめなさま」「不誠実で浮気っぽいさま」の意を表している。

「君が音に…」詠では、郭公が待たせて気をもませるものであるところから、「不誠実で浮気っぽいさま」の意を表している。

- ・ 名にしおはばあだにそ思たはれ島浪の濡衣幾夜着つらん

(後撰集・離別 羈旅・1351・読人しらず・「たはれ島を見て」)

この歌では、「たはれ島」という名から「浮気っぽいさま」を感じて「あだにぞ思」と詠んでいる。

- ・ あだにかく落つと思ひしむばたまの髪こそ長き形見なりけれ

(後拾遺集・哀傷・563・中納言定頼母・「二条前太政大臣の妻なくなり侍のち、落ちたる髪を見てよみ侍りける」)

この歌の「あだなり」は、落ちた髪の「はかなくもろいさま」を表現するとともに、二条前太政大臣の妻の死去との関連で、無常である意も表している。

- ・ 松が根の枕もなにかあだならん玉の床とてつねのそこかは

(千載集・羈旅歌・510・崇徳院御製・「百首歌めしける時、旅歌とてよませたまうける」)

この歌の、「あだなり」は、松の根元の旅枕について「粗略なさま」の意を示しながら、「つねのどこ」との対比で、「はかなくもろいさま」、無常であるさまの意を表している。

・ あだなりなとりのこほりに下りゐるは下より解くる事は知らぬか

(拾遺集・物名・385・重之・「なとりのこほり」)

・ 露をだにいまは形見のふちごろもあだにも袖をふく嵐かな

(新古今集・哀傷歌・789・藤原秀能・「父秀宗身まかりての秋、寄風懐旧といふことをよみ侍ける」)

「あだなりな…」詠では、氷の上にとまっている鳥の考えの浅さを詠み、「露をだに…」では、袖の露を吹き落としてしまう嵐の思いやりのなさを詠んでいる。この2首の「あだなり」は、「いかげんでおろそかなさま。粗略なさま」(日本国語大辞典)を表しているものと見られる。

2

② 人について

人について用いられた「あだなり」は、「浮薄なさま。不誠実で浮気っぽいさま」(日本国語大辞典)の意の用例と、無常な命について「はかなくもろいさま」の意を表す用例とに分けられる。

a 「浮薄なさま。不誠実で浮気っぽいさま」

・ あだなりし人の心にくらぶれば花もときはの物とこそ見れ

(金葉集・恋上・411・摂政左大臣・「寄花恋の心をよめる」)

・ こりぬらむあだなる人に忘られてわれならばさむ思ためしは

(後拾遺集・雑2・931・藤原長能・「元輔文通はしける女をもろともに文などつかはしけるに、元輔に会ひて忘れにけりと聞きて、女のもとにつかはしける」)

この2首では、「あだなりし人」「あだなる人」というように、「あだなり」が直接人を修飾している。「あだなりし…」詠では、女の立場から、不誠実な男の心を「あだなり」と表現して、それを花と比べている。「こりぬらむ…」詠では女に逢った後に忘れた男のことを「あだなり」と表現している。

・渡りてはあだになるてふ染河の心づくしになりもこそすれ

(後撰集・恋六・1047・よみ人しらず・「返し」)

・あだなりとあだにはいかが定むらん人の心を人は知るやは

(拾遺集・雑恋1213・大中臣能宣・「題しらず」)

「渡りては…」の「染河」は、男から詠者(女)に贈られた歌に「思ひ染め河渡りなば」(あなたを思い初めて渡って行ったならば)(新大系)とあったのを受けている。「渡りてはあだになるてふ染河」は、男が女に思い染めて逢瀬を遂げると浮気になると言われているの意で、「あだなり」は「不誠実で浮気っぽいさま」の意を表している。

「あだなりと…」詠は、「あだなり」を反復して用いている。前の「あだなり」は「浮気っぽい」の意、後の「あだなり」は「いいかげんでおろそかなさま」(ともに日本国語大辞典)の意である。女から浮気だと言われた男が不満をいった歌である。

・年をへて花のたよりに事とはばいとどあだなる名をや立なん

(後撰集・春・78・かねみのおほきみ・「忘れ侍りにける人の家に、花を乞ふとて」)

この歌は、忘れて通っていなかった女の家「通りすがりに桜の花にかこつけて逢いたいと言った」(新大系)男が、これまでの不誠実さに加えて、さらにいいかげんな男と思われるかもしれないと自虐的にいったものである

・我が心あやしくあだに春来れば花につく身となどてなりけん

(拾遺集・物名・404・大伴黒主・「つぐみ」)

- ・ あだなりとひとときくる野辺しもぞ花のあたりを過ぎがてにする

(拾遺集・物名・373・輔相・「ひとときく」)

「我が心…」詠の「花につく」は「花に執着する」意(新大系)。花はそれ自体に「あだなり」というイメージがあり、それに執着してしまう「我が心」について、「浮ついて」(新大系) いると感じている。

「あだなりと…」詠の初・二句は、「移り気だ、と他の人の悪口を言いながらやって来た」(新大系) の意で、「あだなり」は、その「浮気っぽいさま」の意と、花に詠者自身が心引かれる浮ついたさまと、両方の意を表している。

b 「はかなくもろいさま。無常のさま」

- ・ 花よりも人こそあだになりにつれいづれを先に恋ひんとか見し

(古今集・哀傷歌・850・紀茂行・「桜を植へてありけるに、やうやく花咲きぬべき時に、かの植へける人、身まかりにければ、その花を見てよめる」)

- ・ 変りゆくけしきを見ても生ける身の命をあだに思ひけるかな

(千載集・恋五・926・殷富門院大輔・「題しらず」)

- ・ 命をばあだなるものと聞きしかどつらきがためは長くもあるかな

(新古今集・恋五・1364・読人しらず・「題しらず」)

「花よりも…」詠は、花を植えた人が死んだことを踏まえて、はかないと言われる花よりも、植えた人のほうがはかなくなってしまうと嘆いている。

「変りゆく…」詠の「変りゆくけしき」は、「恋人の心変りしてゆく様子」(新大系)。それを見てつらく思っても死なないでいることについて、これまでは命というものを「あだに」思ってきたことだが、そうではなかったのだと嘆いている。¹¹

「命をば…」詠も、つらさに負けずに生き延びてしまう命を嘆く。人の命を「はかなく

¹¹ この歌の下句は、「生きている身のこの命をむだなものだと思ふことだよ」(新大系)、「生きている自分の身の命を恨みに思ったことでしたよ」(古典叢書) というように解釈されているが、「(～と)思ひけるかな」は、「これまで～と思っていたが、それは誤りだった」の意で用いられる表現なので、恋人の不実によって死ぬほど苦しいのに、死なないでいるとは、これまで命をはかないと思っていたのは誤りだった」と解するのが妥当である。

もろい、無常だ」と思っていたが、薄情な相手から受ける苦しみには簡単に死なないものなのだと詠んでいる。¹²

3

以上のように、「あだなり」は、さまざまな事物や人について用いられ、その意味も多様であり、二つの意味合いが重なっているような用いられ方も多く見られた。

次に、歌を詠む際の発想、趣向に着目して、一首の和歌を組み立てるうえで「あだなり」がどのように用いられているのかを概観したい。なお、二度目の引用になる和歌については、作者名・詞書を省略する。

八代集の用例では、何かについて、〇〇は「あだ」である、「あだ」に〇〇する、「あだ」な〇〇、というように単純に言うことを避けて、打消表現・反語表現や逆接の表現などによって、「あだ」ではないということを歌っているものが散見する。

それを列挙してみよう。

- ・うれしくぞ名を保つだにあだならぬ御法の花に身をむすびける

(千載集・釈教歌・1 2 1 4・前大僧正快修・「陀羅尼品の受持法華名者、福不可量、何況擁護具足受持といふわたりを誦して、持経者の結縁たのもしくや侍りけん、よみ侍りける」)

- ・のち蒔きのをくれて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞ聞く

(古今集・物名・4 6 7・大江千里・「粽」)

- ・千年まで君がつむべき菊なれば露もあだには置かじとぞ思ふ(金葉集・秋・2 4 2)

- ・あだなりと我は見なくにもみぢ葉を色のかはれる秋しなれば(後撰集・秋・3 9 0)

上の4首では、打消の助動詞「ず」、打消推量の助動詞「じ」、ク語法を伴って、「あだ」

¹² この歌の下句は、「苦しい恋のそのせいで長く思われることだな」(新大系)、「人が薄情であることの苦しみゆえには、長く思われることよ」(新編日本古典文学全集)のように、命が心理的に長く感じられるという意味で解釈されることがあるが、「人の薄情な仕打ちのためには長いものだった」と解するのが妥当である。「いっそ死んでしまいたいと思うのに、死にもしないことをかこった歌である」(新古今和歌集全注釈)と解される。

ではない「御法の花」「たのみ」「露」「秋」を詠んでいる。このうち、「露」「秋」はしばしばはかないものと思われているから、その常識を反転させる詠み方になっている。

- ・松が根の枕もなにかあだならん玉の床とてつねのとこかは（千載集・羈旅歌・510）

この歌では、「なにか～ん」という反語表現を用いて、粗略なものと思われている松の根元の旅枕を、豪華な「玉の床」だって無常であることを引き合いにして、「あだ」ではないと詠んでいる。

- ・あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり（古今集・春・62）
- ・あだなれど桜のみこそ旧里の昔ながらの物にはありけれ（拾遺集・春・48）
- ・霜枯れの草のとざしはあだなれどなべての人を入るものかは
（後拾遺集・冬・396）
- ・あだにこそ散ると見るらめ君にみなうつろひにたる花の心を（後撰集・恋一・541）
- ・命をばあだなるものと聞きしかどつらきがためは長くもあるかな
（新古今集・恋五・1364）

この5首の歌では、「こそ～已然形」の構文や、接続助詞「ど」によって、桜の花、霜枯れの草の戸ざし、人の心、人の命は、「あだ」だと思われているけれども、実際はそうではない、ということ詠んで、やはり常識を逆転させている。

- ・あだにかく落つと思ひしむばたまの髪こそ長き形見なりけれ（後拾遺集・哀傷・563）
- ・あだなりと思ひしかども君よりはもの忘れせぬ袖のうは露
（新古今集・恋五・1342）
- ・露をなどあだなる物と思けむわが身も草にをかぬ許を（古今集・哀傷歌・860）
- ・変りゆくけしきを見ても生ける身の命をあだに思ひけるかな（千載集・恋五・926）

この4首では、落ちた髪、露、人の命を、これまで「あだ」だと思っていたが、それは間違いであったと、これまでの自分の考えを相対化して詠んでいる。

- ・花よりも人こそあだになりにつれいづれを先に恋ひんとか見し

(古今集・哀傷歌・850・紀茂行・「桜を植へてありけるに、やうやく花咲きぬべき時に、かの植へける人、身まかりにければ、その花を見てよめる」)

- ・あだなりし人の心にくらぶれば花もときはの物とこそ見れ

(金葉集・恋上・411・撰政左大臣・「寄花恋の心をよめる」)

上の2首は、人の命のはかなさや、人の心の変わりやすさと、花のはかなさを比べて、花はそれほど「あだ」ではないと詠んでいる。

花、露、人の心、人の命について、それが「あだ」であることは常識であるから、それをそのまま詠むと、平凡な歌になってしまう。そこで、その常識を反転させて、新しい発想に結びつけようとしている歌であると言える。また、「あだなり」が人についても事物についても用いることができることを利用した詠み方であると言えるだろう。

- ・あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり (古今集・春・62)

- ・をみなへし花の心のあだなれば秋にのみこそあひわたりけれ (後撰集・秋・276)

- ・野辺ごとにとつれわたる秋風をあだにもなびく花すすき哉

(新古今集・秋上・350)

- ・あだなりなとりのこほりに下りみるは下より解くる事は知らぬか

(拾遺集・物名・385)

- ・露をだにいまは形見のふちごろもあだにも袖をふく嵐かな

(新古今集・哀傷歌・789)

上の5首では、桜、女郎花、薄、鳥、嵐を、擬人法で表現し、それを「あだなり」と結びつけて一首を組み立てている。これも、人にも事物にも用いることができる「あだなり」の性質を生かした詠み方である。

おわりに

八代集の和歌において、「あだなり」は、さまざまな事物について、多様な意味合いで用

いられている。それと同時に、人の心の浮薄さ、人の命のはかなさにも、数多く用いられている。

さらに、それぞれの和歌の発想の面から見ると、単に何かを「あだなり」と表現するだけでなく、打消、反語、逆接などの表現を用いて、「あだ」だと思われているものが実はそうではない、というように常識を反転させる方向で、多くの歌が詠まれていた。

また、事物にも人にも使える「あだなり」の適応範囲の広さを生かして、人と事物を比べたり、事物を人に准えたりする発想も多用されていた。

2 「あはれなり」

はじめに

八代集のそれぞれの勅撰集において「あはれなり」はどのように使用されているのか。次に示すのは、歌集ごとの、「あはれなり」を用いた歌の数／その歌集の総歌数、その比(%)を示したものである。

古今集	0 / 1111	0 (%)
後撰集	2 / 1425	0.1 (%)
拾遺集	3 / 1360	0.2 (%)
後拾遺集	7 / 1229	0.6 (%)
金葉集	2 / 717	0.3 (%)
詞花集	3 / 420	0.7 (%)
千載集	12 / 1290	0.9 (%)
新古今集	11 / 2005	0.6 (%)

全体として使用数が少ないので、単純な比較はできないが、三代集の歌には「あはれなり」はとても少なく、それに比べ、後拾遺集・詞花集・千載集・新古今集の和歌には比較的多く用いられていることがわかる。また、千載集・新古今集で歌数そのものが多いことも注目される。

次に、部立ごとの歌の数を整理してみると、左記のようになる。

春	0	夏	3	秋	3	冬	5
恋	8						
雑一	4	(うち、拾遺集と詞花集に1首重複)					
雑春	1	別	1	旅	3	哀傷	1
物名	1						

上のうち、雑春の1首と物名の1首は、どちらも四季の歌に近い詠み方の和歌であるの

で、四季歌として数え、「別」「旅」「哀傷」を「その他」として雑歌と合わせて数えると、

四季の歌	13
恋の歌	8
雑その他の歌	19（1首重複、以下18首として扱う）

となる。これをさらにまとめて四季の歌と人事の歌に分けると、前者は13首、後者は26首となって、四季の歌よりも人事の歌のほうに、「あはれなり」が多く用いられていることがわかる。

『日本国語大辞典』は、形容動詞「あはれなり」の語義について、次のように記している。

〔名〕（形動）として。

心の底からのしみじみとした感動や感情、また、そういう感情を起こさせる状況をいう。親愛、情趣、感激、哀憐、悲哀などの詠嘆的感情を広く表わすが、近世以降は主として哀憐、悲哀の意に用いられる。

- (1)心に愛着を感じるさま。いとしく思うさま。また、親愛の気持。
- (2)しみじみとした風情のあるさま。情趣の深いさま。嘆賞すべきさま。
- (3)しみじみと感慨深いさま。感無量のさま。
- (4)気の毒なさま。同情すべきさま。哀憐。また、思いやりのあるさま。思いやりの心。
- (5)もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。
- (6)はかなく無常なさま。無常のことわり。
- (7)（神仏などの）貴いさま。ありがたいさま。
- (8)殊勝なさま。感心なさま。→あっぱれ。

上のような語義の中には、(2)(5)のように四季の景物（特に秋・冬）に当てはまるものもあるが、大体において人事の歌に当てはまるもののほうが多いように予想される。

以上の概観を踏まえ、「あはれなり」が和歌においてどのような意味で用いられていたのかを知るために、先に示した数の多い順から、まず、雑歌その他（離別・羈旅・哀傷）に分類された歌を概観し、次に、同じ人事の歌である恋歌を取り上げ、最後に四季の歌を取

り上げることとしたい。

1

○ 雑歌その他における「あはれなり」

雑歌その他の歌で使われた「あはれなり」の意味は、『日本国語大辞典』に示された語義のうち、(2)(3)(5)(6)(8)にあたる。その中でも(5)の「もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。」と、(6)の「はかなく無常なさま。無常のことわり。」の用例が多いので、その用例から概観する。

◇もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。

- ・思ひいでもなきふるさとの山なれどかくれゆくはたあはれなりけり

(拾遺集・別・350・ゆげのよしとき・「帥伊周つくしへまかりけるに、かはじりはなれ侍りけるによみ侍りける」)

この歌では、都の山が「船が港から離れて行くに従って、遠ざかり隠れてゆく」(新大系)のを見て、山(都)との別れを悲しむ気持ちを「あはれなり」で表現している。

- ・かくばかりあはれならじをしぐるとも磯の松がねまくらならずは

(千載集・羈旅・520・読人不知・「海辺時雨といへるころをよめる」)

- ・あはれなる野じまがさきのいほりかな露おく袖に浪もかけけり

(千載集・羈旅歌・531・皇太后宮大夫俊成・「(家に百首歌よませ侍りける時、たびの歌とてよみ侍りける)」)

この2首はともに旅の歌であり、「磯の松がね」を枕とする「あわれに心細い思い」(新大系)と、「野じまがさきのいほり」での旅泊の「しみじみともの悲しい」(同)様子を、それぞれ表現している。

- ・かくてだになほあはれなるおく山に君こぬよよをおもひしらなん

(千載集・雑中・1062・道命法師・「山寺にこもりみて侍りけるころ、雨ふりて心ぼそかりけるに、人のまうできて歌などよみ侍りけるついでによめる」)

この歌では、山寺に住む作者が、その奥山の寂しさ、心細さを、「あはれなる」と表現している。

- ・いにしへにふりゆく身こそあはれなれむかしながらのはしをみるにも

(後拾遺集・雑四・1074・伊勢大輔・「上東門院住吉にまゐらせたまひてかへさに人人うたよみ侍けるに」)

- ・すぎきける月日のほどもしられつつこのみを見るもあはれなるかな

(金葉集・雑上・563・上東門院・「御返し」)

この2首は、ともに、作者自身(身)の老いを主題として、それに対する寂しさや悲しみを、「あはれなり」を用いて表現している。

- ・わけわびていとひし庭のよもぎふもかれぬとおもふはあはれなりけり

(千載集・雑中・1145・法眼兼覚・「題しらず」)

この歌について、新大系は、「踏み分けわずらって厭っていた庭の雑草も、枯れたと思うのは哀れに感じるものだ。」と解釈している。どんなものでもそれが失われるのは悲しいということを「あはれなり」で表現している。

◇はかなく無常なさま。無常のことわり。

- ・さだめなきよをうきくもぞあはれなるたのみし君がけぶりとおもへば

(金葉集・雑下・622・藤原資信・「やうめい門院かくれおはしましておほんわざのこともはてて又の日、くものたなびけるをみてよめる」)

この歌について、新大系は、「無常な世を憂く思つて眺めやると、空の浮雲がしみじみと

哀れをさそうことだ。頼りに思っていた方の火葬の煙と思うと。」と解釈している。陽明門院の死を嘆く歌であるとともに、世の無常を「あはれなる」と感じている。

・人をとふかねのこゑこそあはれなれいつかわがみにならむとすらん

(詞花集・雑下・406・よみ人しらず・「人の四十九日の誦経文にかきつけける」)

・あはれなり我が身のはてやあさみどりつひには野辺の霞とおもへば

(新古今集・哀傷歌・758・小野小町・「題しらず」)

「人をとふ…」の歌では、「他人を弔う鐘の音」(新大系)を聞く悲しみとともに、「いつそれが我身のことになろうとしているのだろうか、もう今すぐのことであろう。」というように、世の無常を思う気持ちを、「あはれなり」で表現している。また、「あはれなり…」の歌でも、作者は、他人の葬送から、「わが身の最後も、茶毘の煙、ついには春の野辺にたなびく浅緑色の霞となってしまうのかと」(新大系)想像して、そのように世の無常を思う気持ちを、やはり「あはれなり」で表現している。

・あれわたる秋の庭こそ哀なれまして消えなん露の夕ぐれ

(新古今集・雑上・1561・皇太后宮大夫俊成・「千五百番歌合に」)

ここでは、秋の庭の荒れた様子から、自分が世を去る時の庭の様子を想像して、その無常への感慨を「あはれなり」によって表している。

・あはれなり昔の人をおもふには昨日の野辺に御ゆきせましや

(新古今集・雑上・1438・一条左大臣・「円融院、くらみさり給ひてのち、ふな岡に子日したまひけるに、まゐりて、朝にたてまつりける」)

この歌を新編日本古典文学全集『新古今和歌集』は、「千代を祝うはずの子の日に、昔、行を共にした人をしのぶ御幸になったことかと、退位した円融院の心情に同情した贈歌というように解される。」と説明している。世の変化の大きさに無常を感じて「あはれなり」と表現したものと推測される。

以上のように、雑その他の歌 18 首のうち、悲しさ・寂しさを「あはれなり」で表現し

たものが7首、無常の思いを「あはれなり」で表現したものが5首見つけられた。後者は前者に含まれるものとも言え、八代集の雑その他の歌の「あはれなり」が、主として悲しく寂しい思いを表すために用いられていることがわかる。

以下、残り6首の歌で、「あはれなり」がどういう意味で用いられているのか、その用例を確認する。

- ・つねよりもけふのかすみぞあはれなるたきぎつきにしけぶりとおもへば
(後拾遺集・雑六(釈教)・1180・前律師慶暹・「(山階寺の涅槃会にまうでてよみ侍ける)」)
- ・暁のゆふつけどりぞあはれなるながきねぶりをおもふ枕に
(新古今集・雑下・1810・式子内親王・「百首歌に」)

この2首では、「かすみ」「暁のゆふつけどり」という、それ自体は日常的なものに対して、「たきぎつきにしけぶりとおも」「ながきねぶりをおもふ」ことによって、「(2)しみじみと感慨深いさま。感無量のさま。」(日本国語大辞典)を感じ、その特別な感慨を「あはれなり」と表現している。

- ・なほざりのそらだのめせであはれにもまつにかならずいづる月かな
(後拾遺集・雑一・862・小弁・「こむといひつつこざりける人のもとにつきのあかりければつかはしける」)

この歌は、「そらだのめ」する男と、「まつにかならずいづる月」を対比し、後者について、「(8)殊勝なさま。感心なさま。」(日本国語大辞典)を感じ取って「あはれに」と表現している。

- ・ひとりのみあはれなるかと我ならぬ人にこよひの月をみせばや
(千載集・雑上・986・和泉式部・「(題不知)」)
- ・夏かりのあしのかりねもあはれなりたまえの月の明がたの空
(新古今集・羈旅・932・皇太后宮大夫俊成・「守覚法親王家に、五十首歌よませ侍りける旅歌」)

- ・をりにあへばこれもさすがにあはれなり小田のかはづの夕暮の声

(新古今集・雑上・1477・前大納言忠良・「百首歌たてまつりし時」)

この3首に用いられた「あはれなり」は、「しみじみとした風情のあるさま。情趣の深いさま。嘆賞すべきさま。」(日本国語大辞典)に当てはまるものと思われる。ただし、そこで嘆賞されているのは、一人で眺めた秋の月、夏刈りの蘆を敷いての旅寝、夕暮れに田で鳴く蛙の声であり、寂しさを伴うものであることには注意したい。

2

○ 恋の歌の「あはれなり」

八代集の恋部において、「あはれなり」は8首の歌に用いられている。

その中で、「あはれなり」が、恋に直接関係のある思いを表現しているものは、次の2首である。

- ・ながらへてあらぬまでも事のはのふかきはいかにあはれなりけり

(後撰集・恋一・600・よみ人しらず・「をとこにつかはしける」)

- ・すぎてゆく月をもなにかうらむべきまつわが身こそあはれなりけれ

(後拾遺集・恋二・689・読人不知・「大弍高遠ものいひはべりけるをんなのいへのかたはらにまたしのびてもいふをんなのいへはべりけり、かどのまへよりしのびてわたりはべりけるをいかでかききけんをむなのもとよりつかはしける」)

「ながらへて…」詠では、愛情深い言葉をかけられた時のしみじみとうれしい気持ちを、「すぎてゆく…」詠では、別の女に通う男を待つみじめな思いを、それぞれ表現している。これに対し、他の6首では、恋の苦しみなどに限定されない、もっと一般的な心情を「あはれなり」によって表現している。

- ・われゆゑの涙とこれをよそにみばあはれなるべき袖のうへかな

(千載集・恋二・757・藤原隆信朝臣・「(題しらず)」)

・ あはれにもたれかはつゆもおもはましきえのこるべきわが身ならねば

(新古今集・恋三・1226・久我内大臣・「返し」)

上の2首では、「あはれなり」はともに、「(4)気の毒なさま。同情すべきさま。哀憐。また、思いやりのあるさま。思いやりの心。」(日本国語大辞典)に当たる気持ちを表現している。「われゆゑの…」詠では、自分につれなくされて男が流す涙を見て、かわいそうだと思う気持ちを、「あはれにも…」詠では、相手が患って死んだことを知って、それを哀れだと思う気持ちを、それぞれ表している。

・ 人はこで風のけしきもふけぬるにあはれにかりのおとづれてゆく

(新古今集・恋三・1200・西行法師・「題しらず」)

上の歌の、「かりのおとづれて」は、新大系が「「人はこで」の対。音を立てる意と訪れる意とを兼ねる。」と注に記すように、男が訪ねて来ないということと、訪れる雁を対比させて、その雁の「いじらしく、心にしみるさま。」(新大系)を、「あはれに」と表現している。

ここでの「あはれなり」は、先に見た、

・ なほざりのそらだのめせであはれにもまつにかならずいづる月かな

(後拾遺集・雑一・862・小弁)

という雑歌と同様に、「(8)殊勝なさま。感心なさま。」(日本国語大辞典)という語義に当てはまる。

・ としふれどあはれにたえぬ涙かな恋しき人のかからましかば¹³

¹³ この歌は、新編国歌大観では、2句を「あはれにたへぬ」としている。これは、「あはれに」を名詞＋格助詞と解して、「堪へぬ」の意と判断したものと思われる。けれども、ここでは、「絶えぬ」の意が妥当だろうと考え、新大系、岩波文庫『千載和歌集』等の本文に従って改めた。

なお、下の句の具体的な内容は、「恋しい人がこのように涙を流すのであったらよいのに。」(新大系)というように解釈されているが、『八代集抄』が「恋しき人のかく絶ぬ中ならましかば嬉しからん物をと也」と述べるように、「(この涙と同じくあの人を訪れも)途絶えないでいてくれたらよいのに」と解するのが妥当だろう。

(千載集・恋五・939・左京大夫頭輔・「(百首歌めしける時、恋歌とてよませたまうける)」)

この歌の「あはれに」は、「しみじみと悲しく」(新大系)、「逢えない悲しさに」(『久安百首全釈』)と、解釈されている。けれども、これは、長い年月が経ったにもかかわらず、涙が「たえぬ」ことに、「(8)殊勝なさま。感心なさま。」(日本国語大辞典)を感じてその気持ちを表現しているものと思われる。

・物おもへどもかからぬ人もあるものをあはれなりける身のちぎりかな

(千載集・恋五・928・円位法師・「(題しらず)」)

・あはれなりうたたねにのみみし夢のながきおもひにむすぼほれなん

(新古今集・恋五・1389・皇太后宮大夫俊成・「千五百番歌合に」)

この2首では、我が身の「ちぎり」や不合理な苦しみに対する嘆きが、「あはれなり」によって表現されている。「物おもへども…」詠では、「苦しい恋の体験にわが身の因果を嘆く」(新大系)気持ちを表現し、「あはれなり…」詠では、女との逢瀬が短い夢のようなものだったのに、そのことでこれからとても長く苦しむのだろうと、その不合理さを想像して嘆いている。ここでの「あはれなり」は、「(5)もの悲しいさま。さびしいさま。また、悲しい気持。悲哀。」(日本国語大辞典)に当てはまる。

以上のように、恋歌において、「あはれなり」は恋に直接結びつく心情を表現した例は少なく、多くの歌でもっと一般的な心情を表現している。後者の例では、雑歌その他の歌における「あはれなり」の使い方との共通点が多く見られる。

3

○ 四季の歌の「あはれなり」

八代集の四季の部において、「あはれなり」を含む歌は、11首。

これに、先にも述べた、四季歌の要素の強い、拾遺集・雑春の1首と、同じく拾遺集の物名歌を1首加えて、概観することにする。

「あはれなり」を用いた四季の歌には、純粹に自然についての感慨を表現した用例は少なく、人事の要素を含んだ歌や、対象を擬人化した歌が多く見られる。

- ・なでしこはいづれともなくにほへどもおくてさくはあはれなりけり

(後撰集・夏・203・太政大臣・「師尹朝臣のまだわらはにて侍りける、とこ夏の花ををりてもちて侍りければ、この花につけて内侍のかみの方におくり侍りける」)

たとえば、上の歌では、年少のわが子を遅れて咲くなでしこになぞらえて、その子を愛する気持ちを「あはれなりけり」と詠んでいる。この「あはれなり」は、「(1)心に愛着を感じるさま。いとしく思うさま。また、親愛の気持。」(日本国語大辞典)に当てはまる。

- ・しらぎくのうつろひゆくぞあはれなるかくしつっこそ人もかれしか

(後拾遺集・秋下・355・良暹法師・「いもうとにはべりける人のもとにをとここずなりにければ九月ばかりにきくのうつろひて侍けるをみてよめる」)

この歌では、色が移ろった白菊の花を見て、それを来なくなった男に重ね合わせて、その悲しみを「あはれなる」と表現している。

- ・ふけにけるわがよの秋ぞあはれなるかたぶく月は又もいでなん

(千載集・秋上・297・藤原清輔朝臣・「題しらず」)

- ・いそがれぬ年のくれこそあはれなれ昔はよそにききし春かは

(新古今集・冬・701・入道左大臣・「百首歌たてまつりし時」)

- ・おいのなみこえける身こそあはれなれことしも今は末の松山

(新古今集・冬・705・寂蓮法師・「(土御門内大臣家にて、海辺歳暮といへる心をよめる)」)

この3首では、自分自身の老いを、「ふけにけるわがよの秋」「いそがれぬ年のくれ」「おいのなみこえける身」と表現し、それについての感慨を、「あはれなり」を用いて表現している。

以上の4首に使われた「あはれなり」は、「(5)もの悲しいさま。さびしいさま。また、

悲しい気持。悲哀。」(日本国語大辞典)に当てはまる。

人事の歌(述懐歌・恋歌)の要素を含む、以上のような歌以外にも、四季の景物などを擬人化して、それに対する感慨を「あはれなり」と表現した歌も目立つ。

- ・おともせでおもひにもゆるほたるこそなくむしよりもあはれなりけれ
(後拾遺集・夏・216・源重之・「ほたるをよみはべりける」)
- ・あはれにもみさをにもゆる蛍かなこゑたてつべきこの世とおもふに
(千載集・夏・202・源俊頼朝臣・「題しらず」)
- ・あはれにもたえずおとするしぐれかなとふべき人もとはぬすみかに
(後拾遺集・冬・380・藤原兼房朝臣・「かつらの山庄にてしぐれのいたうふり侍ければよめる」)

上の3首では、蛍を、「おともせでおもひにもゆるほたる」「みさをにもゆる蛍」と擬人化し、時雨を、「とふべき人もとはぬ」こととの対比で、「たえずおとするしぐれ」と表現して、それぞれ擬人化された景物への同情や共感を詠んでいる。

- ・年ごとにさきはかはれど梅の花あはれなるかはうせずぞありける
(拾遺集・雑春・1013・よみ人しらず・「題しらず」)

上の歌では、毎年よい香りを漂わせる「梅の花」について、先の「あはれにも…」の歌の「たえずおとするしぐれ」と同様に、その「(8)殊勝なさま。感心なさま。」(日本国語大辞典)を賞美している。

- ・あしひきの山のこのはのおちくちばいろのをしきぞあはれなりける
(拾遺集・物名・417・輔相・「くちばいろのをしき」)
- ・あはれにもくれゆくとしのひかづかなかへらむことは夜のまとおもふに¹⁴
(千載集・冬・471・相模・「としのくれの心をよめる」)

¹⁴ この歌について、新大系は、「しみじみと心にしみて暮れてゆく年の終りの日数であるよ、年が改まるのはたった一夜のうちと思うと」と解するが、下の句は、「新しい年が戻って来るのはたった一夜のうちと思うけれど」の意だろう。

この2首では、朽ちていく落ち葉や、暮れていく年を取り上げ、それとの別れを悲しむ
思いを、それぞれ「あはれなり」で表現している。

これまで見てきたように、「あはれなり」を用いた四季歌は、人事の要素を含んだり、対
象を擬人化した歌が多く見られる。その中で、四季の景物そのものへの感慨を「あはれな
り」と表現したのは、次の2首だけである。

- ・あきふくはいかなるいろのかぜなれば身にしむばかりあはれなるらん

(詞花集・秋・109・和泉式部・「(題知らず)」)

- ・このごろのをしのうきねぞあはれなるうはげの霜よ下のこほりよ

(千載集・冬・432・崇徳院御製・「百首歌めしける時、よませ給うける」)

この2首の場合、「秋風」は身にしみるほど悲しいものとして詠まれ、冬の「鴛の浮き寝」
はとても寒くて気の毒なものとして、詠まれている。

このように、四季の景物でも「あはれなり」と表現されるものはあるが、形容動詞「あ
はれなり」が表す感情として辞書に示された、「心の底からのしみじみとした感動や感情」
「親愛、情趣、感激、哀憐、悲哀などの詠嘆的感情」(日本国語大辞典)は、やはり四季歌
の景物そのものよりも、人事の歌あるいは人事の要素を含む四季の歌に詠まれる事柄や状
況のほうに、よりなじみやすいということが確認できる。

4

○ 係助詞「は」「ぞ」「こそ」との共起

次に、八代集の和歌における「あはれなり」の用い方に関して、助詞との共起で目立つ
傾向に2つ触れておきたい。なお、本節で二度目に引用する歌は、詞書を省略する。

まず取り上げるのは、助詞「は」「ぞ」「こそ」とともに用いられた例のうち、「～は(ぞ・
こそ)あはれなり(あはれなる・あはれなれ)」という形をとっているものである。こうし
た形の例は、「～はあはれなり」が3首、「～ぞあはれなる」が7首、「～こそあはれなれ」
が7首の、合計17首が見出される。

・なでしこはいづれともなくにほへどもおくれてさくはあはれなりけり

(後撰集・夏・203・太政大臣)

・ながらへてあらぬまでも事のはのふかきはいかにあはれなりけり

(後撰集・恋一・600・よみ人しらず)

・わけわびていとひし庭のよもぎふもかれぬとおもふはあはれなりけり

(千載集・雑中・1145・法眼兼覚)

上の3例は、「～はあはれなり」という形を用いた用例である。係助詞「は」の語義は、「対比すべき事柄を言外におくことにより強める」(日本国語大辞典)、「ある事柄を特に取り立てて教示する意を表す。そこに他と区別し、他の事柄を排斥する気持ちがこもる」(古語大辞典)と説明されている。

この3首の歌でも、それぞれ、遅れて咲く撫子の花(=遅く生まれたわが子)、愛情の深い言葉、枯れた庭の蓬が、それぞれ「は」を伴って、特に取り立てて示され、それに対する感情が「あはれなり」で表現されている。

こうした表現については、「いづれともなくにほへども」という逆接、「いかに」という強調の副詞、繁茂して「わけわびていとひし」状態だったこととの対比などを伴って、対象を取り立てる機能がさらに強化されていることにも注目される。

・あしひきの山のこのはのおちくちばいろのをしきぞあはれなりける

(拾遺集・物名・417・輔相)

・しらぎくのうつろひゆくぞあはれなるかくしつっこそ人もかれしか

(後拾遺集・秋下・355・良暹法師)

・つねよりもけふのかすみぞあはれなるたきぎつきにしけぶりとおもへば

(後拾遺集・雑六(釈教)・1180・前律師慶暹)

・さだめなきよをうきくもぞあはれなるたのみし君がけぶりとおもへば

(金葉集・雑下・622・藤原資信)

・ふけにけるわがよの秋ぞあはれなるかたぶく月は又もいでなん

(千載集・秋上・297・藤原清輔朝臣)

・このごろのをしのうきねぞあはれなるうはげの霜よ下のこほりよ

(千載集・冬・432・崇徳院御製)

・暁のゆふつけどりぞあはれなるながきねぶりをおもふ枕に

(新古今集・雑下・1810・式子内親王)

上の7首は、「～ぞあはれなる」の用例である。係助詞「ぞ」の語義は、「体言、活用語の連体形、副助詞などを受けて、指定的に強調し、聞き手に働きかける」(日本国語大辞典)、「ぞ」の付いた語や句を特に取り立てて強調する意を表す。」(古語大辞典)というように、「は」とほぼ同じように説明されている。

この7首の歌でも、特定の対象、状態などを「ぞ」で取り立て、それに対する感慨を「あはれなり」で表現している。ここでも、人の訪れの途絶えとの重ね合わせ、「つねよりも」という比較、「かたぶく月」との対比などが行われ、また、取り立てて「あはれなり」と感じられる根拠として、「たきぎつきにしけぶりとおもへば」「たのみし君がけぶりとおもへば」「うはげの霜よ下のこほりよ」「ながきねぶりをおもふ枕に」といった表現が添えられている。

・おともせでおもひにもゆるほたるこそなくむしよりもあはれなりけれ

(後拾遺集・夏・216・源重之)

・すぎてゆく月をもなにかうらむべきまつわが身こそあはれなりけれ

(後拾遺集・恋二・689・読人不知)

・いにしへにふりゆく身こそあはれなれむかしながらのはしをみるにも

(後拾遺集・雑四・1074・伊勢大輔)

・人をとふかねのこゑこそあはれなれいつかわがみにならむとすらん

(詞花集・雑下・406・よみ人しらず)

・いそがれぬ年のくれこそあはれなれ昔はよそにききし春かは

(新古今集・冬・701・入道左大臣)

・おいのなみこえける身こそあはれなれことしも今は末の松山

(新古今集・冬・705・寂蓮法師)

・あれわたる秋の庭こそ哀なれまして消えなん露の夕ぐれ

(新古今集・雑上・1561・皇太后宮大夫俊成)

この7首は、「～こそあはれなれ」の用例である。

「こそ」は、「その受ける語や句を取り立てて強調する。」(古語大辞典)と説明されている。¹⁵

ここでの「～こそ」の使い方も、その取り立てて強調する点において、基本的に「～は」「～ぞ」と同様である。また、「なくむしよりも」という比較、「むかしながらのはし」「昔」との対比などを伴っている点でも、「～は」「～ぞ」と同様の傾向が見られる。

以上のように、係助詞との共起が多くみられるのは、和歌に「あはれなり」を用いる際に、ある事柄や状態を取り立てて、それへの特別な感慨を詠もうとする歌人の意図があったことを想像させる。また、そういう傾向を肯定的に評価する撰者の見方があったことも想像される。

6

○ 終助詞「かな」との共起

八代集の和歌において「あはれなり」との共起がみられる言葉としては、係助詞とともに、終助詞「かな」も注目すべきである。

「あはれなり」と「かな」が共に用いられた和歌は、次の9首である。

- ・あはれにもたえずおとするしぐれかなとふべき人もとはぬすみかに
(後拾遺集・冬・380・藤原兼房朝臣)
- ・なほざりのそらだのめせであはれにもまつにかならずいづる月かな
(後拾遺集・雑一・862・小弁)
- ・すぎきける月日のほどもしられつつこのみを見るもあはれなるかな
(金葉集・雑上・563・上東門院)
- ・あはれにもみさをにもゆるかなこゑたてつべきこの世とおもふに
(千載集・夏・202・源俊頼朝臣)
- ・あはれにもくれゆくとしのひかずかなかへらむことは夜のまとおもふに

¹⁵ 『日本国語大辞典』は、「こそ」の語義として強調の意を示さない。

(千載集・冬・471・相模)

・あはれなる野じまがさきのいほりかな露おく袖に浪もかけけり

(千載集・羈旅・531・皇太后宮大夫俊成)

・われゆゑの涙とこれをよそにみばあはれなるべき袖のうへかな

(千載集・恋二・757・藤原隆信朝臣)

・物おもへどもかからぬ人もあるものをあはれなりける身のちぎりかな

(千載集・恋五・928・円位法師)

・としふれどあはれにたえぬ涙かな恋しき人のかからましかば

(千載集・恋五・939・左京大夫頭輔)

終助詞「かな」は、「文末にあつて感動を表わす」(日本国語大辞典)言葉で、「…だなあ。…なあ」の意を表す(古語大辞典)。

もともと、「あはれなり」という形容動詞は、「心の底からのしみじみとした感動や感情、また、そういう感情を起こさせる状況を」を表す言葉であるから(日本国語大辞典)、詠嘆を表す「かな」は、「あはれなり」の表す感動や感情をいっそう強めるために用いられていることが推測される。

次に形式的な点では、「あはれにも…かな」という組み合わせが5例を数え、定型的な表現となっていることが目立つ。それとともに、「あはれなり」の連体形、あるいは「あはれなり」+助動詞「べき」「ける」が名詞を修飾し、その名詞に「かな」が接続する形、すなわち、「あはれなる(あはれなるべき・あはれなりける)…かな」という形も3例ある。これらは、先に概観したような、「…は(ぞ・こそ)あはれなり(あはれなる・あはれなれ)」という単刀直入な表現よりも、より複合的な内容の表現を目指した形式なのだろうと思われる。

次に、歌集については、9首の用例中6例が、千載集に集中していることが注目される。千載集は、「あはれなり」の使用数、使用率とも、1位の歌集であり、「あはれなり」を用いた和歌を比較的高く評価した歌集であるといえる。その千載集に「あはれなり」と「かな」が共起した歌が多いことは、千載集の撰者が、もともと好んだ「あはれなり」の感慨をさらに「かな」で強調した表現を評価したということだと思われ、注目される。

ちなみに、千載集の次の新古今集では、「あはれなり」と「かな」が共起した例は1首も存在しない。「かな」の用例自体は、新古今集にも多数存在するので、新古今集の撰者たち

が、「あはれなり」の心情を「かな」で強めた歌を、低く評価していたことが窺える。

おわりに

八代集において、「あはれなり」はさまざまな対象に用いられ、またさまざまな心情を表気にしている。雑歌では、人生のさまざまな事柄について、悲しさ・寂しさを表現しているもの、さらに、無常の思いをものも多く見られた。

恋歌においては、恋に直接結びつく心情を表現した例は少なく、多くの歌でもっと一般的な心情を表現していた。ここには、雑歌における「あはれなり」の使い方との共通点が多く見られた。

四季の歌でも、純粹に自然についての感慨を表現した用例は少なく、人事の要素を含んだ歌や、対象を擬人化した歌が多く見られた。

表現面では、「あはれなり」が係助詞や終助詞「かな」と共起した例が多くみられた。前者は、対象を取り立ててそれに対する特別な思いを詠もうとする意図が看取され、後者については、詠嘆を表す「かな」が、「あはれなり」の表す感動や感情をいっそう強めるために用いられていることが推測された。

3 「さやかなり」

はじめに

形容動詞「さやかなり」は、『八代集総索引』によれば、八代集に15首の使用例を見出せる。これは、古典和歌に形容動詞の使用例が少ないという全般的傾向の中では、多くはないにしても、一定のまとまった数であると判断される。

『日本国語大辞典』は、この語の意味について、次のように解説している。

さや - か 【明一・清一】〔形動〕（「か」は接尾語）

- (1) はっきりとしているさま。明るく清らかであるさま。明白に、よく見えるさま。あきらか。はっきり。明瞭（めいりょう）。まさやか。
- (2) 音声が高く澄んでいるさま。さえてよく聞こえるさま。
- (3) さわやかなさま。爽快であるさま。《季・秋》

この形容動詞には、語基「さや」を共有し、よく似た意味を表す形容詞「さやけし」がある。その『日本国語大辞典』における解説は、次の通りである。

さやけし 【明一・清一・爽一】〔形ク〕

- (1) けじめがはっきりしている。はっきりしていて明らかである。あざやかである。見た目に分明である。
- (2) 清らかである。さっぱりしている。気分的にさわやかである。すがすがしい。《季・秋》
- (3) 音、声などがはっきりとしてさわやかである。快い響きである。耳に快く感じられる。

「さやけし」の八代集における用例は18首で（『八代集総索引』による。金葉集三奏本を除く）、「さやかなり」とほぼ同じくらいの使用例が見出せる。

本節では、万葉集における用例や「さやけし」との差異に注意しながら、八代集における「さやかなり」の用例を概観することにする

古典索引刊行会編『万葉集索引』（2003年、塙書房）によると、万葉集における「さやかなり」の用例は次の4首である。¹⁶

・大君の 命恐み にきびにし 家を置き こもりくの 泊瀬の川に 船浮けて 我が
行く川の 川隈の 八十隈落ちず 万度 かへり見しつつ 玉梓の 道行き暮らし
あをによし 奈良の京の 佐保川に い行き至りて 我が寝たる 衣の上ゆ 朝月夜
さやかに見れば たへのほに 夜の霜降り 石床と 川の氷凝り 寒き夜を 息むこ
となく 通ひつつ 造れる家に 千代までに いませ大君よ 我也通はむ

（巻第一・79）

・我が背子が かざしの萩に 置く露を さやかに見よと 月は照るらし

（巻第十・2225）

・新墾の 今作る道 さやかにも 聞きてけるかも 妹が上のことを

（巻第十二・2855）

・群鳥の 朝立ち去にし 君が上は さやかに聞きつ 思ひしごとく

（巻第二十・4474）

万葉集で用いられた「さやかなり」は、連用形「さやかに」だけが用いられていて、連用修飾語として動詞「見る」「聞く」にかかっていることがわかる。

79番歌で「さやかなり」は、大君の命によって出向いた奈良の新都の佐保川の情景を描いた中に用いられていて、「朝月の光ではっきり見ると、真っ白に夜の霜は降り、岩床のように厚く川の氷は張り詰め」（新編全集）というように、月の光によって物をはっきり見るという文脈で用いられている。

2225番歌では、月が明るく照っていることについて、「あなたが髪に挿している萩に置く露をはっきり見よ」（新編全集）と言っているのだろうと推測している。

2855番歌は、道に寄せる恋の歌である。初二句は「さやかに」を引き出す序詞となっていて、「新墾の今作る道さやかにも」というつながりで、「今作ったばかりの道はすがすがしい」という意味を表し、「さやかにも聞きてけるかも」で「(娘のことを) はっきり

¹⁶ 万葉集からの引用は、『新編日本古典文学全集』による。

聞いたことだなあ」の意味を表している。

4474番歌では、「あなたの噂ははっきり聞きました」という意味を表している。以上のように、万葉集における「さやかなり」は、「見る」にかかる用法（2例）と、「聞く」にかかる用法（2例）とに大別される。「見る」にかかる場合は、月の光によって何かを「はっきりと」見るという意味を表す。「聞く」にかかる場合は、物音ではなく人の消息や噂を「はっきり」聞くという意味で用いられている。また、序詞のレトリックの中ではあるが、「新墾の今作る道」を受ける述語として、「(新しい道は) すがすがしい」の意を表す用法も見られる。

次に比較対象として、万葉集における「さやけし」の用例を概観しておく。

『万葉集索引』によると、万葉集における「さやけし」の用例は16首であり、「さやかなり」よりもかなり多く用いられている。そのうち、「川」について用いられた例が最も多くて十首。ついで「月」について用いられたのが3首。残るは、太刀、浜、湖の景観について各1首となっている。今、川と月の用例を取り上げてみる。

川について「さやけし」と表現している例は、視覚的にとらえたものと、聴覚的にとらえたものとに大別される。

- ・……神風の 伊勢の国は 国見ればしも 山見れば 高く貴し 川見れば さやけく
清し…… (巻第十三・3234)
- ・……うちなびく 春の初めは 八千種に 花咲きにほひ 山見れば 見のともしく
川見れば 見のさやけく…… (巻第二十・4360)

は、川の美しさ、すがすがしさを、視覚的に「さやけし」と表現したもの。

- ・……春の日は 山し見が欲し 秋の夜は 川しさやけし…… (巻第三・324)
- ・……雲居なす 心もしのに 立つ霧の 思ひ過ぐさず 行く水の 音もさやけく……
(巻第十七・4003)

は、川の流れる水の音のすがすがしいさまを、聴覚的に「さやけし」と表現した例である。

ほかに、山と組み合わせて、

・今造る 久邇の都は 山川の さやけき見れば うべ知らすらし (巻六・1037)

・うつせみは 数なき身なり 山川の さやけき見つつ 道を尋ねな

(巻二十・4468)

というように、情景を広く「山川」ととらえて、その清らかさ、すがすがしさを、「さやけし」と表現した例もある。

月についての用例は、次の3首。

・春日山 おして照らせる この月は 妹が庭にも さやけかりけり

(巻第七・1074)

・思はぬに しぐれの雨は 降りたれど 天雲はれて 月夜さやけし

(巻第十・2227)

・ぬばたまの 夜渡る月の さやけくは よく見てましを 君が姿を

(巻第十二・3007)

1074番歌は、空高く照らす月が「妹が庭」も明るく照らしていることを表現している。2227番歌では、雲が晴れて空の月が澄んでいる様子を「さやけし」で表している。3007番歌は、逢瀬の夜に「月がおぼろであったため、相手の顔がよく見えなかったことを残念に思」う気持ちを詠んだ歌(新編全集)。空の月が明るければ、ということ「さやけし」を用いて表現している。

以上のように、万葉集の「さやけし」は、川、山が感じさせる、清らかですすがしいさまや、月が澄んで明るいさまというように、景物がどのような状態であるのかを示すのが主な用法であると考えられる。

これに対して、「さやかなり」は、対象のありようを示すのではなくて、人の「見る」「聞く」という行為について、連用形「さやかり」の形で「はっきりと(見る・聞く)」と形容するために、主として用いられている。

・我が背子が かざしの萩に 置く露を さやかに見よと 月は照るらし

(巻第十・2225)

・ぬばたまの 夜渡る月の さやけくは よく見てましを 君が姿を

上の2首はどちらも月の明るさを話題にしているが、「さやかなり」と「さやけし」の用いられ方は大きく異なっている。「さやけく」は、月を受けての述語として用いられ、月そのものの清らかに澄んださまを叙述しているのに対し、「さやかに」は「見る」の連用修飾語として、月の光によって露をはっきり見る意を表しているのである。

『万葉集神事語辞典』(國學院大學デジタル・ミュージアム)は、「さやけし」について、その語義を、「①はっきりしていて明らかである。あざやかである。②明るく清らかである。気分的にさわやかである。すがすがしい。」と記した後に、

月明かりや景色を視覚的に捉えた用例と川や波の音、鹿の鳴き声などを聴覚的に捉えた用例に大きく2分できる。万葉集での表記の多くは「清」であるが、これは「きよし」とも「さやけし」とも訓まれている。「川見れば さやけく清し」(13-3234)や「山川を 清みさやけみ」(6-907)という用例があるように、「さやけし」と「きよし」は根本的に同対象の描写に用いられることもあり、その違いをはっきり説明するのは困難である。しかし、「清き川瀬を 見るがさやけさ」(9-1737)という用例から考えると、「きよし」が対象の汚れなきさまをあらわすことが多いのに対して、「さやけし」はその対象から受けた主体の感覚・心情について言う場合が多いようである。……「さやけし」という語は、古代の人々の独特な美意識を反映した語だと言えよう。

(新谷秀夫氏執筆)

と解説している。「さやけし」について以上のように示された「対象から受けた主体の感覚・心情」「独特な美意識」は、万葉集に用いられた「さやかなり」からは、ほとんど看取されないものと言ってよいだろう。

このように、万葉集における「さやかなり」と「さやけし」の用法は大きく異なっていて、前者が「さやかに」という形で専ら副詞的に用いられている。その中で、序詞のレトリックの中ではあるが、新しい道から受ける印象を、「さやかに」(すがすがしく)と表現した例が1例見られたことは、「さやかなり」の陳述性、叙述性を示すものとして注意すべきであろう。

2

八代集においては、「さやかなり」は、前述のように15首にその用例が見られる。その歌集ごとの分布は、左記の通りである。

古今集…3首	後撰集 …1首
拾遺集…3首	後拾遺集…なし
金葉集…なし	詞花集 …なし
千載集…2首	新古今集…6首

総数が少ないので統計的には何とも言えないが、後拾遺集・金葉集・詞花集で1首も用例が見えないのに、その後復活して新古今集に用例が多いことは注目される。

次に部立ごとに整理すると、次のようになっている。

四季の歌…8首 (春0 夏2 秋5 冬1)
恋の歌 …3首
その他 …4首 (哀傷1 羈旅1 神祇2)

このように「さやかなり」は、他の部立より四季の歌に多く用いられており、中でも秋の歌の用例が5首あることが目立っている。

以下、四季の歌、恋の歌、その他の歌、という順に、「さやかなり」がどのように用いられているのかについて、確認することとする。

3

○四季の歌

四季の歌に用いられた「さやかなり」8例のうち、7例は連用形「さやかに」であり、残る1例は未然形「さやかなら」である。

そこで、まず「さやかに」の用例について概観したい。

- ・秋きぬと目にはさやかに見えねども風のをとにぞおどろかれぬる
(古今集・秋上・169・藤原敏行朝臣・「秋立日、よめる」)
- ・浅茅生の露けくもあるか秋来ぬと目にはさやかに見えけるものを
(千載集・秋上・227・仁和寺法親王守覚・「(秋立日よみ侍ける)」)
- ・をと山さやかに見ゆる白雪をあけぬとつぐる鳥の声かな
(新古今集・冬・668・高倉院御歌・「上のをのこども、暁望山雪といへる心をつかうまつりけるに」)

上の3首では、「さやかに」は動詞「見ゆ」の連用修飾語として用いられている。

「秋きぬ…」の歌は、立秋を主題とする歌である。秋が来ても、木の葉が急に紅葉するわけではなく、秋の草花が咲き始めるわけでもない。そのように、秋が来たと目には「さやかに」(はっきり)見えないけれども、風の音を通して秋が来たことを判断したことを詠んだ歌である。上の句の「目にはさやかに見えね…」は視覚的な用法であり、下の句の「風のをとにぞ…」が聴覚的なものであるのと対照的になっている。

「浅茅生の…」の歌は、「秋来ぬと…」詠を本歌として踏まえ、本歌の「さやかに見えねども」を「さやかに見えけるものを」と反転させている。この歌については、次のように解釈が分かれている。

- ・浅茅原は一面の露。涙もよおして霞みがちになることだ。折角秋が来たと世界がはっきり見えていたことなのに。
(新大系)
- ・浅茅生が露っぽくなっていることだよ。秋がやって来たとこのようにはっきり見えるのにねえ。
(古典叢書)

この浅茅生は立秋の日の目に見える景そのものと考えればよく、そこから詠者の涙を連想する必要はないと思われるので、古典叢書の解釈に従うべきであろう。「秋来ぬと…」詠では、秋が来たと目にははっきり見えないと詠まれていたのに対し、この歌では、庭の浅茅生に露が置く景色を見て、秋が来たとはっきり見えるのに、と古今集歌に異を唱えている。

「をとほ山…」の歌は、音羽山に積もった白雪の明るさを日の光と錯覚して、鳥が夜明けを告げるさまを詠んでいる。

この歌の上の句は、「音羽山がそのためにくっきりと見える明け方の白雪であるのに」と解釈されている。ここでは、「さやかに」は「くっきりと・はっきりと」の意に解されているが、鳥が雪を夜明けの光と勘違いしているところから見て、「音羽山の明るく見える雪を」というように素朴に解釈するほうがよいであろう。

以上の3首に見える、「さやかに」「見ゆ」の意味は、「秋来ぬと…」詠、「浅茅生の…」詠では、「はっきりと見える」意で、「さやかに」は副詞的に用いられている。これに対し、「をとほ山…」詠では、山に降り積もった雪の白さを「明るく見える」と表現していて、万葉集の用例には見られなかった視覚的イメージを伴う用法が見られることに注意される。

秋の夜の月に重なる雲晴れて光さやかに見るよしも哉

(後撰集・秋中・320・読人しらず・「(秋歌とてよめる)」)

これは、秋の月に雲がかかっているのを残念に思って、雲が晴れてくれればよいのにと願った歌。下の句の「さやかに」については、「さわやかに月の光を見たいものであるよ」(新大系)、「月の光をくっきりと見るてだてが有ったらよいのになあ」(古典叢書)というように、微妙に解釈が分かれている。

・秋の月光さやかに紅葉ばのおつる影さへ見えわたるかな

(古今六帖・第一・296・「秋の月」)

・やはらぐる光さやかにてらしみよたのむ日吉のななのみやしる

(拾遺愚草・790・「神祇」)

・あまくだる神ぢの山の木間よりひかりさやかに出づる月かげ

(宝治百首・1567・為家・「山月」)

上の用例から見て、「光さやかに」という表現は、「光をさやかに」の意を表すのではなく、「光がさやかな状態で」の意を表すものと判断される。当該歌「秋の夜の…」の「さやかに」は、「秋の月…」詠のそれと同様、秋の月の光の、「明るく清らかであるさま」(日本国語大辞典(1))を表現しているものと判断される。

- ・ 秋の月山辺さやかに照らせるは落つるもみぢの数を見よとか
(古今集・秋下・289・読人しらず・「(題しらず)」)
- ・ 底清み流るる河のさやかにもはらふることを神は聞か南
(拾遺集・夏・133・よみ人知らず・「題知らず」)
- ・ 一声はさやかになきてほととぎす雲路はるかにとをざかるなり
(千載集・夏・159・前右京権大夫頼政・「(時鳥の歌とてよめる)」)

上の3首で「さやかに」は、それぞれ「照らす」「はらふ(祓ふ)」「なく(鳴く)」を連用修飾している。

「秋の月…」詠では、月が山辺を「さやかに」照らすさまを見て、「散り落ちるもみじ葉の数を数えなさいというのか」と推測している。この「さやかに」は、散る紅葉の葉の数が数えられるほど、月の光が「明るく清らかである」(日本国語大辞典(1))ということ表現している。

「底清み」詠では、「底清み流るる河の」が、序詞として「さやか」を導いている。この序詞からのつながりにおいて、「さやかに」は、川が澄み切っている様子を表す。その一方、「はらふる」へのつながりでは、「清浄な心で祓をして祈願した」(新大系)の意も表している。「さやかに」が示しているこの2つの意味は、ともに『日本国語大辞典』が示す「清らかである」という語義((1))に当てはまる。

「一声は…」詠は、郭公が一声「さやかに」鳴いて、遠くに飛び去って行ってしまったことへの感慨を詠む。「さやかに」は、ほととぎすの音が「高く澄んでいるさま」「さえてよく聞こえるさま」(日本国語大辞典(2))を表している。

- ・ 薄霧のたちまふ山のもみぢ葉はさやかならねどそれと見えけり
(新古今集・秋・524・高倉院御歌・「紅葉透霧といふことを」)

「薄霧の…」詠は、薄霧が立ち舞うため、山の紅葉がはっきり見えないことを「さやかなら」(ぬ)と表現している。これは、『日本国語大辞典』の示す「見た目に分明である」の意((1))に当てはまる。

以上のように、四季の歌に用いられた「さやかなり」は、万葉集の用例と同様に、「はっ

きりと」(見える)という副詞的用法が2首見られる(古今集169番歌、千載集227番歌)一方、他の6首では、白雪、秋の月の光、河の流れ、禊をする人の心、郭公の声、紅葉について、『日本国語大辞典』が示す、視覚的、聴覚的語義を、多様に表していることがわかる。

4

○恋の歌

八代集の恋部において、「さやかなり」を用いる歌は3首で、うち2首は「さやかに」という形で動詞「見る」にかかる用法、1首は、「さやかなりける」という形で名詞「月かげ」にかかる用法である。

- ・ 三日月のさやかにも見えず雲隠見まくぞほしきうたてこの頃
(拾遺集・恋三・783・人麿・「(題しらず)」)
- ・ さやかにも見るべき月を我はただ涙に雲る折ぞ多かる
(拾遺集・恋三・788・中務・「返し」)
- ・ 入るかたはさやかなりける月かげを上空にも待ちしよみかな
(新古今集・恋四・1262・紫式部・「人につかはしける」)

この3首では、「さやかなり」は月とともに詠まれている。「三日月の…」詠は、雲に隠れて「さやかに」見えない三日月を、恋人が姿を見せないことの比喩に用いて、逢いたい気持ちを詠んでいる。「さやかに…」詠は、「恋しさは同じ心にあらずとも今夜の月を君見ざらめや」(拾遺集・恋三・787・源信明・「月明かかりける夜、女の許に遣はしける」)への返歌として、「さやかに」見るはずの月を、あなたが恋しくて流れる涙に曇って見えない、と詠んでいる。「入るかたは…」詠は、恋人(男)を恨む歌であり、月を恋人の比喩に用いて、その通って行く相手の女ははっきり分かっていることを、「さやかなり」で表現している。

この3首の用例では、「さやかなり」はどれも、『日本国語大辞典』の示す「はっきりしっていて明らかである」の意(1)を表している。

○その他の歌

四季、恋以外の歌に見える「さやか」の用例は、哀傷歌1首、羈旅歌1首、神祇歌2首である。

- ・水の面にしづく花の色さやかにも君が御かげのおもほゆる哉
(古今集・哀傷・845・篁朝臣・「諒闇の年、池のほとりの花を見て、よめる」)
- ・あづまぢの佐夜の中山さやかにも見えぬ雲居に世をやつくさん
(新古今集・羈旅・907・壬生忠峯・「(題しらず)」)
- ・神路山月さやかなるちかひありて天の下をばてらすなりけり
(新古今集・神祇・1878・西行法師・「(題しらず)」)
- ・さやかなる鷺の高嶺の雲井よりかげやはらぐる月読のもり
(新古今集・神祇・1879・西行法師・「伊勢の月読の社にまゐりて、月を見てよめる」)

「水の面…」詠では、「水の面にしづく花の色」が、序詞として「さやか」を導いている。この序詞からのつながりにおいて、「さやかに」は、「花の影の色が清らかで鮮やかなもの」(新大系)であるさまを示す。その一方、下の句へのつながりでは、「帝の面影がたいへん鮮やかに思い浮かべられる」(新大系)の意も表している。「さやかに」が示しているこの2つの意味は、ともに『日本国語大辞典』が示す「明るく清らかである」という語義((1))に当てはまる。

「あづまぢの…」詠の「さやかに」は、「見えぬ」にかかって、「雲に隔てられて何もはっきりと見えない」(新大系)の意を表している。

「神路山…」詠、「さやかなる…」詠は、ともに西行が詠んだ神祇歌で、「さやかなり」は、月が空に「清らかに輝いている」さま、「清らかにさえて照らす」さま(ともに新大系)をそれぞれ示している。ここでは月は神祇・仏道にかかわる神聖な存在として輝いていて、その光の清らかさ、明るさを「さやかなり」が表現している。

以上のように、哀傷、羈旅、神祇歌における「さやかなり」の用例には、「はっきり」見え(ない)の意の副詞的用法が見られる一方、「花の色」「月」を受けた陳述的な用法、「さ

やかなる」の形で、「ちかひ」「鷺の高嶺の雲井」を連体修飾する用法など、多様な用いられ方をしていることがわかる。

5

ここで、比較のために、八代集における形容詞「さやけし」の用例を概観しておきたい。「さやけし」は八代集において18首に用いられているが、そのうちの大多数を占める15例が「月」について用いられている。今、その典型的な用例を示してみよう。

- ・ 照る月の秋しもことにさやけきは散るもみぢ葉を夜も見よとか
(後撰集・秋下・428・よみ人しらず・「題しらず」)
- ・ 秋の月光さやけきもみぢ葉の落つる影さへ見えわたる哉
(後撰集・秋下・434・よみ人しらず・「題しらず」)
- ・ ここにだに光さやけき秋の月雲の上こそ思ひやらるれ
(拾遺集・秋・175・藤原経臣・「延喜御時、八月十五夜蔵人所の男ども月の宴し侍けるに」)
- ・ 久方の月をさやけみもみぢ葉の濃さも薄さも分きつべら也
(拾遺集・雑秋・1127・よみ人しらず・「題知らず」)
- ・ つねよりもさやけき秋の月を見てあはれこひしき雲の上かな
(後拾遺集・雑一・854・源師光・「前蔵人にて侍りける時、対月懐旧といふ心を人々よみ侍りけるに」)
- ・ 秋の夜の月の光のもる山は木下影もさやけかりけり
(詞花集・秋・99・藤原重基・「関白前太政大臣の家にてよめる」)

これらの歌では、月の明るさをそれぞれ「さやけし」と表現している。その中で、「照る月の…」詠、「秋の月…」詠、「久方の…」詠は、月の明るさを強調するために、「散るもみぢ葉を夜も見よ」「もみぢ葉の落つる影さへ見えわたる」「もみぢ葉の濃さも薄さも分きつべら也」というように、昼だけでなく夜も紅葉が見えるということを引き合いに出している。

これらは、『八代集』の「さやかなり」の用例として、すでに検討を加えた和歌、

秋の月山辺さやかに照らせるは落つるもみぢの数を見よとか

(古今集・秋下・289・よみ人しらず・「(題しらず)」)

とほぼ発想を共有しており、「さやけし」と「さやかなり」の意味・用法が、万葉集よりもずっと近いものとなっていることを、端的に示すものと言えるだろう。

・山のはに入りにし夜はの月なれどなごりはまだにさやけかりけり

(後拾遺集・雑六・1183・よみ人しらず・「二月十五夜月明く侍けるに、大江佐国が許につかはしける」)

これは、涅槃会が行われる二月十五夜に詠まれた歌で、雑六の釈教の歌群に収められている。「山のはに入りにし夜はの月」は「涅槃に入った釈尊の比喻」であり、「なごり」は「月の沈んだあとの余光。釈尊の残した教え(遺教、遺法)の比喻」(ともに新大系)である。ここでは「さやけし」は、「遺法が伝わっていることをたたえる」(新大系)意を比喻的に表している。

・すむ水にさやけきかげのうつればやこよひの月の名にながる覧

(千載集・秋下・336・大宮右大臣・「後冷泉院御時、九月十三夜月宴侍けるによりみ侍ける」)

この「すむ水に…」詠は、「内裏御所の晴れの宴の月。水に映る艶やかな月」(新大系)を詠んだ歌であり、後の名月の特別に澄んで美しいさまを表現している。

以上のように、月との関連で用いられた「さやけし」は、秋の月の非常に明るい様子を表現する例が多いのに加え、釈尊の教えを比喻的にたたえる用法、宮中の名月の澄んだ美しさをたたえる用法などが見られる。

・冬の夜の池の氷のさやけきは月の光の磨くなりけり

(拾遺集・冬・240・元輔・「廉義公家障子」)

・ なにかおもふ春の嵐に雲晴れてさやけき影は君のみぞ見ん

(金葉集・雑上・603・周防内侍・「これを奏しければ、内侍周防を召して、これが返しせよ、と仰せ言ありければつかうまつれる」)

・ 夕月夜ほのめくかげも卯花の咲けるわたりはさやけかりけり

(千載集・夏・140・右近衛大将実房・「暮見卯花といへる心をよみ侍ける」)

上の3首は、月以外のものについて、「さやけし」が用いられた例である。「冬の夜の…」詠は池に張った氷に月の光が映った清らかな美しさを、「さやけし」と表現している。「なにかおもふ…」詠では、「さやけき」は日の光の明るさを表現し、帝の恵みの比喻となっている。「夕月夜…」詠の「さやけかり」は、卯の花の白さについて、「満月の光のように明るい」(新大系)の意を表している。

これらはすべて明るいさまを示していて、月について用いられた用法と共通した用いられ方と言えるだろう。

以上のように、八代集で「さやけし」は、主として月について、そのとても澄んで明るいさま示すために用いられている。

そこでは、万葉集に多く見られた、川、山が感じさせる、清らかですがすがしいさまを示す用法が全く見られなくなっていて、『万葉集神事語辞典』が指摘する「古代の人々の独特な美意識」も希薄になっていることがわかる。

おわりに

形容動詞「さやかなり」は、万葉集では使用例が4例と少なく、それも連用形ばかりで、もっぱら副詞的に用いられていた。

八代集になると、15首の和歌に用いられ、述語として、あるいは連体修飾語として用いられる例も見られるようになる。また連用形で用いられている場合も、副詞的用法に加え、視覚的・聴覚的に具体的な意味内容を伴う例が見られる。

「さやかなり」が叙述、修飾する対象も、八代集では、白雪、秋の月の光、河の流れ、禊をする人の心、郭公の声、紅葉、花の色、誓いなど、自然から人事まで、多様なものが見られる。

また、単に明るいことを詠むだけでなく、打消の語などを伴って、明るくない状態を詠

む例が散見したことも注目される。

類義語である形容詞「さやけし」が、万葉集に比べて八代集では多様性を失い、もっぱら月の澄んだ明るさの形容に限定して使われるようになったのとは対照的に、「さやかなり」は、ずっと幅広い用法を八代集において獲得したことが知られる。

4 「そらなり」

はじめに

『八代集総索引』によれば、形容動詞「そらなり」は八代集に 53 首の使用例が見いだせる（金葉集三奏本を除く）。この数は、後に述べるように、若干の修正は必要であるにしても、古典和歌に形容動詞はあまり用いられないという傾向の中で、相当に多い数である。

「そら」は、もともとは空間を意味する名詞であり、そこから「漠然とした場所」「心もとない心境」など、抽象的な意味が派生し、さらに「そらなり」という形容動詞としての用法も派生したとされる。

『日本国語大辞典』、『角川古語大辞典』における、「そら」の語義解説のうち、形容動詞に関するものは次の通りである。

○『日本国語大辞典』

比喩的に、精神状態などについて用いる。

1（形動）心が空虚であること。また、そのさま。魂が抜けたようで、しっかりした意識のないこと。また、そのさま。うつろ。うわのそら。

2（形動）明確な基準・根拠・原因・理由などが無いことをあらわす。多く、助詞「に」を伴って、副詞的に用いる。

イ はっきりした原因や意図のないこと。また、そのさま。偶然。自然。

ロ これという理由のないこと。また、そのさま。

ハ 根拠が不確実であること。また、そのさま。

ニ 足もとがおぼつかないこと。また、そのさま。

ホ 特に、「知る」などを修飾して、とりたてて意図したり教えられたりせず、自然に推量して知ることをいう。→そらに知る。

へ 助詞「に」（後には「で」）を伴い、「読む」「覚える」などの語を修飾して、文字を見ることなく記憶に頼るだけであることをいう。

○『角川古語大辞典』

よりどころがなく不安定であるさま。

- ①正常な思考力や判断力を失っているさま。上の空であるさま。
- ②これといった根拠のないさま。はっきりした理由のないさま。何となしにそう思うさま。
- ③書いたものや道具に頼らず、記憶や頭脳の動きだけに基づいて発表するさま。暗誦や暗算をする場合にいう。連用形「そらに」の形が普通。
- ④足もとがおぼつかないさま。あわてたり、忙しがったりして走り回るさまをいう。

本節では、辞書に記述された語義を踏まえつつ、八代集における「そらなり」の用例を概観することにする。

1

『八代集総索引』は、「そらなり」の項に掲出した53例のうち44例を、「そら」の項にも掲出している。これは、同書の凡例に、「懸詞は、出来る限りその2つの意味のそれぞれの項に重出させるようにつとめた。」と記された方針に基づき、掛詞（さらにそれに関わる序詞・縁語など）のレトリックに配慮した判断・処理であることが推察される。

- ・朝な朝な立つ河霧の空にのみ浮きて思ひのある世なりけり
(古今集・恋一・513・よみ人しらず・「題しらず」)
- ・五月山こずゑを高みほととぎす鳴く音そらなる恋もする哉
(古今集・恋二・579・貫之・「題しらず」)

「朝な朝な…」詠の初・二句は序詞で、自分の恋愛関係が不安定な状態にあることを、河霧が大空に立つ様子に喩えている歌である。「浮き」は掛詞的な用いられ方をされていて、「河霧」が「空に……浮きて」の意を表すとともに、「空にのみ浮きて思ひのある」というつながりで、心が不安定な状態にあることを示している。「空に」は河霧については名詞＋格助詞として機能し、歌の主意においては「上の空で」の意を表している。

「五月山…」詠は、「五月山こずゑを高みほととぎす鳴く音」が序詞で、「そらなる」は、郭公の鳴き声が「大空高く聞こえる」意を表すときには、名詞＋助動詞として機能し、歌の主意としては、形容動詞として「上の空の（恋）」の意を表している。

この2首では、「空に」「空なる」の「空」が、空間としての「空」を意味すると同時に、心や恋の不安定な状態を意味していて、掛詞のように機能していることから、歌人たちが名詞「そら」と形容動詞「そらなり」の差異を、品詞という概念ではないにしても、はっきり意識していたことが知られるのである。

・初雁の我もそらなるほどなれば君も物うき旅にやあるらん

(後撰集・離別 羈旅・1315・よみ人しらず・「このたびの出で立ちなん物うくおぼゆる」と言ひければ)

この歌の「我も」は、「初雁に対して自分も」の意で、空を飛ぶ初雁を前提として自分も心が「そらなる」状態にあることを示している。「我もそらなる」の「そらなる」自体は、心の状態を示す形容動詞であるが、「我も」が暗示する初雁についての「そらなる」は、名詞+助動詞である。『八代集総索引』が、この歌を、「そら」「そらなり」の両方に掲出しているのは、その暗示された意味を踏まえてのことであろう。

名詞「そら」と形容動詞「そらなり」の識別は、かなり困難なこともある。次の4首に用いられた「そらに」「そら」は、『八代集総索引』では「そらなり」の用例として掲出されているが、形容動詞ではないと判断するのが妥当であろう。

・ふるさとに帰ると見てや龍田姫紅葉の錦空に着すらん

(拾遺集・雑秋・1129・大中臣能宣・「旅人の紅葉のもと行く方描ける屏風に」)

・春がすみたち帰るべき空ぞなき花の匂ひにこころとまりて

(金葉集・春・35・院御製・「宇治前太政大臣京極の家の御幸」)

・ふく風につけても問はんささがにのかよひし道は空にたゆとも

(新古今集・恋四・1242・右大将道綱母・「題しらず」)

・歎くらん心を空に見てしかなたつ朝霧に身をやなさまし

(新古今集・恋五・1412・女御徽子女王・「御返し」)

「ふるさとに…」詠の「空に着す」は、「空から着せる」(大系)を表していて、「空に」を形容動詞として解さなくてはならない点は見られない。したがって、「空に」は名詞+格助詞として扱うのが妥当であろう。

「春がすみ…」詠の「空」は「出発する方角や場所を表す」（新大系）名詞として解せばよく、形容動詞の語幹として扱う必要はないと判断される。

「ふく風に…」詠の「空に」は、三句「ささがに」の縁語として用いられた名詞であり、形容動詞として機能してはいないものと考えられる。

「歎くらん…」詠の「空」は、村上天皇からの贈歌に「大空」とあったのを受けたもので、空間としての「空」を意味しており、「なんとなく・自然に」という形容動詞としての意味は汲み取れないので、やはり名詞として判断すべきである。

以下、上の4首を除いた49首の八代集所収歌を対象として、形容動詞「そらなり」がどのように用いられているかを概観したい。その際、レトリックとの関わりで浮かびあがる名詞「そら」の意味は捨象し、もっぱら形容動詞の側面を取り上げることとする。

「そらなり」は、人の心の状態に関する用法と、「知る」などと共起して「何となしに」（角川古語大辞典）「自然に」（日本国語大辞典）の意を表す副詞的用法とに大別される。

そこで、まず人の心の状態に関する用法を検討し、ついで副詞的用法を検討する。前者の検討にあたっては、次の順で取り上げることとする。

- 「心」が「そらになる」という表現
- 「心」と共起する表現のうち「心がそらになる」を除く
- 「心」を含まないが、人の心の状態を表す表現

2

- 「心」が「そらになる」という表現

人の心について用いられた「そらなり」の語義は、「正常な思考力や判断力を失っているさま。上の空であるさま。」（角川古語大辞典）、「心が空虚であること。また、そのさま。魂が抜けたようで、しっかりした意識のないこと。また、そのさま。うつろ。うわのそら。」（日本国語大辞典）というように説明されている。

以下、「心」が「そらになる」という表現を用いた和歌12首について概観してみたい。12首のうち、人事詠が10首。その内訳は恋歌6首、別歌2首、雑歌が2首。これに四季詠2首（ともに春の歌）が加わる。

- ・ 秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらになる覧
 (古今集・恋五・787・ともりの・「題しらず」)
- ・ 時の間も心は空になる物をいかで過ぐしし昔なるらむ
 (拾遺集・恋四・850・藤原実方朝臣・「元輔が婿になりて朝に」)
- ・ 雲井なる人を遙に思ふには我が心さへ空にこそなれ
 (拾遺集・恋四・909・源経基・「遠き所に思ふ人を置き侍て」)
- ・ 君をのみ思ひやりつつ神よりも心の空になりし宵哉
 (拾遺集・雑恋・1241・天曆御製・「神いたく鳴り侍けるあしたに、宣耀殿の女御のもとに遣はしける」)
- ・ 白雲のかかる山路をふみみてぞいとど心は空になりける
 (金葉集・恋上・366・中納言顕隆・「題不知」)
- ・ 心のみ空になりつつ郭公人だのめなるねこそ鳴かるれ
 (新古今集・恋一・1047・馬内侍・「郭公の鳴きつるは聞きつやと申ける人に」)

上の6首の恋歌における「心」が「そらになる」は、心が上の空になる、心がうつろになる、の意を表している。ただし、その内実は、同じ恋歌であっても一様ではない。

「秋風は…」詠は、男に見限られた女のつらい境遇との関わりで、「人の心のそらになる」という心理を歌っている。「時の間も…」詠は、後朝の別れの後の男の「心が上の空になって、恋しくてたまらない」(新大系) 思いを、「雲井なる…」詠は、「遠くに離れて居る人への思慕」で「上の空になってしまう」思い(ともに新大系)を、それぞれ詠んでいる。「君をのみ…」詠は雷見舞いの歌で、恋しい人を「気遣って、心が上の空になる」気持ち(新大系)を詠み、「白雲の…」詠は、相手からの手紙を見て心が「ますますうわの空になってしまった」さま(新大系)を詠じている。「心のみ…」詠は、不実な男に対する嘆きによって「気もそぞろ」(新大系)になる心情を詠んでいる。

個々の和歌は、それぞれの状況に応じた感情を表現しており、その感情が高まったあげく「魂が抜けたようで、しっかりした意識のない」(日本国語大辞典)状態になったと詠じている。「心」が「そらになる」は、一種の強調表現となっていて、そこに至る感情から連続し、融合している。

- ・別ゆく道の雲みになりゆけばとまる心もそらにこそなれ

(後撰集・離別 羈旅・1324・よみ人しらず・「みちのくにへまかりける人に、あふぎてうじてうたゑにかかせ侍りける」)

- ・春霞たつあか月を見るからに心ぞ空になりぬべらなる

(拾遺集・別・301・よみ人しらず・「春ものへまかりける人の、あか月に出で立ちける所にて、留まり侍ける人の詠み侍ける」)

上の離別詠では、それぞれ、別れのつらさを前提として、後に残される人の「うつろな状態」になる気持ち、「悲しくて、心も上の空に」なりそうな気持ち（ともに新大系）を表現している。

- ・天雲のうきたることと聞きしかど猶ぞ心は空になりにし

(後撰集・雑二・1142・女のはは・「返し」)

- ・見もはてで行くと思へば散る花につけて心の空になる哉

(拾遺集・春・60・よみ人しらず・「題知らず」)

- ・山ざくら白雲にのみまがへばや春の心のそらになる覽

(後拾遺集・春上・112・源縁法師・「通宗朝臣能登守にて侍りける時、国にて歌合し侍けるによめる」)

- ・そらになる人の心にささがにのいかでけふまたかくてくらさん

(後拾遺集・雑二・926・和泉式部・「人のもとに文やる男を恨みやりて侍ける返り事にあらがひ侍ければよめる」)

「天雲の…」詠では、婿とともに地方に下った娘のことが心配で、「(心が) うつろになった」(新大系) ことを意味し、「見もはてで…」詠では、散る花を哀惜しての虚脱状態を表現している。「山ざくら…」詠では、遠くに咲く桜を見て、「落ち着かずうわの空になる」気持ち(新大系)を表現し、「そらになる…」詠では、男の浮気心を、「上の空に」なる心(新大系)と表現している。このように、「心」が「そらになる」という表現自体は一定の状態を表現するにしても、そこに至る心情はやはり多様である。

以上のように、「心」が「そらになる」という表現は、いろいろな感情をその極限において示す側面を有している。したがって、これを単に「上の空」な気持ちと解するとすれば、

抽象的で不十分な理解に終わることがあるだろう。

3

○「心」と共起する表現のうち「心が空になる」を除く

次に、「心がそらになる」というパターン以外で、「心」と「そらなり」をともに用いた心情表現を概観する。

・秋風のうち吹そむる夕暮はそらに心ぞわびしかりける

(後撰集・秋上・221・よみ人しらず・「題しらず」)

・あらたまの 年のはたちに 足らざりし 時はの山の 山寒み 風もさはらぬ 藤衣
二度たちし 朝霧に 心も空に まどひ初め みなしご草に なりしより ……

(拾遺集・雑下・571・源順・「身の沈みけることを嘆きて、勘解由判官にて」)

・いつとなく心そらなるわが恋や富士の高嶺にかかる白雲

(後拾遺集・恋四・825・相模・「永承四年内裏歌合によめる」)

・春ごとにこころをそらになすものは雲みにみゆるさくらなりけり

(詞花集・春・25・戒秀法師・「題不知」)

・道すがら心も空にながめやるみやこの山の雲がくれぬる

(千載集・羈旅・513・待賢門院堀川・「(百首歌めしける時、旅の歌とてよませたまうける)」)

・宮こをば心をそらにいでぬとも月みんたびに思をこせよ

(新古今集・離別歌・893・読人しらず・「筑紫にまかりける女に、月いだしたる扇をつかはすとて」)

・思ひやる心も空に白雲の出でたつかたを知らせやはせぬ

(新古今集・恋五・1414・兵部卿致平親王・「女のほかへまかるを聞きて」)

上の歌には、「心」と「そらなり」の組み合わせ方は異なるものの、すべて「心」「空なる」状態を表現している。

「秋風の…」詠は、秋の悲しみによって心が「うつろに」(新大系) になっていることを、

「あらたまの…」詠は、孤児となって孤独と不安で「心もぼんやり」（新大系）していることを表現している。「いつとなく…」詠は、恋のためにいつも上の空の状態であることを示し、「春ごとに…」詠は、遠くに咲く桜を見て、「心ここにあらずの状態」（新大系）を表現している。「道すがら…」詠は、都を旅立つ人の悲しくて「心もうわの空」（新大系）の心境を、「宮こをば…」詠は、「都を出るのが悲しくて不安で落ち着かないさま」（新大系）を、「思ひやる…」詠は、旅に出る女を思っただけの「気もそぞろ」（新大系）な気持ちを、それぞれ表現している。

このように、「心」と「そらなり」を組み合わせた表現が示す具体的な心情は、「心」が「そらになる」の用例で確認したのと同様に、その和歌の主題に応じて多様である。

- ・ いかげせん山のはにだにとどまらで心の空に出づる月をば

（後拾遺集・雑一・869・大納言道綱母・「入道撰政物語などして、寝待の月の出づるほどに、とまりぬべきことなど言ひたらばとまらむと言ひ侍りければよみ侍りける」）

- ・ 時鳥こころも空にあくがれて夜がれがちなみ山辺の里

（金葉集・夏部・111・藤原顕輔朝臣・「郭公をよめる」）

- ・ さしてゆく山のはもみなかき曇り心の空にきえし月かげ

（新古今集・恋四・1263・よみ人しらず・「返し」）

上の3首は、「心」「そらなり」に加え、「出づ」「あくがる」「消ゆ」という動詞を伴う用例である。

「いかげせん…」詠は、夫が他の女のもとに「心も上の空になって出て行く」（新大系）ことを嘆いた歌である。「心が上の空だ」という状態と、家を出て行くこととを複合させた表現である。「時鳥…」詠は、訪れてこない郭公の心を「こころも空にあくがれて」と表現している。「分別を失い、うわの空になる意と、空に心が惹かれる意を懸け」（新大系）た表現である。この2首は、ふわふわ出て行く夫の心、空にばかりいて訪ねて来ない郭公の心をその行動とともに表現している点で、共通点がある。

「さしてゆく…」詠は、女の家を目指していたが、恋しさのあまり「心が上の空に消え」（新大系）た思いを詠じている。

○「心」を含まないが、人の心の状態を表す表現

次に、「心」という語を用いてはいないが、「そらなり」によって心情を表現している例を概観する。

- ・朝な朝な立つ河霧の空にのみうきて思ひのある世なりけり
(古今集・恋一・513・よみ人しらず・「題しらず」)
- ・五月山こずゑを高みほととぎす鳴くねそらなる恋もする哉
(古今集・恋二・579・貫之・「題しらず」)
- ・人を見て思ふ思ひもある物を空に恋ふるぞはかなかりける
(後撰集・恋二・601・藤原忠房朝臣・「女のもとに、はじめてつかはしける」)
- ・我が恋し君があたりを離れねば降る白雪も空に消ゆらん
(後撰集・恋六・1072・よみ人しらず・「心ざし侍女、宮仕へし侍ければ、逢ふこと難くて侍けるに、雪の降るに、つかはしける」)

上の4首の恋歌のうち、「朝な朝な…」「五月山…」「人を見て…」は、それぞれ「思ひ」「恋」「恋ふ」という語を用いていて、恋に伴う上の空の状態を表現している。「朝な朝な…」では、さらに「気持が落ち着かない、不安定である状態」(日本国語大辞典)を表す「うき」(浮き)を添えている。

「我が恋し…」詠では、「空に」について品詞の認定が揺れている。『八代集総索引』は、「そら」「そらなり」の両方に立項。新大系、『後撰和歌集全釈』¹⁷は、形容動詞の意味合いを認めていない。けれども、古典叢書が「五句に自分も消え入る思いであることを添える」と注記するように、「白雪も」の「も」は、詠者の「心が空に消える」思いを前提にしていると考えるのが妥当であろう。

そのように、前提として暗示される意味・表現において、「空に」は形容動詞として機能しているものと判断される。

¹⁷ 木船重昭著『後撰和歌集全釈』(1988年、笠間書院)

- ・初雁の我もそらなるほどなれば君も物うき旅にやあるらん
 (後撰集・離別 羈旅・1315・よみ人しらず・「このたびの出で立ちなん物うくおぼゆる」と言ひければ)
- ・あまの河そらにきえにし舟出にはわれぞまさりて今朝はかなしき
 (新古今集・離別歌・873・加賀左衛門・「老いたる親の、七月七日筑紫へ下りけるに、はるかに離れぬことを思ひて、八日あか月、をひて舟に乗る所につかはしける」)

「初雁の…」詠の「我も」は、先にも述べたように、「初雁に対して自分も」の意で、「あの空を飛んでいる初雁と同様に、私も空中にいるような心もとない状態にあります…」(新大系)の意を表している。

「あまの河…」詠の「そらにきえ」は、新古今集の諸注釈では「空に聞こえ」という本文をとっている。その中で新大系は「そらにきえ」であるが、「牽牛の姿が天の川の空に消えてしまった舟出の」というように、「そらに」を形容動詞と認定してはいないようである。しかしながら、この「そらにきえ」は、下の句の「われぞまさりて今朝はかなしき」と縁語の関係にあって、牽牛が去っていくことに詠者の心を重ねて、「心が空にきえる」ことを響かせていると解するのが正しいであろう。その暗示される内容・表現において、「空に」は形容動詞として機能しているものと判断される。

- ・天つ星道も宿も有ながら空に浮きてもおもほゆる哉
 (拾遺集・雑上・479・贈太政大臣・「流され侍ける道にて詠み侍ける」)
- ・かきくもれしぐるとならば神無月けしきそらなる人やとまると
 (後拾遺集・雑二・938・馬内侍・「十月許にまうできたりける人の、しぐれのし侍りければ、たたずみ侍りけるに」)
- ・恋ひつつや妹がうつらんからごろもきぬたの音のそらになるまで
 (千載集・秋下・339・大納言公実・「堀川院御時、百首歌たてまつりける時、擣衣の心をよみ侍ける」)
- ・神無月しぐるるころもいかなれやそらにすぎにし秋の宮人
 (新古今集・哀傷歌・804・相模・「枇杷皇太后宮かくれてのち、十月許、かの家の人々の中に、たれともなくてさしをかせける」)

「天つ星…」詠は、流罪の道中の悲しみを詠んだ歌で、「空に浮きて」は不安定で上の空の心境を詠んでいる。「かきくもれ…」詠は、「帰ろうとする恋人を遠まわしな言い方で引き留める女の歌」（新大系）で、「けしきそらなる」は帰ろうとしている男の、上の空な思いを意味している。「恋ひつつや…」詠は、衣を打つ女の心境を「心が虚しくうわの空」（新大系）なものと同推測した作。「神無月…」は、宮の死の「悲しみに心もうわの空になって」いる心を詠んでいる。ここでも、「そらに」自体は「上の空」という意味を表しているが、その具体的な心情はさまざまである。

5

次に、副詞的用法として、「空に知る」の用例 12 首、ならびに「空に見ゆ」の用例 2 首を概観する。

この用法は、「これといった根拠のないさま。はっきりした理由のないさま。何となしにそう思うさま。」（角川古語大辞典）、「特に、「知る」などを修飾して、とりたてて意図したり教えられたりせず、自然に推量して知ることをいう。」（日本国語大辞典）と辞書に記述される用法である。

・ 君を思ふ心長さは秋の夜にいづれまさとそらに知らなん

（後撰集・恋四・842・源是茂朝臣・「返し」）

・ 怨むとも恋ふともいかが雲井より遥けき人をそらに知るべき

（後撰集・恋六・998・よみ人しらず・「返し」）

上の2首は、ともに恋歌で、「そらに」はそれぞれ「何もなくても」「あて推量で」（ともに新大系）の意を表している。

離れている相手の思いは、直接的な根拠に基づいて知ることはできないので、「そらに」が用いられている。ただし、「そらに…知る」という表現は、「不確かに知る・いい加減に知る」ということを意味しないことには注意したい。

・ 霞さへたなびく野辺の松なれば空にぞ君が千代は知らるる

- (後拾遺集・賀・428・源兼澄・「東三条院卅賀し侍りけるに、屏風に子日して男女、車よりおりて小松引く所をよめる」)
- ・くもりなき鏡の山の月をみてあきらけき代をそらにする哉
(新古今集・賀歌・751・宮内卿永範・「久寿二年大嘗会悠紀屏風に、近江国鏡山をよめる」)
 - ・白雲にまがふ桜のこずゑにて千年の春をそらにするかな
(金葉集・春・40・待賢門院中納言・「新院御方にて花契遐年といへることをよめる」)
 - ・さきにほふ花のけしきを見るからに神の心ぞそらにしらるる
(新古今集・神祇歌・1906・白河院御歌・「熊野へ詣で給ひける時、道に花の盛りなりけるを御覧じて」)

上の4首は、穏やかで美しい情景から「君が千代」「あきらけき代」「千年の春」「神の心」が「そらに知られる」という、共通の発想のもとに詠まれている。ここで「知る」とは、いい加減に知ることではなく、真実をその通りに知ることとでなければならぬ。「そらに」は特定の根拠がないことを意味するだけで、「知る」はあくまでも確かな認識を意味している。¹⁸

- ・我が祈る事は一つぞ天河空にしりても違へざらなむ
(拾遺集・秋・154・よみ人しらず・「題しらず」)
- ・たなばたは空に知るらんささがにのいとかく許祭る心を
(拾遺集・雑秋・1082・源順・「屏風に、七月七日」)

この2首は、七夕に祈願する心を詠んだ歌であるが、次のように、「空に知る」について異なる解釈が行われている。

○「我が祈る…」詠について

¹⁸ 「霞さへ…」詠について、新大系、『後拾遺和歌集新釈』(犬養廉・平野由紀子・いさら会著、1996年、笠間書院)は、「空に」を名詞+格助詞として解するが、発想を共有する他の3首と同様、形容動詞として解するのが妥当である。古典叢書、『後拾遺和歌集全釈』(藤本一恵著、1993年、風間書房)は、形容動詞として解釈している。

*空に 天空にと上の空にと両意を掛ける。 (新大系)

*空にしりても 「天上で知って」と、「うわのそらで聞いて」の意をかける。
(古典叢書)

○「たなばたは…」詠について

*空に知る 暗に理解する。 (新大系)

*空にしるらん 天空にあつて、(見なくても、地上の人の心を) 判っているだろう。
(古典叢書)

けれども、「我が祈る…」詠の「空にしりても」の「も」は、「形容詞の連用形・副詞・数詞・接続助詞「て」などを受け、また複合動詞の中間に介入して詠嘆的強調を表わす」(日本国語大辞典)用法であり、「そらにしりて違へざらなむ」(=自ずから知ってたがえないでほしい)という行為全体を強調したものと考えるのが妥当であるから、2首の「そらに」はともに「暗に・自ずから」の意を表しており、前者の「空に」から「上の空に」というニュアンスを読み取るべきではないと思う。

・ながむらむ明石の浦のけしきにて都の月は空に知らなん
(後拾遺集・羈旅・524・絵式部・「返し」)

・白河の流れをたのむころをば誰かはそらにくみてしるべき
(詞花集・雑下・377・大納言成通・「新院位におはしましし時、上ののをのこどもを召して、述懐の歌よませさせ給けるに、白河院の御ことを忘るる時なくおぼえ侍ければ」)

・さえわたる夜半のけしきにみ山べの雪のふかさをそらに知るかな
(千載集・冬歌・447・藤原季通朝臣・「(百首歌中に、雪の歌とてよませたまうける)」)

・山里の柴をりをりに立つ煙人まれなりと空にしるかな
(千載集・雑歌中・1092・2条太皇太后宮肥後・「堀河院御時百首歌たてまつりける時、山家の心をよめる」)

・恨みけるけしきや空に見えつらん姨捨山を照す月かけ
(千載集・釈教歌・1244・藤原敦仲・「勸持品をよめる」)

・たちいらで雲まをわけし月かげは待たぬけしきやそらに見えけん

(新古今集・釈教歌・1976・西行法師・「返し」)

これらの「空に知る」「空に見ゆ」も、これまでの歌と同様に、直接確かめようがないながらも、推し量って事実をそれと知る・それと見えるということの意味している。

最後に、連用形「そらに」の用例3首を検討したい。

・知るといへば枕だにせで寝しものを塵ならぬ名のそらに立つらん

(古今集・恋三・676・伊勢・「題しらず」)

・まことにやそらになき名のふりぬらん天照る神のくもりなき世に

(後拾遺集・雑二・930・相模・「大弍資通むつましきさまになむいふと聞きてつかはしける」)

この2首では、「名が…空に立つ」という形で、事実無根の噂が広まることを表現しており、「空に」は「根拠が不確実であること。また、そのさま。」(日本国語大辞典)の意を表している。

さ夜ふけて風やふくらん花の香のにはほふ心地の空にするかな

(千載集・春上・23・藤原道信朝臣・「題不知」)

この歌の「空に」は、「なんとなく」(新大系)の意を表している。

おわりに

以上、八代集から形容動詞「そらなり」を用いた歌を抽出し、様々な場面での「そら」の意味用法を考察した。

人の心の状態を表す用法では、「心」が「そらになる」という形が多く用いられていて、「上の空になる」「うつろになる」という意味を表しているが、具体的な心情としては、恋しさ、切なさ、不安、つらさ、悲しみなど、さまざまな感情の結果としての「上の空」「うつろ」を表現していることが窺えた。その傾向は、「心」と「そらなり」を組み合わせた多

様な用例、また「心」を用いない「そらなり」の用例にも当てはまる。

連用形「そらに」の副詞的用法としては、「そらに知る」「そらに見ゆ」の用例を中心に検討した。この場合「そらに」は「暗に」「おのずから」という意味を表すが、その「根拠がない」というニュアンスとは別に、それがかかる「知る」「見ゆ」には不確かという意味合いはなく、真実を確かに知る、真実が確かに見える、ということを表していることを示した。

5 「つねなり」

はじめに

形容動詞「つねなり」の八代集所集歌における使用状況を、『八代集総索引』を利用して調べてみると、用例数が29例ある。本節では、この29例を研究対象として、八代集において、形容動詞「つねなり」はどんな形でどのように使われているのかという問題を考えながら、各集の用例を取り上げて検討し概観してみることにする。

八代集における「つねなり」の用例の考察に先立って、『日本国語大辞典』と『角川古語大辞典』を利用し、「つねなり」の意味解釈を調べておく。

○『日本国語大辞典』

つね【常・恒】

〔名〕

- (1) (形動) 同じ状態で、長く時を経過すること。いつも変わらないでいるさま。また、そういうもの。永久不変。常住。副詞的にも用いる。
- (2) (形動) 日常普通に見られる行為や状態であること。いつもの通りであるさま。ふだん。平素。副詞的にも用いる。
- (3) (形動) 日常の事物や状態を基準にした価値判断で、普通の程度であるさま。特殊でないありふれた事物、状態。人並み。あたりまえ。
- (4) 絶え間をおかないで続けること。中断することがないこと。副詞的にも用いる。
- (5) 変わることなく継続的に行なわれること。
- (6) 同類のものが共通してそなえている性質や傾向。

○『角川古語大辞典』

つね【常・恒】

〔名〕

- (1) それが異例や特例でないことにいう。
 - ④その性質や状態がそのものにとっていつもそうであること。ならい。

㊤ 日常普通のさまであること。つね日ごろ。ふだん。

㊦ 価値的に普通、世間並みであること。

(2)それが不変であることにいう。

㊧ 恒常であること。また、ある状態のものとして一定していること。

㊨ 恒例であること。同じ様式・方法の反復されること。

㊩ 同じ行為が継続すること。始終。「に」を伴って副詞的に用いられることが多い。

『日本国語大辞典』は「つね」を名詞として立項した上で、6つの意味を記述する。そのうち、(1)、(2)、(3)は、「つねなり」という形容動詞としての意味で、副詞的にも用いる場合のあることを記す。

『角川古語大辞典』は、「つね」を名詞として扱い、形容動詞としては記述していない。しかし、(1)「それが異例や特例でないことにいう」と(2)「それが不変であることにいう」の意は、『日本国語大辞典』における形容動詞としての意味記述に重なり合うものである。

それぞれの辞書の示す語義・解説は、おおむね一致するが、異同もある。今、形容動詞として説明を加えている『日本国語大辞典』の語義を目安として用いながら、古今集から新古今集までの八代集の和歌について、形容動詞「つねなり」の用例を抽出して概観する。

1

○ 同じ状態で、長く時を経過すること。いつも変わらないでいるさま。

手始めに古今集の用例を見てみよう。

・花のごと世の常ならば過ぐしてし昔は又も帰りきなまし

(古今集・春下・98・よみ人しらず・「題しらず」)

・あな憂目に常なるべくも見えぬ哉こひしかるべき香はにほひつつ

(古今集・物名・426・よみ人しらず・「梅」)

「花のごと…」詠では、桜の花を「常」なるものにとらえ、それを前提に、上の句で「毎年咲く花のようにこの世の中が変らないならば」(新大系)という仮定を行っている。「花

はなかないというが、その咲く時の色は変らない」(新大系)というように、花を無常ととらえる常識を相対化している。花は毎年咲くが、昔は帰って来ない。そのように世が無常でなければよいのにと願っている。

「あな憂目…」詠では、「うめ」は「うし」の語幹を「目」に組み合わせた「うめ」と「梅」を掛ける。「常なる」は、「梅の花は、見る目にいつも変わらない」(新大系)というように、梅の花は不変な様子であることを意味していて、「べくも見えぬかな」というように、実際は不変ではなく、まもなく散ってしまうだろうと表現している。この2首は桜・梅の花について、不変であるかないかを詠み、さらに、前者では「世」の無常を嘆いている。

・ 咲きそめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

(古今集・雑下・931・貫之・「屏風の絵なる花を、よめる」)

・ 世の中はなにか常なるあすか河きのふの淵ぞけふは瀬になる

(古今集・雑歌・933・よみ人しらず・「題しらず」)

屏風歌「咲きそめし…」詠では、「つねなる」は句末に置き、咲き始めた桜の花が散らずに咲き続けること、世が常住不変の春であることを詠んでいる。ふつうの桜は咲いたあとまもなく散り始める無常の存在だが、屏風の絵ではそうではない。「絵の中の世界をいい、更に広くこの世をもいう」「常住不変の春を述べてことほぐもの」(新大系)である。

「世の中は…」詠では、下の句で「あすか河」という「変ることの代表的景物」(新大系)を比喩的にとりあげて、「世の中」に何か「一定不変のもの」はないと詠んでいる。

この2首でも、「花」あるいは「世(の中)」について「常なり」を用い、それが不変であるかないかについて表現している。

次に、後撰集以降の用例を概観しよう。

・ 花の色は散らぬ間許ふるさとに常には松の緑なりけり

(後撰集・春上・43・藤原雅正・「松のもとに、これかれ侍て花を見やりて」)

・ 千世ふべき瓶に挿せれど桜花とまらぬ事は常にやはあらぬ

(後撰集・春下・83・よみ人しらず・「返し」)

「花の色は…」詠では、落葉しない松の緑について、それが永遠不変であることを「常に」で表し、花の色の美しさが散るまでのもので、一時的であることと対比している。¹⁹

「千世ふべき…」詠は、底本の「とまらむ」を「とまらぬ」に改める古典叢書の説に従った。「千年を経ることが出来るカメにさしても、桜の花が留まらないということは常のことではないでしょうか」(古典叢書)の意の歌で、はかないと思われている桜の花にとって、留まらず散ってしまうことが、永遠不変なのだと思じた歌と思われる。

・ 鷲の山へだつる雲や深からんつねにすむなる月を見ぬかな

(後拾遺集・雑六・1195・康資王母・「寿量品」)

・ 月影の常にすむなる山の端をへだつる雲のなからましかば

(千載集・釈教・1207・藤原国房・「後冷泉院御時、皇后宮に1品経供養せられる時、寿量品の心をよめる」)

この2首では、月が「常に」澄むことを詠んでいる。ともに、霊鷲山で「久遠常住不滅」(新大系)である釈尊の比喩となっている。また、「雲」はなかなか仏法を理解できない迷いの雲の比喩。「釈迦は衆生を救うための方便として入滅したかに見せるが、実は、常に霊鷲山上に出現して生命ある者の世界で法を説くとする寿量品の主旨を、衆生の迷蒙の雲の喩えに詠む」(新大系)歌である。

・ つねに見し君がみゆきをけふ問へば帰らぬ旅と聞くぞかなしき

(千載集・哀傷・589・法印澄憲・「二条院かくれさせ給うて御わざの夜よみ侍ける」)

この歌で、「つねに」は、「常日ごろ」の意と理解されていて、上の句は、「常日ごろ目にしていた君の行幸を…」(新大系)、「常日頃お会いしていた帝が見えないので…」(古典叢書)と解釈されている。けれども、この「つねに見し」は、「永久不変なものを見ていた」

¹⁹ 「花の色」について、古典叢書は、「花やかな女を寓す」とし、「美しいがあだな女よりは、古里で男をひたすら待つ女の方が本当はすばらしいのだと、古里に来てみて気が付いたとの寓意」と解説している。花についてはたしかにその可能性はあるだろうが、松は植物の松として理解すればよいのではないだろうか。

の意味だろう。いつまでも長寿を保つと思われていた帝の印象と、「二度と帰らぬあの世への旅」に発ったこととを対比して、哀傷の思いを詠んだ歌である。

2

これまで見てきた9首では、「つねなり」は永久不変の意味であるが、一首の意味としては永久不変ではないものを詠んでいるものも多い。

そのことと関連して、八代集において、「つねなり」が打消の助動詞「ず」を伴って、「つねならぬ」という形で用いられた用例が散見することについて、概観してみたい。

- ・ つねならぬ山のさくらに心入りて池のはちすをいひなはなちそ
(後拾遺集・雑五・1152・源重之・「法師の色好みけるをよみ侍ける」)
- ・ つねならぬわが身は水の月なればよにすみとげんことも思はず
(後拾遺集・雑六・1190・小弁・「同喩の中に、此の身水月の如しといふ心を」)
- ・ 常ならぬためしはよはの煙にて消えぬ名残を見るぞかなしき
(千載集・神祇・1254・天台座主明雲・「天王寺にまいりて遺身舍利を礼してよみ侍ける」)

「つねならぬ山のさくらに…」詠は、「好色な僧をたしなめる歌」(新大系)で、山桜をすぐに散ってしまう無常なものとして詠んでいる。その「山のさくら」は「女色の比喻」(新大系)であり、下の句の「池のはちす」＝「悟りや極楽往生の比喻」(新大系)と対比されている。

「つねならぬわが身は水の…」詠の「つねならぬわが身」は、自分自身が無常な存在であることを表現していて、それを水に映る月に喩えている。

「常ならぬためしはよはの…」詠の「常ならぬためし」は、この世が無常であることの例として釈尊が亡くなったことを意味している。

これら3首では、「つねならぬ」は永久不変を打ち消した表現となっていて、人やこの世が無常であることを意味している。

上記の他に、「つねならぬ世」という固定した表現として用いられている歌が5首見出せ

る。²⁰

- ・ 常ならぬ世は憂き身こそ悲しけれその数にだに入らじと思へば

(拾遺集・哀傷・1300・右衛門督公任・「返し」)

- ・ けふこずは見でややままし山里の紅葉も人もつねならぬ世に

(新古今集・哀傷・800・前大納言公任・「世中はかなく、人人おほくなくなり侍りけるころ、中将宣方朝臣身まかりて、一月許、白河の家にまかれりけるに、紅葉のひと葉のこれるを見侍て」)

- ・ 心にもまかせざりける命もてたのめもをかじ常ならぬ世を

(新古今集・恋五・1423・権中納言敦忠・「題しらず」)

- ・ 色香をば思ひも入れず梅の花つねならぬ世によそへてぞ見る

(新古今集・雑上・1445・華山院御歌・「梅の花を見給ひて」)

- ・ おしめども常ならぬ世の花なれば今はこの身を西にもとめん

(新古今集・雑上・1465・鳥羽院御歌・「鳥羽殿にて花の散りがたなるを御覧じて、後3条内大臣にたまはせける」)

「つねならぬ世」は、『八代集総索引』では、「つねなり」とは別に立項されている。「無常の世」の意を表す一つの言葉として扱っているものと見られる。ここでは、「つねならぬ・世」と分解し、形容動詞「つねなり」の用例として考察に加えることとする。

「常ならぬ…」詠の「つねならぬ世」は、贈歌の詞書に「昔見侍し人々多く亡くなりたることを……」とある状況を踏まえている。

「けふこずは…」詠は、やや例外的な用例で、上から「山里の紅葉も人もつねならぬ」とつながり、それが「つねならぬ世」と受けとめられている。ここでは紅葉が散ってしまうこととともに、人の命の無常も歌われている。

「心にも…」詠では、詠者自身のいつ絶えるかわからない命を意識しながら、無常の世を詠んでいる。

「色香をば…」詠、「おしめども…」詠では、それぞれ、やがて散る梅の花の色香と「散りがたなる」桜の花をとりあげて、そこから無常の世を連想している。2首とも詠者自身

²⁰ 『八代集総索引』では、「つねならぬ世」は独立な見出し語として立てられている。

の無常を意識しながら詠まれているものと思われる。

以上のように、「つねならぬ（世）」という表現は、人の命が無常であることに主眼を置きいて用いられるのがふつうであることと、より広く、月・紅葉・花など、はかないものを視野に収めながら用いられることもあることがわかる。

3

○日常普通に見られる行為や状態であること。いつもの通りであるさま。ふだん。平素。

上記の意味とは別に、『日本国語大辞典』は、「常」という形で用いられたものを用例として、「絶え間をおかないで続けること。中断することがないこと」「変わることなく継続的に行なわれること」という意味を項目として示している。ここでは、その継続の意味合いも加えて考えたい。

ここでも、まず古今集の用例から検討してみることにする。

・山たかみ常に嵐のふく里はにほひもあへず花ぞちりける

(古今集・物名・446・紀利貞・「忍草」)

・人しれぬ思ひをつねにするがなる富士の山こそわが身なりけれ

(古今集・恋一・534・よみ人しらず・「題しらず」)

・たまほこの道はつねにもまどはなむ人を訪ふとも我かとおもはむ

(古今集・恋四・738・因香朝臣・「題しらず」)

・逢ふことの 稀なる色に 思ひそめ わが身は常に 天雲の 晴るる時なく 富士の嶺の 燃えつつ永久に 思へども 逢ふことかたし ……

(古今集・雑体・1001・よみ人しらず・短歌：「題しらず」)

この4首で、「つねなり」はすべて「つねに」という形で、連用修飾語として用いられている。そのかかる語や前後の表現を見ると、その用いられ方は、次の三通りに分けることができるだろう。

① 自然の現象について、「常に～する」「常に～している」という意味を表しているも

の。「山たかみ…」詠の、「常に嵐のふく」が当てはまる。

② 他者や何かを思う詠者自身の行為に関連して、「つねに」が用いられているもの。「人しれぬ…」詠の「思ひをつねにする」と、「逢ふことの…」詠の「常に～思へども」がこれに当てはまる。

③ 他者の行為について「常に～する」「常に～している」という意味をあらわしているもの。「たまほこの…」詠の「つねに～まどは」が当てはまる。

次にこの①～③の順に、後撰集以降の用例を概観し、さらに上記から外れた用例についても検討してみる。

① 自然の現象

秋の月常にかく照る物ならば闇にふる身はまじらざらまし

(後撰集・秋中・324・よみ人しらず・是貞のみこの家の歌合に)

当てはまるのは、この1首のみ。秋の月は雲に隠れなどすることも多いが、それがいつもいつも照るとしたら、という仮定をしている。

② 他者や何かを思う

この用例は最も多いので、思う内容によって、a 恋の思いと、b それ以外の思いに分けて概観する。

a 恋の思い

・春日野におふる若菜を見てしより心をつねに思ひやる哉

(後撰集・春上・13・みつね・「しはすばかりに、大和へ事につきてまかりけるほどに、宿りて侍りける人の家のむすめを思かけて侍りけれど、やむごとなきことによりて、まかりのばりにけり。あくる春、親のもとにつかはしける」)

・思やる心はつねに通へども相坂の関越えずもある哉

(後撰集・恋一・516・三統公忠・「題しらず」)

- ・恋をのみ常にするがの山なれば富士の峰にのみ泣かぬ日はなし

(後撰集・恋一・565・よみ人しらず・「題しらず」)

- ・思ひやる方も知られず苦しきは心まどひの常にやあるらむ

(後撰集・雑四・1286・よみ人しらず・「題しらず」)

- ・なげ木こる山地は人も知らなくに我が心のみ常に行く覧

(拾遺集・恋五・970・藤原有時・「題しらず」)

「春日野に…」詠は、春上の部に収められているが、恋の歌の内容を詠んでいる。下の句は、「我が心を常にそちらに馳せていることでもありますよ」(新大系)の意で、相手の親に対して自分の誠意の強さを伝えようとしている。

「思やる…」詠もやはり、遠く離れた女に対していつも思いを馳せていることを表現している。

「恋をのみ…」詠は、恋を常にしている自分の心を表現している。毎日泣いているという下の句と合わせて、自分の恋心を強調している。

「思ひやる…」詠は、どうしても相手への思いを晴らすことができないでいることについて、いつもいつも心を惑わしているからだろうと想像している。この歌の下の句は、

- ・心惑いしている時の常のことであるのでしょうか。(新大系)

- ・心惑いの常なのであろうか。(古典叢書)

と解されているが、「心惑いがいつもいつもあるのだろうか」と解するほうがよいだろう。

「なげ木こる…」詠は、他の人は知らない恋の深い嘆きをしていることを、「なげ木こる山地」に自分の心だけが「常に」行くからだ、ととりなしている。

以上の5首で、「常に」はすべて詠者の恋の思いを強調するために用いられている。

b 恋以外の思い

- ・別地は渡せる橋もなき物をいかでか常に恋ひ渡べき

(拾遺集・別・318・源順・「兼盛駿河の守にて下り侍りける、馬の餞し侍とて」)

- ・いまはただむかしつねに恋ひらるる残りありしを思ひ出にして

(詞花集・雑上・343・大納言伊通・「題しらず」)

- ・ももしきの内のみつねに恋しくて雲の八重たつ山はすみうし

(新古今集・雑下・1719・如覚・「御返し」)

「別地は…」詠では、旅立つ友人に対して、あなたが行く旅路には都と橋がかけていないのに、どうしていつもあなたを恋しく思い続けることになるのだろうか、相手への友情を詠んでいる。新大系は、「いかでか」を反語に解釈しているが、疑問と解するほうがよいだろう。

「いまはただ…」詠、「ももしきの…」詠は、それぞれ過去を常に恋しく思う気持ちを詠んでいる。前者では、「若くてまだ将来への夢があった」昔を思い、後者では、かつて過ぎた宮中のことを恋しく思っている。

この3首の「常に」も、恋の歌と同じように、詠者の思いを強調するように用いられている。

③ 他者の行為

- ・たまほこの道はつねにもまどはなむ人を訪ふとも我かとおもはむ

(古今集・恋四・738・因香朝臣・「題しらず」)

- ・絵にかける鳥とも人を見てし哉おなじ所を常にとふべく

(後撰集・恋三・709・本院侍従・「時々見えける男のゐる所の障子に、鳥のかたをかきつけて待ければ、あたりに押しつけ侍りける」)

「たまほこの…」詠は、他の女のもとに通う男が、いつも道に迷って自分の所にやって来ることを願っている。

「絵にかける…」詠は、「時々見えける男」がいつもいつも自分の所に来てくれることを願っている。

2首とも、不実な男の行動に関連して、それを打ち消す方向に「常に」を用いていて、そのことで自分の願望を強調している。

- ・くる事は常ならずとも玉葛たのみは絶えじと思心あり

(後撰集・恋六・1001・よみ人しらず・「男のまで来て、すき事をのみしければ、人やいかが見るらんとて」)

この歌は、他の歌と異なっていて、いつもいつも来なくてもかまわない、と詠んでいる。毎日やって来て「すき事」ばかりする男について、「人目があるのでほどほどにとの心」（古典叢書）を詠んでいて、やや特殊な歌であると思われる。

④ ①～③以外の意味。

これに当てはまるのは次の一首のみである。

・ つねならばあはで帰るも歎かじを都いづとか人の告げつる

（後拾遺集・別・463・源道濟・「田舎へ下りける人のもとにまかりたりけるに、侍らざりければ、家の柱に書き付けける」）

この「つねならば…」詠は、「友の離京を知らされなかつた嘆き」（新大系）を詠んだ歌で、「つねならば」は、「いつもだったら」「いつものように単なる不在だったら」の意を表している。これは、『日本国語大辞典』の説明では、「ふだん」「平素」の意味にあたる。

おわりに

以上、八代集の和歌における「つねなり」の用例について、

「同じ状態で、長く時を経過すること。いつも変わらないでいるさま」

「日常普通に見られる行為や状態であること。いつもの通りであるさま。ふだん。平素」という、二つの意味に分けて、検討を行った。

前者の意味では、桜・梅・松・月のような自然と、世、人のような人事に、「つねなり」が用いられている。大きな特徴としては、いつも変わらないでいるさまについてではなく、変わっていく様子を詠む傾向があることがあげられる。桜や梅では、散っていくこと、月では雲に隠れることを詠み、人事については、人の死を表現することが多い。その顕著な例として、「つねならず」「つねならぬ世」を用いた歌についてまとめて考察した。

後者の意味では、人事詠において、他者に対する思いについて「いつもいつも思っている」と表現する場合に用いられた例がほとんどである。その思いは、恋の思いとそれ以外

の思いに分けられるが、どちらの場合も、思いを強調するために用いられている。その他、他者の行為について用いられ、自分の願望を表現している例も複数見られた。

6 「はつかなり」

はじめに

形容動詞「はつかなり」の語義について、『日本国語大辞典』と『角川古語大辞典』は、以下のように説明している。

○『日本国語大辞典』

「はつ - か」

〔形動〕

(「はつ」は、「はつはつ」と同語源で、「か」は接尾語)

(1) 物事のはじめの部分がちらりと現われるさま。かすか。ほのか。特に、視覚や聴覚に感じられる度合の少ないさまを表わす。

(2) 少しの時間であるさま。

(3) (「わずか」と混同されて) 分量の少ないさま。ほんの少し。わずか。副詞的にも用いられる。

○『角川古語大辞典』

はつか【僅】形動ナリ

物事の一部がちらっと現れるさま。あるかないか、よく分らぬさま。ほのか。わずか。

上記のように、『日本国語大辞典』は語義を細かく分けて記述するが、『角川古語大辞典』は、『日本国語大辞典』の(1)に該当する意味のみ記述して、(2)(3)には触れない。

『日本国語大辞典』は、(3)の用例として平家物語以降の用例を挙げているので、ここでは、同書の(1)(2)の語義を参考にしながら、検討していきたい。

「はつかなり」を用いる歌は、八代集に13首見出せる。それを部立別に挙げてみると次のようになる。

夏 1首

恋 8首

別 1首

雑 2首

雑体 1首

このうち、夏歌1首、雑歌1首、雑体1首は、それぞれ恋歌の要素の強いものなので、「はつかなり」は、恋の歌の主題に親和性をもつことが大きな特徴として指摘できる。

以下、まず恋の歌と、恋歌の要素の強い他の部立の3首を概観し、次に残りの歌を検討したいと思う。

1

○ 恋の歌

- ・春日野の雪間をわけて生ひいでくる草のはつかに見えしきみはも
(古今集・恋一・478・壬生忠岑・「春日祭にまかれりける時に、もの見に出でたりける女のもとに、家を尋ねて遣はせりける」)
- ・初雁のはつかに声をききしより中空にのみ物を思哉
(古今集・恋一・481・凡河内躬恒・「題しらず」)
- ・あな恋しはつかに人をみづの泡の消えかへるとも知らせてし哉
(拾遺集・恋一・636・小野宮太政大臣・「堤の中納言の御息所を見て遣はしける」)
- ・年月の行らん方も思ほえず秋のはつかに人の見ゆれば
(拾遺集・恋四・906・伊勢・「題しらず」)
- ・奥山の峰とびこゆる初雁のはつかにだにも見でややみなん
(新古今集・恋一・1018・躬恒・「題しらず」)
- ・跡をだに草のはつかに見てしかな結ぶばかりのほどならずとも
(新古今集・恋一・1023・和泉式部・「返事せぬ女のもとにつかはさんとて、人のよませ侍ければ、二月許によみ侍ける」)
- ・逢ふことをはつかに見えし月かげのおぼろけにやはあはれとは思ふ
(新古今集・恋四・1256・天曆御歌・「広幡の御息所につかはしける」)
- ・初雁のはつかに聞きしことつても雲路に絶えてわぶる比かな

(新古今集・恋五・1418・西宮前左大臣・「題しらず」)

この8首の恋歌において、「はつかなり」はすべて連用形「はつかに」という形で用いられている。それがどのような言葉と共起しているかを見ると、次のように整理できる。

「見ゆ」…「はつかに見え」「はつかに(人の)見ゆれ」「はつかに見え(し月かけ)」

「聞く」…「はつかに(声を)きき」「はつかに聞き」

「見る」…「はつかに(人を)み」「はつかに(だにも)見」「はつかに見」

これらは、すべて恋の主題に深く関係する動詞である。さらに一語ごとに分けて、その用例を見ていこう。

* 「見ゆ」

「春日野の…」詠の「はつかなり」は、上の句の序詞を受けて、草がわずかに見えたことをいうとともに、歌の主旨の部分で、「わずかに姿が見えたあなた」の意を表している。

「年月の…」詠では、「僅かの意の「はつかに」に、「秋の果つ」を言い掛ける」(新大系)技巧を用いている。「はつかに人の見ゆれば」は、「久しく訪ねて来ない人」(新大系)のことをいっている。

「逢ふことを…」詠の「はつかなり」は、月がわずかに見えたことを表現している。わずかな逢瀬の比喩にもなっていると推測される。

* 「聞く」

「初雁のはつかに声を…」詠の「はつかなり」は、初雁の声と、それが比喩する女の声をわずかに聞いたことを表現している。

「初雁のはつかに聞きし…」詠の「はつかに聞きしことつて」は、「これまで時々くれていた便り」(新大系)の意を表している。「はつかに」の意味としては、「ほのかに(聞く)」意を表しているが、「ことつて」に即した意味としては、「時々、まれに」の意になっていると考えられる。

* 「見る」

「あな恋し…」詠は、「みづ」に「見」をかけていて、「はつかに人を見」で「ほんのわずかばかりあなたの姿を見かけて」（新大系）の意を表している。

「奥山の…」詠の「はつかに」は「ほんの一目」（新大系）の意を表している。

「見る」には「契りを結ぶ。逢瀬を遂げる」の意もあるが、上の2首では、文字通り「姿を見る」の意で用いられている。

「跡をだに…」詠では、「跡をだに…はつかに見てしかな」で「せめてお便りだけでも…一目見たいものだ」（新大系）の意を表している。「だに」は比況の助詞で、それ以上のことがら、すなわち「契りを結ぶ」（新大系）ことを暗示している。ここでは、「見る」は、手紙を見るの意を表しながら、契りを結ぶ意も想像させている。

以上の8首において、「はつかなり」は、「見ゆ」「聞く」「見る」と共起しながら、恋の苦しみ、悲しみを表現している。その8首のうち、「春日野の…」 「初雁の…」 「あな恋し…」 「奥山の…」 「跡をだに…」 は、まだ逢瀬を遂げる前の早い段階の恋の苦しみを詠み、「年月の…」 「逢ふことを…」 「初雁の…」 は、逢瀬を遂げた後、恋がうまくいかなかった苦しみ、悲しみを詠んでいる。

○ 恋歌の要素の強い歌

- ・逢ふことの今ははつかになりぬれば夜ふかからでは月なかりけり

(古今集・雑体・1048・平中興・「題しらず」)

- ・郭公はつかなる音を聞きそめてあらぬもそれとおぼめかれつつ

(後撰集・夏・189・伊勢・「女の物見にまかりいでたりけるに、異車かたはらに
来たりけるに、物など言ひかはして、後につかはしける」)

- ・君はまだ知らざりけりな秋の夜の木のまの月ははつかにぞ見る

(後拾遺集・雑二・950・和泉式部・「男の文通はしけるに、この二十日のほどに
とたのめ侍けるを、待ち遠にといひ侍りければ」)

この3首において、「はつかなり」は、「聞きそむ」「逢ふ」「見る」と共起している。

「逢ふことの…」詠で、「はつかなり」は、相手との逢瀬が何らかの障害でわずかになってしまったことを表現している。

「郭公…」詠の上の句は、「ほととぎすの僅かに聞こえる声を初めて聞いてからは」（新大系）の意であるが、それを見物に出た先で男と言葉を交わしてその声をわずかに聞いたことに喩えている。

「君はまだ…」詠の「はつかにぞ見る」は、「二十日ごろにはちょっとお逢いします」の意で、「見る」は逢瀬を暗示している。

2

○ 恋以外の歌

- ・都いつる今朝許だにははつかなりもあひみて人を別れましかば

（後拾遺集・別・464・増基法師・「東へまかるとて、京を出づる日よみ侍りける」）

- ・絶えにけるはつかなる音をくりかへし葛の緒こそ聞かまほしけれ

（後拾遺集・雑五・1149・大中臣能宣朝臣・「ある所に庚申し侍けるに御簾の内の琴のあかぬ心をよみ侍ける」）

この2首で、「はつかなり」は、「あひ見る」「聞く」と共起している。ともに、恋の歌と同じような言葉を用いて、別れる知人や対象（琴の音）への心ざしを表現している。

おわりに

八代集で用いられた「はつかなり」は、恋歌に多く用いられ、恋の初期の段階でも、逢瀬を遂げた後の段階でも、恋の苦しみ、悲しみを表現するのに寄与していた。他の部立で用いられた場合でも、ほとんど恋歌に近い内容・表現の歌に詠み込まれたり、主題は異なっても、恋歌と同じように、心ざしの表現に用いられていた。

共起する言葉は、「見ゆ」「聞く」「見る」「逢ふ」とその派生語であり、これらはすべて恋歌の主題、あるいは恋歌的な表現に関連の深いものであった。

7 「はるかなり」

はじめに

古典和歌には形容動詞の使用数が乏しいことが指摘されている。その中で、八代集に用いられた形容動詞「はるかなり」の用例は40例ある。²¹これは相対的に多い数とみなせるが、その理由は何だろうか。それを考えるために、八代集で「はるかなり」がどのように用いられているのかを概観したいと思う。

具体的な用例の考察に先立ち、まず、『日本国語大辞典』において、その語義がどのように説明されているかを確認しておこう。

○『日本国語大辞典』

〔形動〕

〔1〕空間的に遠く隔たっているさま。

〔2〕時間的に遠く隔たっているさま。また、時間的に長いさま。

〔3〕心理的にいちじるしく隔たっているさま。差違のはなはだしいさま。

(1) 近づきがたく隔たっているさま。奥行のあるさま。深遠。

(2) 縁遠いさま。また、あえて遠ざけるさま。

(3) 心が進まず、自分に関係のないものと思うさま。

(4) 程度がはなはだしいさま。

このように、辞書の記述において、「はるかなり」の意味用法は、空間的隔たり、時間的隔たり、心理的隔たりの3つに大別されており、心理的隔たりについては、さらに細かく分類されていることがわかる。

こうした語義把握を踏まえながら、八代集に用いられた「はるかなり」の用例を抽出し、概観を試みたい。以下、部立により、四季の歌、恋の歌、その他の歌の順に、用例を挙げ検討を加える。

²¹ 拾遺集347番歌と金葉集340番歌は同一の和歌なので、これを抜いた。

1 四季の歌

四季の歌において、「はるかなり」の用例は8首あり、すべて空間的な隔たりを表現したものと判断される。それはさらに、聴覚による隔たりの把握と、特に感覚によらない隔たりの把握とに分けることができる。先に前者の例から見てみることにする。

- ・をとほ山けさ越えくればほととぎすこずはるかに今ぞなくなる

(古今集・夏・142・紀友則・「音羽山を越えける時に郭公の鳴くを聞きてよめる」)

- ・秋風にさそはれわたる雁が音は雲はるかに今日ぞきこゆる

(後撰集・秋・355・読人しらず・「題しらず」)

- ・帰る雁雲居はるかになりぬなりまた来ん秋も遠しと思ふに

(後拾遺集・春・68・赤染衛門・「帰る雁をよめる」)

- ・一声はさやかになきてほととぎす雲路はるかにとをぞかるなり

(千載集・夏・159・前右京権大夫頼政・「時鳥の歌とてよめる」)

- ・夜をこめて明石の瀬戸をこぎいづればはるかにをくるさを鹿の声

(千載集・秋下・314・俊恵法師・「夜泊鹿といへるころをよめる」)

この5首は、郭公、雁、鹿の鳴き声を詠んでいて、「をとほ山…」「帰る雁…」「一声は…」には、聞こえてくる音をもとに推定する意を表す助動詞「なり」が用いられ、「秋風に…」詠には「きこゆる」、「夜をこめて…」詠には「声」が詠まれていて、すべて聴覚に基づく歌であることがわかる。

「をとほ山…」詠、「秋風に…」詠は、郭公が音羽山の梢のはるか向こうで鳴く声が聞こえることと、北国に帰る雁の声が空のはるかな所から聞こえてくることを、それぞれ詠んでいる。

「帰る雁…」詠と「一声は…」詠は、はるかに遠ざかって行く雁や郭公の鳴き声を詠んでいる。「夜をこめて…」詠では、対象ではなく泳者自身が明石の瀬戸を漕ぎ離れて行き、それをはるか後ろから送る鹿の鳴き声を詠んでいる。

以上の5首の歌で、「はるかなり」は聴覚に基づいてとらえられた空間的隔たりを表現している。その一方で、「をとほ山…」詠、「秋風に…」詠では、郭公の声や初雁の声を「今」「今日」初めてはるか遠くに聞きつけたことの喜びが示され、「帰る雁…」詠、「一声は…」

詠、「夜をこめて…」詠には、雁、郭公、鹿の声が離れていくことの寂しさ、悲しさが示されている。このように、「はるかなり」は語義としては空間的隔たりを意味しているが、心情の表現にも関係していることが知られる。

- ・ 東路をはるかにいづる望月のこまにこよひや逢坂の関

(金葉集・秋・184・源仲正・「駒迎の心をよめる」)

- ・ 月みればはるかに思ふ更級の山も心のうちにぞありける

(千載集・秋上・280・右おほいまうち君・「皇太后宮大夫俊成十首歌よみ侍ける時、よみてつかはし侍けるうち月の歌」)

- ・ はるかなるもろこしまでもゆく物は秋のねざめの心なりけり

(千載集・秋下・302・大弐三位・「題しらず」)

上の3首で「はるかなり」は、空間的な隔たりを、視覚や聴覚などのような特定の感覚とは関係なく示している。

「東路を…」詠では、はるか遠くの東国から上ってくる望月の駒を、東から上ってくる望月のイメージに重ね合わせて表現している。「月みれば…」詠、「はるかなる…」詠では、「更級の山」「もろこし」がはるか遠くにあることを意味し、その実体としての空間的隔たりと、心にとっての隔たりのずれを対照して詠んでいる。²²

2 恋の歌

恋の部立てには「はるかなり」の用例が10首見られる。

そこで「はるかなり」が示している隔たりは、9首が空間的隔たり、1首が時間的隔りである。特徴的なのは、その隔たりを、恋の主題に関連する何らかの心理的隔たりと結びつけて表現した歌が多いことである。実体としての隔たりそのものを表現した歌は、次の2首にとどまる。

²² 「月みれば…」詠の「更級の山も心のうちにぞありける」という表現については、「更級の山も心のうちにあるのだと思うことだよ」(新大系)、「更科山の月も遠国ではなく心の中に存在していることになるなあ」(古典叢書)というように、逐語訳的な解釈が行われているが、「わが心なぐさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て」(古今集・雑上・878・よみ人しらず)との関連を考え、「古人が更級の山を見た時と同様、私の心も目の前の月を見て切なくて慰めかねることだ」と解するべきだろう。

- ・かくばかり常なき世とは知りながら人をはるかに何たのみけん

(後撰集・恋二・615・平時望朝臣・「文かよはしける女の異人に逢ひぬと聞きてつかはしける」)

- ・たまぼこの道ははるかにあらねどもうたて雲井にまどふ比かな

(新古今集・恋四・1248・朱雀院御歌・「女御の下に侍けるにつかはしける」)

「かくばかり」詠の、「はるかに…何たのみけん」は、「どうして遠い将来を期待していたのでしょうか」(新大系)の意。新大系は上記のように解しながら、「はるかに」に注を付して「「文かよはして」ただけであるから、空間的に離れているという意」と記す。これは、時間的にも空間的にも「はるかに」の意と解しているものと思われるが、「常なき世」との対比から考えて、時間的な隔たり・長さだけを読み取るのがよいと思う。

「たまぼこの…」詠の「はるかに」は、作者が愛する女御の部屋との空間的な隔たりを表現しており、あなたと同じ宮中にいて、道ははるかではないが、ということを表している。

残りの8首で「はるかなり」はすべて空間的隔たりを表現しているが、それがどのように心理的な隔たりと結びつけられているかを確認しよう。

- ・逢ふことは雲居はるかになる神のをとにききつつ恋ひわたる哉

(古今集・恋一・482・貫之・「題しらず」)

- ・ちはやふる神にもあらぬ我が仲の雲井遙に成りもゆく哉

(後撰集・恋六・1025・読人しらず・「女の男を厭ひて、さすがにいかがおぼえけん、言へりける」)

この2首で「はるかなり」は、雷が鳴る場所がはるか遠くの空であるという空間的隔たりを意味するとともに、相手との心理的距離の表現にもなっている。

「逢ふこと…」詠は、男の立場から女との逢瀬を遂げること願う歌で、「はるかなり」は「遠く離れての意と遠くて逢えないの意を掛ける」(新大系)。

「ちはやふる…」詠は、男を厭うているが別れることには未練のある女の歌で、「はるかなり」は、雷との関係で「雲が居るような遠い所」意味し、同時に男と疎遠になっていく

心理的隔たりも表現している。

- ・ 雁が音の雲みはるかに聞えしは今は限の声にぞありける

(後撰集・恋三・777・読人しらず・「あひ知りて侍りける人のまうで来ずなりて後、心にもあらず声のみ聞くばかりにて、又音もせず侍りければ、つかはしける」)

この歌で、「はるかなり」は、雁の鳴き声が遠くの空に聞こえるという空間的隔たりを表現しているが、その声を別れを告げる声とみなして、恋人と疎遠になって「心にもあらず声のみ聞くばかり」になった心理的隔たりと関連づけている

- ・ 思やる境はるかになりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき

(古今集・恋一・524・読人しらず・「題しらず」)

- ・ 遙なる程にも通ふ心哉さりとて人の知らぬ物ゆへ

(拾遺集・恋四・908・伊勢・「題しらず」)

- ・ 雲井なる人を遙に思ふには我が心さへ空にこそなれ

(拾遺集・恋四・909・源経基・「遠き所に思ふ人を置き侍て」)

この3首では、詠者が思う相手がいる位置を示す言葉として、「境」「程」「雲井」(詞書の「遠き所」の比喻)が用いられている。「はるかなり」は、その場所との空間的な隔たりを示すとともに、相手との心理的な隔たりも表現している。

- ・ かひなきはなを人しれず逢ふことのはるかなるみのうらみなりけり

(後拾遺集・恋三・730・増基法師・「物へまかりけるに、鳴海の渡りといふ所にて人を思ひ出でてよみ侍りける」)

この歌では、「なる身の恨み」に「鳴海の浦」を詠み入れ(新大系)ており、「はるかなり」は、恋人との心理的隔たりと、都から遠く離れている空間的な隔たりをともに表現している。

- ・ はるかなる岩のはざまに独りゐて人目おもはで物思はばや

(新古今集・恋二・1099・西行法師・「題しらず」)

この歌の岩のはざまは、都や人里から遠く離れた場所を示している。「はるかなり」は、その空間的な隔たりを示すとともに、恋する相手との心理的隔たりも表現している。

3 その他の歌

四季の歌、恋の歌以外の部立に収められた歌は22首（重複を除く）で、ここでは「その他の歌」に分類することにする。この用例数をさらに部立（主題）別に分類すると、次のようになる。

離別歌	6首
羈旅歌	3首
賀歌	2首
雑歌	8首
哀傷歌	1首
神祇歌	1首
釈教歌	1首

以上のように、離別歌と雑歌の用例が多く、四季歌・恋歌に匹敵し、次に羈旅歌、賀歌も、勅撰集における収録歌数から見て、相対的に多い数と判断される。このような傾向は、「はるかなり」という語と、それぞれの主題が親和性を有することを反映しているのだろう。以下、部立ごとに歌の傾向を概観する。なお哀傷歌の用例は内容的には釈教歌なので、釈教歌と合わせて検討することとする。

〈離別歌〉

・雁がねの帰るを聞けば別れ路は雲井はるかに思ふばかりぞ

(拾遺集・別・304・曾禰好忠・「ものへまかりける人のもとに、人人まかりて、かはらけ取りて」)

- ・ はるかなる旅の空にも遅れねばうら山しきは秋の夜の月
 (拾遺集・別・347・平兼盛・「源公貞が大隅へまかり下りけるに、関戸の院にて月のあかりけるに、別れ惜しみ侍て」)
- ・ たびたびの千代をはるかに君や見ん末の松より生の松原
 (後拾遺集・別・474・相模・「源頼清朝臣、陸奥国果てて、また肥後守になりて下り侍りけるを、出立ちの所に、誰ともなくてさしおかせける」)
- ・ 思ひ出でよ道ははるかになりぬらん心のうちは山もへだてじ
 (後拾遺集・別・484・源道濟・「かたらふ人の陸奥国に侍けるに」)
- ・ 逢ふことは雲居はるかにへだつとも心かよはぬ程はあらじを
 (後拾遺集・別・493・祭主輔親・「女に睦ましくなりて、程もなく遠き所にまかりければ、女のもとより、雲居はるかに行くこそあるかなきかの心地せらるれと言ひて侍りける返り事につかはしける」)
- ・ たち別れはるかにいきの松なればこひしかるべき千代のかげかな
 (詞花集・別・185・権僧正永縁・「修理大夫顕季大宰大貳にてくだらむとし侍けるに、馬に具していひつかはしける」)

「はるかなり」は、「たびたびの…」詠を除く5首で、詠者と相手との空間的隔たりを表現している。同時に、「雁がねの…」詠では、「雁の行く方の遠さに、友人の行き先の遠いことや、再会の時期の遠いことをも込める」(新大系)と指摘されるように、時間的な遠さも表現されている。また、「たち別れ…」詠でも、「はるかに生きの松」というつながりで、「はるかなり」が時間的な長さも表している。

「別れ路は雲井はるかに思ふ」「はるかなる旅の空」「道ははるかに」「逢ふことは雲居はるかにへだつ」「たち別れはるかにいき」という表現は、遠く別れることの悲しさ、寂しさの表現にもなっていて、「はるかなり」という語が、離別という主題によく適合していることを示している。

これに対して、「たびたびの…」詠は、「末の松」「生の松原」からの連想で、相手の長寿を祝う気持ちを「千代をはるかに君や見ん」と歌っている。「はるかなり」は、後で見る賀歌と同様に、時間的な隔たり、長さを表現している。

〈羈旅歌〉

- ・都出でて雲居はるかに来たれどもなを西にこそ月は入りけれ
 (後拾遺集・羈旅・5 2 7・藤原国行・「筑紫にまかりて、月の明かりける夜よめる」)
- ・わたの原はるかに浪をへだてきてみやこに出でし月を見るかな
 (千載集・羈旅・5 1 6・円位法師・「世を背きてのち修行し侍りけるに、海路にて月を見てよめる」)
- ・わたの原しを路はるかに見わたせば雲と浪とはひとつなりけり
 (千載集・羈旅・5 3 0・刑部卿頼輔・「家に百首歌よませける時、旅の歌とてよみ侍ける」)

上の3首で、「はるかなり」は空間的な隔たりを表現している。このうち、「都出でて…」詠と「わたの原はるかに浪を…」詠では、都からの空間的隔たりを表現していて、羈旅という主題に「はるかなり」が親和性をもつことをうかがわせる。これに対し、「わたの原しを路はるかに…」詠では、遠く広い海の眺望を表現するために「はるかなり」が用いられている。

〈賀歌〉

- ・千歳まで折りて見るべきさくら花梢はるかに咲きそめにけり
 (千載集・賀歌・6 1 1・堀河院御製・「同じ御時后宮にて、花契遐年といへる心を、うへの男どもつかうまつりけるに、よませ給うける」)
- ・白雲に羽うちつけてとふ鶴のはるかに千代の思ほゆるかな
 (千載集・賀歌・6 2 4・二条院御製・「うへの男ども百首歌たてまつりける時、祝いの心をよませ給うける」)

「千歳まで…」詠は、「遠景の空間の奥行の深さに時間の永遠性を重層させ、たけ高い歌とした」(新大系)と評されている歌で、「はるかなり」は空間的な遠さと時間的な長さをともに表現している。

「白雲に…」詠は、「天空まで見晴らせる空間的明視の序は、下句で時間的永続の明視の表現に転ずる」(新大系)と評されるように、やはり空間的な広がりや遠さと時間的な長さ

をともに表現している。

「はるかなり」という形容動詞が、時間的な長さを表現する言葉であることは、賀歌の主題にとっても適合している。また、この言葉が、空間的な隔たりと時間的な隔たりをともに表現できることが、2首の和歌の趣向にうまく生かされている。

〈雑歌〉

- ・ 梓弓はるかに見ゆる山の端をいかでか月のさして入るらん

(拾遺集・雑下・533・能宣・「月を見侍りて」)

- ・ 天野原はるかにわたる月田にも出づるは人に知らせこそすれ

(後拾遺集・雑三・968・藤原道信朝臣・「内より出でばかならず告げむなど契りける人の、音もせで里に出でにければつかはしける」)

- ・ 淡路にてあはとはるかに見し月の近きこよひは所からかも

(新古今集・雑上・1515・躬恒・「題しらず」)

- ・ 天の原はるかに独りながむればたもとに月の出でにけるかな

(新古今集・雑上・1517・増基法師・「夜ふくるまで寝られず侍りれば、月の出づるをながめて」)

- ・ ふけにけるわが身のかげを思ふまにはるかに月のかたぶきにける

(新古今集・雑上・1536・西行法師・「題しらず」)

この5首では、東の山から出て来て、大空を渡り、西の空に傾いていく月と、それが浮かぶ大空が詠まれていて、詠者と月との空間的な隔たりや空の広がりやを、「はるかなり」が示している。空や月を眺める歌と「はるかなり」という言葉が親和性をもつことがうかがえる。

難波がた潮路はるかに見わたせば霞に浮かぶをきの釣舟

(千載集・雑中・1049・円玄法師・「眺望の心をよめる」)

海岸から遠くの海を眺望した歌で、空間的な広がりや遠さを「はるかなり」が表現している。先に検討した羈旅歌、

わたの原しを路はるかにに見わたせば雲と浪とはひとつなりけり

(千載集・羈旅・530・刑部卿頼輔・「家に百首歌よませける時、旅の歌とてよみ侍ける」)

と発想・表現が似ていて、千載集の時代に、海を「はるかに」眺望する歌が好まれていたことが推量される。

・敷島や 山との歌の 伝はりを 聞けばはるかに 久方の 天津神世に 始まりて
三十字あまり 一文字は 出雲もの宮の 八雲より をこりけるとぞ するすなる
……

(千載集・雑下・1162・崇徳院御製・「百首歌めしける時、よませたまうける」)

・時知らぬ 谷の埋木 朽ちはてて …… 君に心を かけしより しげき愁ゑも 忘
れ草 忘れ顔にて 住の江の 松の千歳の はるばると 梢はるかに 栄ゆべき と
きはの陰を 頼むにも 名草の浜の なぐさみて ……

(千載集・雑下・1163・待賢門院の堀河・「同じ御時百首歌たてまつりける時の長歌」)

「はるかなり」は、「敷島や…」詠では、和歌の歴史の長さを表現し、「時知らぬ…」詠では、崇徳院の治世が永遠に続くことを祝っていて、ともに時間的な長さを表現している。「時知らぬ…」詠では、「松の千歳の はるばると 梢はるかに」というつながりで、空間的な広がりも示している。²³

〈神祇歌〉

・道とをしほどもはるかにへだたれり思ひをこせよわれも忘れじ

この歌は、陸奥に住みける人の、熊野へ三年詣でんと願を立ててまいりて侍けるが、

²³ 新大系は、「千歳まで折りて見るべきさくら花梢はるかに咲きそめにけり (千載集・賀歌・611・堀河院御製)の「梢はるかに」の注において、「……ここでは梢が遙か遠くまで連なる様を叙する表現。1163も同じ」と記して、2首の歌に見られる「梢はるかに」の意味が一致していることを指摘している。

いみじう苦しかりければ、いまふたびをいかにせんと歎きて、御前に臥したりける夜の夢に見えけるとなん。

(新古今集・神祇歌・1859・読人しらず・「題しらず」)

これは、熊野に参詣していた人の夢に熊野権現が表れて詠んだという歌であるが、「はるかなり」は参詣者の住む陸奥と熊野との空間的な距離を表している。一首の発想としては、

・逢ふことは雲居はるかにへだつとも心かよはぬ程はあらじを

(後拾遺集・別・493・祭主輔親・「女に睦ましくなりて、程もなく遠き所にまかりければ、女のもとより、雲居はるかに行くこそあるかなきかの心地せらるれと言ひて侍りける返り事につかはしける」)

に類似していて、空間的な隔たりと心にとっての隔たりとのずれを表現している。

〈哀傷歌・釈教歌〉

・暗きより暗道にぞ入ぬべき遙に照せ山の葉の月

(拾遺集・哀傷・1342・雅致女式部・「性空上人のもとに、詠みて遣はしける」)

・つねよりもけふの煙のたよりにや西をはるかにおもひやるらん

(新古今集・釈教・1973・相模・「二月十五日の暮れ方に、伊勢大輔がもとにつかはしける」)

「暗きより…」詠の「はるかなり」は、月については空間的な隔たりを表し、性空上人への願いとしては、煩惱の闇に迷い込む自分と、仏法の尊さとの間の懸隔を表現している。

「つねよりも…」の「はるかなり」は、西にあると信じられた極楽浄土への空間的遠さを表現するとともに、浄土へのあこがれを表している。

このように上の2首で「はるかなり」は、空間的隔たりを示しながら、心理的な隔たりも表現している。

おわりに

今回の考察を通し、八代集において「はるかなり」は、いくつかの点で、和歌の主題や表現に用いるのに適していることが確認できた。

四季の歌では、遠くの空で郭公や雁が鳴くのを初めて聞きつけた感慨や、雁、郭公、鹿の鳴き声が遠ざかるのを悲しむ心情を詠むにあたって、「はるかなり」が有効に使用されていた。また、はるか遠くに思いをはせる心情も詠まれていた。

恋の歌では、なかなか逢えない状況や疎遠になっていく状況を、「はるかなり」によって表現していて、主題との親和性が見られた。表現や趣向の面でも、空間的隔たりと心理的隔たりを結びつけて表すことを「はるかなり」が可能にしていた。

その他の歌でも傾向は同様であった。離別歌、羈旅歌では、空間的な隔たりを表す「はるかなり」と、別れ・旅という主題が、自然に結びつく様子が確認された。賀歌では、時間的な長さを表して祝意を示すことに「はるかなり」が有効に用いられていた。

全体として、「はるかなり」で表される隔たりや長さが、実体としても好んで詠まれ、また心理的な隔たりと重ねることも多用されていた。

8 「ほのかなり」

はじめに

「ほのかなり」という形容動詞は、語基「ホノ」と状態性質を持つ接尾語「カ」との組み合わせによって形成された形容動詞であるとされている。『時代別国語大辞典 上代編』は、「ほのか〔髣髴・側〕」という語形で立項し、「かすかに。ぼんやりと」という語義を記す。ただし、品詞については副詞としている。これに対し、『日本国語大辞典』は、「ほのか【仄・側】」という語形で形容動詞として立項した上で、次のように語義を記述している。

- (1) わずかにそれとわかるさま。分明でないさま。
 - (イ) 物の形、音などが、わずかに見えたり、聞こえたりするさま。
 - (ロ) 光、色などが、はっきりしない程度で、わずかに見えるさま。ほんのり。うっすら。
 - (ハ) 心、意識がぼんやりしているさま。かすかに認識するさま。
- (2) 程度が、はっきりしないくらいにわずかなさま。いささか。ちょっと。しばし。

本節では、このような辞書の記述を参考にしながら、八代集の和歌に用いられた「ほのかなり」の意味用法について、一首一首用例を検討しながら、概観を試みたい。

1

八代集の用例について検討するに先立って、上代に成立した歌集である万葉集の「ほのか」の用例を点検し、それがどのように使用されているかについて、簡単に確認しておきたい。万葉集には「ほのか」の用例は8例見出せる。そのうち2例は同じ歌と考えられるので、実質的な用例は7例である。部類別に見ると、雑歌は2例、挽歌は2例、相聞往来歌は4例（うち重複があるので実質3例）が収載されている。以下、部類ごとに概観を試みる。²⁴

²⁴ 万葉集の引用は、『新編日本古典文学全集』による。

〈雑歌〉

① 梶の音そほのかにすなる海人娘子沖つ藻刈りに舟出すらしも

〈一に云ふ、「夕されば梶の音すなり」〉

(巻第七・1152)

② 玉かぎるほのかに見えて別れなばもとなや恋ひむ逢ふ時までは

(巻第八・1526)

①の歌では、「梶の音」が「ほのかに」聞こえることから、舟が出航することを推測している。②の歌は、左注に「右、天平二年七月八日の夜に、帥の家に集会ひて」とあることにより、七夕の歌として詠まれたことが知られる。「ほのかに」は「見ゆ」にかかって、視覚的な用法ともとれるが、実際には、牽牛と織女の二星がわずかに逢ってすぐに離れてしまう、その逢瀬の短さと切なさを表現している。

〈挽歌〉

① うつせみと 思ひし時に 〈一に云ふ、「うつそみと思ひし」〉 取り持ちて 我が二人
見し 走り出の 堤に立てる 梶の木の こちごちの枝の 春の葉の 繁きがごとく
思へりし 妹にはあれど 頼めりし 児らにはあれど 世の中を 背きし得ねば か
ぎろひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日
なす 隠りにしかば 我妹子が 形見に置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取り
与ふる ものしなければ 男じもの わき挟み持ち 我妹子と 二人我が寝し 枕づ
く つま屋の内に 昼はも うらさび暮らし 夜はも 息づき明かし 嘆けども せ
むすべ知らに 恋ふれども 逢ふよしをなみ 大鳥の 羽易の山に 我が恋ふる 妹
はいますと 人の言へば 岩根さくみて なづみ来し 良けくもそなき うつせみと
思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えなく思へば (巻第二・210)

①の歌では、「ほのかに」は先の②と同様に、「見ゆ」にかかっている。この歌では、亡くなった妻を羽易の山中に尋ねて行ったが、そのかいもなく、妻の姿を見ることができなかつた嘆きを詠む中で、妻の姿がせめて「ほのかに」見えて（現れて）ほしかつたが、そ

れもかなわなかったという悲しい思いを表現している。

② この月は 君来まさむと 大船の 思ひ頼みて いつしかと 我が待ち居れば も
みち葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使ひの言へば 蛩なす ほのかに聞きて 大地
を 炎と踏みて 立ちて居て 行くへも知らず 朝霧の 思ひ迷ひて 丈足らず 八
尺の嘆き 嘆けども 験をなみと いくにか 君がまさむと 天雲の 行きのまに
まに 射ゆ鹿の 行きも死なむと 思へども 道の知らねば ひとり居て 君に恋ふ
るに 音のみし泣かゆ (巻第十三・3344)

②は、訪れを待っていた恋人の死を嘆いた歌で、「ほのかに」は恋人が死んだという噂を、わずかに聞き知ったことを示している。恋人が死んだ消息すらもはっきりと詳しく聞くことができなかつた嘆きを表現している。

〈相聞往来歌〉

- ① 朝影に我が身はなりぬ玉かきるほのかに見えて去にし児故に
(巻第十一・2394) (巻第十二・3085)
- ② 切目山行きかふ道の朝霞ほのかにだにや妹に逢はざらむ (巻第十二・3037)
- ③ 志賀の海人の釣し灯せるいざり火のほのかに妹を見むよしもがな
(巻第十二・3170)

①の歌でも「ほのかに」は「見ゆ」にかかっている。新編全集は、この「ほのかに」について、「物の見え方、聞え方が不十分であることを示す副詞」として、副詞として扱っている。語義的には恋人の姿がぼんやりとしか見えなかつたことを示すが、わずかな逢瀬を嘆く切ない思いがこめられていると考えられる。

②の歌では、「ほのかに」は「逢ふ」にかかっている。妹との逢瀬がかなわないことを前提として、せめてわずかな逢瀬でもよいかから実現しないかという願望を表現している。「(切目山行きかふ道の)朝霞」は「ほのかに」を導く序詞となっている。

③の歌では、「ほのかに」は「見る」にかかっている。家に残してきた妻(新編全集)にわずかにでも会いたいという気持ちを表現している。「志賀の海人の釣し灯せるいざり火の」

は、「ほのかに」を導く序詞である。

以上、万葉集における「ほのかに」の用例を一首一首読んできた。特徴としてまず挙げられるのは、用例が連用形「ほのかに」に限られるという点である。新編日本古典文学全集は、『時代別国語大辞典 上代編』と同様に、副詞として扱っているが、この語の通時的な使われ方から見て、形容動詞として扱っても不当とは言えないであろう。

「ほのかに」は、『日本国語大辞典』が、「物の形、音などが、わずかに見えたり、聞こえたりするさま」という語義を記す(①の①)ように、視覚的にも聴覚的にも用いられる言葉であるが、万葉集では、「見ゆ」にかかる用例が3例、「見る」が1例、「聞く」が1例、「(音が)す」が1例、「逢ふ」が1例であり、かかっている言葉から見ると、視覚的な用法が優勢であることがわかる。ただし、それは単なる見方、見え方の問題ではなく、「逢ふ」にかかる場合に通ずるような、逢瀬の短さ、はかなさを比喩的に示す要素が看取される。

枕詞・序詞などからのつながりの観点からみると、「玉かぎる」(3例)「蛍なす」「朝霞」「いざり火の」と共起していて、ここでも視覚的な用法が主流であることが知られる。

2

八代集における「ほのかに」の用例について、次に概観したい。各集の部立に用いられた「ほのか」の使用例は次ページの表の通りである。

歌集ごとの用例数では、それぞれの収録歌数を勘案すると、拾遺集、金葉集、新古今集がやや多いようにも見えるが、特筆すべき傾向は看取されない。

部立別にみると、恋の部立は15例があり、全体に占める割合は52パーセントで、『金葉集』補遺歌の1首も内容的には恋の歌であることを加味すると、他の部立に比べ、恋の歌の割合が相対的に高いことが知られる。四季の部立は10例で、その内、夏の歌が5例、秋の歌も5例で、春と冬の用例が見当たらないのは注目すべきであろう。他に雑歌の部立は2例、釈教歌が1例で、人事詠という括りの中でも、恋歌に「ほのかに」が相対的に多用されていることがわかる。以下、四季、恋、その他の順に、和歌を個別的に検討していくこととする。

○ 四季の歌

「ほのかなり」の用例が四季の部に収められている歌集は、後撰集、拾遺集、金葉集、詞花集、千載集、新古今集であるが、用例数でみると、平安後期の歌集に多く用いられていることがわかる。また、前述のとおり、用例は夏部と秋部にそれぞれ5例と集中している。以下、夏歌と秋歌に分けて、検討を加える。

	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	計
夏			1		2		2		5
秋		1				1	1	2	5
恋	1	1	5	1			2	5	15
雑				1	1				2
補遺					1				1
釈教								1	1
計	1	2	6	2	4	1	5	8	29

〈夏歌〉

- ① 髣髴にぞ鳴渡なる郭公み山を出づる今朝の初声
(拾遺集・夏・100・坂上望城・「天曆御時歌合に」)
- ② 郭公くものたえまにもる月の影ほのかにも鳴きわたるかな
(金葉集・夏・123・皇后宮式部・「月前郭公といへる事をよめる」)
- ③ 大井川いくせ鶺舟のすぎぬらんほのかになりぬ篝火のかげ
(金葉集・夏・151・中納言雅定・「実行卿家歌合に、鶺河の心をよめる」)
- ④ ほととぎすしのぶるころは山びこのこたふる声もほのかにぞする
(千載集・夏・150・加茂重保・「郭公のうたとてよめる」)
- ⑤ 夕月夜いるさの山の木がくれにほのかになのるほととぎすかな
(千載集・夏・163・権大納言宗家・「郭公のうたとてよみ侍りける」)

この5首で、「ほのかなり」は、すべて連用形で用いられ、動詞にかかっている。

どの動詞にかかっていくかという観点から見ると、「鳴く」が2例、「なる」が1例、「こたふ」が1例、「なる」が1例である。「鳴く」は郭公の鳴くことを意味し、「こたふ」は郭公の鳴く声の山彦が主語であり、「なる」も郭公が鳴くことを擬人的に表現しているの
で、5例中、4例が郭公の鳴くさまを「ほのかに」と表現したものである。

残りの1例は、鶉船の篝火の光が、船が遠ざかるにつれて「ほのかに」「なる」さまを表現している。

このように「ほのかに」が修飾する語ならびにその意味内容を、視覚・聴覚の別から見ると、視覚的なものが1例、聴覚的なものが4例で、万葉集の用例で見られた傾向とは対照的に、聴覚的な用法が優勢であることがわかる。

その一方で、②の歌では、「月前郭公」という題のもとで、雲の絶え間に漏れる月影についても、「ほのかに」と表現していて、「月光と時鳥の声の重なりを繊細な感覚で詠」んでおり(新大系)、視覚と聴覚にまたがる二義的な用法が見られることには注目される。また、⑤の歌でも、「上句は夕景の薄暗さ、視覚的な「ほのかさ」を序詞的に叙し、転じて聴覚の「ほのかさ」に接続している」(新大系)と評されるように、視覚と聴覚とを重ね合せようとする工夫が見られる。

次に、助詞との共起から見ると、「髣髴にぞ鳴き渡なる」「ほのかにぞする」と、係助詞「ぞ」で「ほのかに」を強調していたり、「ほのかにも鳴きわたるかな」「ほのかになるほととぎすかな」というように、「かな」と共起して、ほのかなさまについての詠嘆を示すなど、「ほのかなり」が示す状態・情景に対する好尚が看取される。

〈秋歌〉

- ① 秋風の草葉そよぎて吹くなべにほのかにしつるひぐらしの声
(後撰集・秋上・253・よみ人しらず・「題しらず」)
- ② 山城の鳥羽田の面をみわたせばほのかにけさぞ秋風はふく
(詞花集・秋・82・曾禰好忠・「題不知」)
- ③ 秋の夜の心をつくすはじめとてほのかに見ゆる夕月夜かな
(千載集・秋上・274・権大納言実家・「月の歌あまたよみ侍ける時よみ侍ける」)
- ④ 小倉山ふもとの野辺の花すすきほのかに見ゆる秋の夕暮
(新古今集・秋上・347・読人しらず・「題しらず」)

⑤ ほのかなりも風は吹かなん花すすきむすぼほれつつ露にぬるとも

(新古今集・秋上・348・女御徽子女王・「題しらず」)

この5首でも、「ほのかなり」は、すべて連用形で用いられ、動詞にかかっている。

どの動詞にかかっているかという観点から見ると、「(風が) 吹く」が2例、「見ゆ」が2例、「(声が) す」1例となっており、これを、視覚・聴覚の別から見ると、視覚的なものが4例、聴覚的なものが1例で、夏歌で見られた傾向とは異なって、視覚的な用法が優勢であることがわかる。

助詞との共起から見ると、やはり「ぞ」「かな」との共起が注目される。「ほのかにけさぞ秋風はふく」「ほのかに見ゆる夕月夜かな」と、夏歌と同様に、強意の「ぞ」、詠嘆の「かな」と共に用いられる用例が見出せるのである。

そうした共起関係に加え、「ほのかにしつるひぐらしの声」「花すすきほのかに見ゆる秋の夕暮」「ほのかなりも風は吹かなん」というように、一首の主題に関わる部分に「ほのかに」を含む情景が位置しており、ほのかに聞こえるもの、ほのかに見えるものに対する好尚が、やはり夏歌と同様に看取される。

万葉集では、「ほのかなり」は専ら人事詠において用いられていた。これに対し、八代集の四季部では、自然の描写に用いられるようになっており、そこに、ほのかなるものへの好尚や美意識が成立していることが知られるのである。

3

○ 恋の歌

八代集の恋部において、「ほのかなり」の用例が見られる部立は、次の通りである。

古今集	……	恋一	(1首)
後撰集	……	恋二	(1首)
拾遺集	……	恋二	(3首)
		恋五	(2首)
後拾遺集	…	恋一	(1首)
千載集	……	恋一	(2首)

新古今集 … 恋一（3首） 恋五（2首）

上記の集計から分かるように、全 15 首のうち、恋一が 7 首、恋二が 4 首と、恋の前半にあたる部分に収められた用例が顕著に多い。残りの用例 4 首は、すべて恋五で、これは恋の終末にあたる。

では、それらの恋歌で、「ほのかなり」がどのように用いられているのかについて、具体的に考察してみたい。なお、新大系所収の金葉集・補遺歌は、北村季吟『八代集抄』等では恋上に収められているので、これも合わせて検討することとする。

恋歌における「ほのかなり」は、その多くが序詞あるいは比喩と関連して用いられている。たとえば、

- ・山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

（古今集・恋一・479・貫之・「人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、後に、よみて、遣はしける」）

という用例では、「ほのかにも」という句は、「山ざくら霞の間よりほのかにも見て」というつながりにおいて、「山桜を霞の間よりほのかに見る」という意味を表す一方で、「ほのかにも見てし人こそ…」というつながりにおいては、花摘みをしていた女性の姿を「ほのかに見た」という意味を表している。前者は序詞という修辞における意味であり、後者は恋歌の主題に関わる意味である。

「ほのかなり」が恋の歌において上のように使われていることを踏まえ、以下の検討においては、まず恋の主題に関わる「ほのかなり」の意味・用法を確認・概観し、ついで序詞・比喩等の修辞技法における「ほのかなり」の意味・用法を見ていくこととする。

a 恋の主題に関わる「ほのかなり」

* 「見る」にかかる用例

「ほのかに…見る」という用例は、次の 5 例。その表す意味は、女の姿をほのかに見る意と、男女のほのかな逢瀬の意とに大別される。

- ① 山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ
 (古今集・恋一・479・貫之・「人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、後に、よみて、遣はしける」)
- ② よそにても有にし物を花薄ほのかに見てぞ人は恋しき
 (拾遺集・恋二・732・よみ人しらず・「女に遣はしける」)
- ③ 志賀の海人の釣にともせる漁火のほのかに妹を見るよしも哉
 (拾遺集・恋二・752・よみ人しらず・「題しらず」)
- ④ 志賀の海人の釣にともせる漁火のほのかに人を見るよしも哉
 (拾遺集・恋五・968・坂上郎女・「題しらず」)
- ⑤ 片岡の雪まにねざす若草のほのかに見てし人ぞこひしき
 (新古今集・恋一・1022・曾禰好忠・「題しらず」)

上のうち、①⑤は、女の姿をほのかに見たことを詠ずる。

これに対し、②③④は、男女の逢瀬を意味する。そのうち、②③は、男が女との逢瀬を遂げる意。④は男の来訪を表している。

④の歌について、新大系は、③の重出歌として扱っていて、③との歌意の差異に特に注目してはいないが、²⁵③は恋二に収められていて、「ほのかに妹を見るよしもがな」という本文で男の立場から女との逢瀬を希求しているのに対し、④は恋五に収められ、「ほのかに人を見るよしもがな」という本文で、女の立場から男の来訪を希求しているという違いがあるので、一応別の歌として扱うべきであろう。²⁶

- ⑥ ほのかにも我を三島の芥火のあくとや人の訪れもせぬ
 (拾遺集・恋五・976・よみ人しらず・「題しらず」)
- ⑦ 宵のまにほのかに人を三日月の飽かて入にし影ぞ恋しき

²⁵ 和歌文学大系『金葉和歌集 詞花和歌集』、『八代集抄』も同様に扱っている。

²⁶ ④歌の、直前・直後の歌から見ても、④は、男の来訪のなさを嘆き男の訪れを希求する歌として理解するのが妥当である。

・潮満てば入ぬる磯の草なれや見らく少なくて恋ふらくの多き
 (拾遺集・恋五・967・坂上郎女・「題知らず」)

・岩根踏み重なる山はなけれども逢はぬ日数を恋ひやわたらん
 (同・989・坂上郎女・「題知らず」)

(金葉集・補遺歌・692・藤原為忠・「寄三日月恋をよめる」)

この2首は、「三島」「三日月」に「見(る)」を掛けている。⑥の「見る」は逢瀬を示す用法で、男が自分に逢った意を表している。⑦は新大系の底本にはなく、『八代集抄』に見える歌で、「見る」の意味については、次のように説が分かれる。

新大系は、

宵のうちにちらっとあなたに会いはしたものの、ちょうど三日月がすぐに入って惜しまれるように、もの足りないうちに別れてしまったあなたの姿が恋しいのですよ。

と解釈し、短い逢瀬を読み取っている。

一方、『八代集抄』は、

宵のまぎれにほの見えて、あかで入かくれたる人を、三日月にそへてよめりし心也。

として、垣間見説に立っている。⑦歌は、先述したように『八代集抄』では恋上に収められているが、前後の配列からはどちらの説が正しいと判断できない。けれども、「宵のま」という時間帯を踏まえると、垣間見の歌として解するのが穏当だろう。

次に「見る」を用いてはいないが、それに準ずる意味を表していると判断される「ほのかなり」の用例を見てみよう。

⑧ 追風に八重の潮路をゆく舟のほのかにだにも逢ひ見てしかな

(新古今集・恋一・1072・権中納言師時・「鳥羽院御時、上のをのこども、風に寄する恋といふ心をよみ侍けるに」)

⑨ 濁り江のすまんことこそかたからめいかでほのかに影を見せまし

(新古今集・恋一・1053・読人しらず・「題しらず」)

⑩ はかなしや枕さだめぬうたた寝にほのかにまよふ夢の通ひ道

(千載集・恋一・677・式子内親王・「百首歌よみ給ける時、恋歌」)

この3首の傍線部は、すべて男女のほのかな逢瀬を意味している。⑧はせめてもほのかな逢瀬を遂げたいという願望を詠じ、⑨もまた何とかして相手に逢いたいという願望を表現している。⑩は、夢の中での、逢えるかどうか定かでない逢瀬を意味している。

このうち、⑨については、窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』、久保田淳『新古今和歌集全注釈』のように、「見せ」の主語を女ととり、

- ・どうかして水に映る影のように、あなたの姿を見せてもらいたいことだ。(完本評釈)
- ・何とかしてちらりと姿を見せてほしい。(全注釈)

と解する説があるが、「まし」の意味を踏まえれば、新大系が、

あなたと住むことはむつかしいとしても、ちょっとでよい逢いたいものだ。

と、詠作主体である男を主語として読解するのに従うべきだろう。

* 「見ゆ」にかかる用例

この用例は次の2首。①は、男の立場から、女とのほのかな逢瀬を表現し、②は、女の立場から男とのほのかな逢瀬を意味している。

① 夢よりもはかなきものは陽炎のほのかに見えし影にぞありける

(拾遺集・恋二・733・よみ人しらず・「女に遣はしける」)

② 稲妻は照らさぬよるもなかりけりいづらほのかに見えしかげろふ

(新古今集・恋五・1354・相模・「題しらず」)

先に検討して「ほのかに…見る」には、女の姿をほのかに見る意の用例と、男女のほのかな逢瀬を意味する用例があったが、上の2首の「ほのかに…見ゆ」の用例は、「ほのかに…見る」の後者の用例に照応するものであると言える。

③ 藻屑火の磯間を分くるいさり舟ほのかなりしに思ひそめてき

(千載集・恋一・645・藤原長能・「女につかはしける」)

この歌には、「見ゆ」は用いられていないが、「ほのかなりし」は「ほのかに見えし」にほぼ等しいと判断される。新大系が、「初めてかいま見た人へのほのかな慕情」と解説するように、女の姿がほのかに見えた意を表している。

* 「知らず」にかかる用例

- ・ ほのかにも知らせてしがな春霞かすみのうちに思ふ心を

(後拾遺集・恋一・604・後朱雀院御製・「東宮とまうしける時、故内侍の督のもとにはじめてつかはしける」)

自分の恋の思いを相手に「ほのかに」知らせる意を表している。「十三歳の東宮が二歳年上の妃に贈ったういういしい恋歌」(新大系)である。

* 「隠す」にかかる用例

- ・ 漁火の夜はほのかにかくしつつ有へば恋の下に消ぬべし

(後撰集・恋二・681・藤原忠国・「しのびて逢ひわたり侍ける人に」)

詞書に事情が記されるように、「しのびて逢ひわた」るさまを、「ほのかに隠しつつ」と表現している。忍ぶる恋の歌である。

* 「声」の述語となる用例

- ・ 雲井よりとを山鳥のなきてゆく声ほのかなる恋もするかな

(新古今集・恋五・1415・躬恒・「題しらず」)

「声ほのかなる恋」とは、相手の声が「ほのかに」聞こえるような恋の意を表す。新大系は、この歌について、次のように記述している。

題でいえば「聞く恋」で、声を聞いて慕っているばかりのとりとめのない恋。

この解説は、この「雲井より…」の歌を、女の声聞くばかりで逢うことができない男の立場の歌とみなしているのだろう。

『新古今和歌集全注釈』が、「恋愛としては初期の段階であるから、恋一あたりに入れられてもよかった歌である」と述べ、『完本新古今和歌集評釈』が、「恋もするかな」の語釈として、「進展しない恋をしていることよ」と記しているのも、同じ理解であると推定される。

しかしながら、この歌の直前には、

- ・逢はずしてふる比ほひのあまたあれば遥けき空にながめをぞする

(新古今集・恋五・1413・光孝天皇御歌・「題しらず」)

- ・思ひやる心も空に白雲の出で立つかたを知らせやはせぬ

(同・1414・兵部卿到平親王・「女のほかへまかるを聞きて」)

というように、男の立場から、交際している女との疎遠を嘆く歌が並び、直後にも、同様の主題の歌が、

- ・雲居なる雁だになきて来る秋になどかは人のをとづれもせぬ

(同・1416・延喜御歌・「弁更衣久しくまゐらざりけるに、賜はせける」)

- ・春ゆきて秋までとやは思ひけんかりにはあらず契し物を

(同・1417・天曆御歌・「斎宮女御、春ごろまかり出でて、久しうまゐり侍らざりければ」)

- ・初雁のはつかに聞きしことつても雲路に絶えてわぶる比かな

(同・1418・西宮前左大臣・「題しらず」)

というように続いているのを踏まえれば、当該歌もまた、一度は親しくしていた女が、何かの事情で疎遠になってしまったことを嘆く男の歌として解するのが、前後の配列から見ても、「なきてゆく」の示す方向からも妥当だろう。

「ほのかなり」は、この歌において、相手の女の声がほのかに聞こえるという文字通りの意味に留まらず、相手との心理的な距離を暗示している。

b 修辞技法における「ほのかなり」

次に序詞などの修辞技法に、「ほのかなり」がどのように用いられているかを概観したい。
ここでは、作者名と詞書を省略することとする。

① 山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ (古今集・恋一・479)

② 漁火の夜はほのかにかくしつつ有へば恋の下に消ぬべし (後撰集・恋二・681)

③ 志賀の海人の釣にともせる漁火のほのかに妹を見るよしも哉 (拾遺集・恋二・752)

④ 夢よりもはかなきものは陽炎のほのかに見えし影にぞありける

(拾遺集・恋二・733)

⑤ 志賀の海人の釣にともせる漁火のほのかに人を見るよしも哉 (拾遺集・恋五・968)

⑥ 藻屑火の磯間を分くるいさり舟ほのかなりしに思ひそめてき (千載集・恋一・645)

⑦ 片岡の雪まにねざす若草のほのかに見てし人ぞこひしき (新古今集・恋一・1022)

⑧ 追風に八重の潮路をゆく舟のほのかにだにも逢ひ見てしかな

(新古今集・恋一・1072)

⑨ 雲井よりとを山鳥のなきてゆく声ほのかなり恋もするかな

(新古今集・恋五・1415)

上の9首の和歌では、序詞によって「ほのかなり」を導く技法が用いられている。その序詞とのつながりの文脈で、「ほのかなり」は、⑨を例外として、専ら視覚的イメージとの関わりにおいて用いられている。この理由としては、「見る」「隠す」「見ゆ」につながっていく歌が多いということがあげられよう。

これらの歌は、総じて万葉集の、

志賀の海人の釣し灯せるいざり火のほのかに妹を見むよしもがな (巻第十二・3170)

の系譜を引いた歌であると見られるが、視覚的にも聴覚的にもより洗練され、動きを伴ったものも見られるなど、四季歌に看取された、ほのかに見えるもの、ほのかに聞こえるものに対する好尚や美意識が、こうした修辞的表現にも反映していることが窺える。

⑥ ほのかにも知らせてしがな春霞かすみのうちに思ふ心を (後拾遺集・恋一・604)

⑦ 宵のまにほのかに人を三日月の飽かて入にし影ぞ恋しき（金葉集・補遺歌・692）

⑪ 濁り江のすまんことこそかたからめいかでほのかに影を見せまし

（新古今集・恋一・1053）

⑫ 稲妻は照らさぬよるもなかりけりいづらほのかに見えしかげろふ

（新古今集・恋五・1354）

これらの歌では、序詞のように比喩的につながるのではなく、視覚的イメージと「ほのかなり」が、縁語のように響き合って、一首を構成している。そこでは、「ほのかなり」が一首の核となって機能していると見られる。

4

○ その他の歌

① 世の中を何にたとへむ秋の田をほのかに照らすよひのいなづま

（後拾遺集・雑三・1013・源順・「世の中を何にたとへむといふ古言を上置き
てあまたよみ侍りけるに」）

② 木の間もる片割れ月のほのかにもたれか我身を思ひいづべき

（金葉集・雑上・536・僧正行尊・「山家にて有明の月を見てよめる」）

③ わが心なをはれやらぬ秋ぎりにほのかに見ゆる在曙の月

（新古今集・釈教歌・1934・権僧正公胤・「観心如月輪若在輕霧中の心を」）

①歌は、「この世の無常を電光に譬えた歌」（新大系）である。ここでは、「ほのかに」に稲の「穂」を掛けながら、単なる稲妻ではなく、字数を費やして比喩を組み立てている。「ほのかに」は、ここではわずかな間という意味を表していて、無常の比喩の核となっている。

②歌は、「木の間もる片割れ月の」が「ほのかに」を導く序詞であるが、「山家にて有明の月を見て」という瞩目の景とも一致していて、四季の歌に通い合う要素が看取される。

③歌は、詠作主体が、自分の悟り切れない心を具体化し、視覚表現として晴れきらない秋霧の中にほのかに見える有明の月のようだ、と詠んだもので、ここでも「ほのかなり」

は一首の比喩の核となっている。

おわりに

上代における万葉集の中に用いられた「ほのか(なり)」は、雑歌、挽歌、相聞往来歌に用例が見られ、視覚的な意味において多く用いられ、切ない心情を表すことが多い。

平安時代の八代集において「ほのかなり」は、四季の歌においては、夏・秋に限って用例が見られ、「ほととぎすの声」、「ひぐらしの声」「夕月」、「秋風」のように、さまざまな季節を代表する景物を、聴覚的・視覚的に表現していて、ほのかなる情景に対する好尚や美意識が看取できる。それに伴って、「ぞ」「かな」といった助詞との共起も注目される。

同じ八代集の恋の歌では、序詞などの比喩表現を中心に、ほのかに見える情景と、ほのかに女を見る、ほのかに逢瀬を遂げる、といった恋の主題とを結びつける用例が多い。ここでは、「ほのかなり」が一首の発想・表現の核となっている様子が看取される。雑の歌など、その他の歌においても、恋の歌と同様の傾向が指摘できる。

9 「まれなり」

はじめに

形容動詞「まれなり」は、「仏足石歌」（753頃）に「麻礼爾」と万葉仮名で表記され、奈良時代にすでに登場したことが知られているが、万葉集には用例が見られない。

ここでは、八代集の和歌で「まれなり」がどのように使われたのかを概観したい。

『日本国語大辞典』と『角川古語大辞典』は、形容動詞「まれ」の語義について、次のように記述している。

○『日本国語大辞典』

まれ【稀・希・罕】

〔形動〕

- (1) 全くないというわけではなく、ごく少し存在するさま。数少なく珍しいさま。稀少。
- (2) 機会や場合が、ごく少ないさま。たまさか。

○『角川古語大辞典』

まれ【希・稀・少】形動ナリ

めったにないさま。きわめて少なく、珍しいさま。

上記のように、『日本国語大辞典』は、語義を二つに分けるが、『角川古語大辞典』は一括して説明している。

これから行う和歌の検討では、前者の場合分けはあまり機能しないので、ここでは、両辞書の記述を勘案した、「数少なく珍しいさま。めったにないさま」という語義を踏まえて、検討を加えることにしたい。

1

『八代集総索引』には、「まれなり」と「まれに」を独立して項目に立て、それぞれ5首、18首の用例があることを示している。

これは、「まれに」という副詞の存在を認める判断であろう。一方、『日本国語大辞典』『角川古語大辞典』は、先に引用した形容動詞の項目とは別に、副詞「まれに」の項目を立てていない。ここでは、後者の判断に従い、「まれに」を「まれなり」に含め、合計 23 首の和歌について検討することにする。

八代集における「まれなり」の用例数は下記の通りである。

古今集… 5 首	後撰集… 7 首
拾遺集… 3 首	後拾遺集… 1 首
金葉集… 1 首	詞花集… なし
千載集… 2 首	新古今集… 4 首

使用状況から見ると、「まれなり」は三代集に集中して用いられていることが注目される。他には新古今集の 4 首が目立つ歌数である。

また、部立ごとの歌数を数えてみると、次のようになる。

四季の歌… 11 首（春 3 夏 3 秋 3 冬 2）²⁷
恋の歌… 4 首
その他… 8 首（物名 1 哀傷 1 雑歌 4 別歌 1 賀歌 1）

今、恋の歌とその他の歌を合わせて人事の歌としてまとめると、「まれなり」は、四季の歌と人事の歌とで、ほぼ同じ数の歌に用いられていることがわかる。また、四季の歌の中では、季節ごとにほぼ均等に詠まれていることもわかる。

以下、四季の歌、恋の歌、その他の歌の順に検討することにする。

2

○ 四季の歌

²⁷ 『拾遺集』の 1007 番歌は雑春の部立に収められているが、四季の歌として分類することにする。

四季の歌に用いられた「まれなり」11首について、何について「まれなり」と言っているかに着目して、検討を加えることにする。

- ・あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

(古今集・春上・62・読人不知・「桜の花の盛りに、久しく訪はざりける人の来たりける時に、よみける」)

- ・消ぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみゆきまれにこそみめ

(古今集・冬・333・よみ人しらず・「題しらず」)

「あだなりと…」詠は、「久しく訪はざりける人の来たりける時」という場面を踏まえて、知人(あるいは恋人)の訪れが稀であることを詠む。

「消ぬがうへに…」詠では、冬の間盛んに降っていた雪が、春霞が立った後は見ることが稀になることを詠んでいる。

この2首の古今集詠では、「まれなり」をそれぞれ、人の訪れについてと、自然の景について用いている。

次に、「あだなりと…」詠と同様に、①人の訪れについて「まれなり」を用いる歌と、「消ぬがうへに…」詠のように、②自然の景について「まれなり」を用いる歌とに分けて検討する。

① 人の訪れについて

- ・ひこぼしのまれにあふ夜の常夏は打はらへども露けかりけり

(後撰集・秋上・230・よみ人しらず・「かれにける男の、七日の夜、詣で来たりければ、女のよみて侍ける」)

- ・問ふことの秋しも稀に聞こゆるはかりにや我を人のたのめし

(後撰集・秋下・426・むかしの承香殿のあこき・「かれにける男の秋問へりけるに」)

- ・もみぢ葉も時雨もつらしまれに来て帰らむ人を降りやとどめぬ

(後撰集・冬・455・大江千古・「返し」)

- ・梅花春よりさきに咲きしかど見る人まれに雪の降りつつ

(拾遺集・雑春・1007・よみ人しらず・「桃園の齋院の屏風に」)

- ・花ちれば訪ふ人まれになりはてていとひし風のをとのみぞする

(新古今集・春下・125・刑部卿範兼・「花落客稀といふことを」)

- ・あすよりは志賀の花園まれにだにたれかは訪はん春のふるさと

(新古今集・夏・174・摂政太政大臣・「百首歌たてまつりし時」)

「ひこぼしの…」詠、「問ふことの…」詠では、「かれにける男の、七日の夜、詣で来たりければ」「かれにける男の秋問へりけるに」というように、訪れて来なくなっていた男から稀に訪問があったり、稀に音信があったことを詠んでいる。2首とも秋の歌だが、半ば恋の歌となっている。

「もみち葉も…」詠は、詠者の留守中に訪ねて来た友人が帰ってしまったことを、「まれに来て帰らむ」と表現している。

「梅花…」詠では、冬のうちに咲いた梅を見る人が稀であることを詠んでいる。

「花ちれば…」詠は、桜の花が散ってしまった後、訪ねて来る人がすっかり稀になったことを嘆いている。

「あすよりは…」詠も、花が散った後の寂しさを詠む。志賀の花園で今花が散っているのを踏まえて、明日からは稀にも人が訪ねて来ないことを予想している。

このように人の訪れが稀であることを詠む歌では、詠者の寂しさを強調してその孤独を嘆いたり、自分を孤独にした相手を責めてみせる歌が多い。そのことと関係があるが、同じように「まれなり」を使っている場合、その意味合いが、稀ではあるが訪ねて来る(来た)というように、来る(来た)ことに重点を置いている場合と、ほとんど来ることがないというように、来ないことに重点を置いている場合と、ニュアンスが分かれているように思われる。

両者の違いは微妙だが、「ひこぼしの…」 「あだなりと…」 「問ふことの…」 「もみち葉も…」 「あすよりは…」 は、どちらかといえば、来る(来た)ことに重点を置き、「梅花…」 「花ちれば…」 は来ないことに重点を置いている印象がある。前者に属する「あすよりは…」 詠も、全体としては明日から人が来ないことを悲観的に予想している。

② 自然の景について

・時鳥まれになく夜は山彦のこたふるさへぞうれしかりける

(金葉集・夏・120・中納言雅定・「題しらず」)

・虫のねもまれになりゆくあだし野にひとり秋なる月のかげかな

(千載集・秋下・334・〈仁和寺〉道性法親王・「題しらず」)

・花ちりし庭の木の葉もしげりあひて天てる月のかげぞまれなる

(新古今集・夏・186・曾禰好忠・「題しらず」)

「時鳥…」詠では、時鳥が鳴く夜が稀であることを詠む。新大系は「まれになく夜」に「夜半に一声鳴く」と注している。確かに一声鳴くのを詠んだ和歌は多いが、ここでは、鳴かない夜が多い中で、今夜は一声鳴いたということを、「まれなり」で表現しているものと思われる。

「虫のねも…」詠、「花ちりし…」詠は、古今集の「消ぬがうへに…」詠と同様、ともに季節の推移を詠んでいる。「虫のねも…」は、虫の鳴き声が稀になっていく、秋の末の「寥々たる風景」(新大系)を表現し、「花ちりし…」は、花が散った後の木々が茂った様子から、「大空に照る月がほとんど漏れてこなくなったこと」(新大系)を詠んでいる。

上の3首と、古今集の「消ぬがうへに…」詠に用いられた「まれなり」にも、先の人の訪れについての「まれなり」と同様、あくまでも相対的にだが、肯定的な面に重点が置かれる場合と、否定的な面に重点が置かれる場合とが看取できるように思われる。「時鳥…」詠は前者に当てはまり、残りの3首「消ぬがうへに…」「虫のねも…」「花ちりし…」は、後者に当てはまるだろう。

3

○ 恋の歌

・恋ひこひてまれにこよひぞ相坂の木綿つけ鳥はなかずもあらなむ

(古今集・恋三・634・よみ人しらず・「題しらず」)

- ・ひとり寝る時は待たる鳥の音も稀に逢ふ夜はわびしかりけり²⁸

(後撰集・恋五・895・小野小町があね・「題しらず」)

- ・いづ方に事づてやりてかりがねのとふことまれに今はなるらん²⁹

(後撰集・恋五・980・よみ人しらず・「朝綱朝臣の、女に文などつかはしけるを、異女に言ひつきて久しうなりて、秋とぶらひて侍ければ」)

恋歌は一首重複があるので、上記の3首となる。「まれに(こよひぞ)相坂」「稀に逢ふ」「あふことまれに」というように、すべて男女が逢うことについて「まれなり」を用いている。

「恋ひこひて…」詠では、詠者(男)が相手を恋い慕う状態が続いた後、やっと「まれに逢ふこよひ」の機会がきたことを詠んでいる。これは頻度が少ないということよりも、望みが薄かった逢瀬が奇跡的に実現したことの価値について言っているように思われる。

「ひとり寝る…」詠と「いづ方に…」詠は、ともに男に顧みられなかった女が、男から訪問され、あるいは音信が来た状況を詠んでいる。四季の歌で取り上げた、「ひこぼしの…」「問ふことの…」と同じように「まれなり」を用いているが、前者は稀な逢瀬の喜びと、その後の別れの悲しさを詠み、後者は「男の便りが遠のいていたのを怨んだ」(新大系)内容になっている。

4

○ その他の歌

- ・逢ふことの 稀なる色に 思ひそめ わが身は常に 天雲の 晴るる時なく 富士の嶺の 燃えつつ永久に 思へども 逢ふことかたし 何しかも 人をうら見む ……

(古今集・雑体・1001・読人しらず・「題しらず」)

- ・かく許逢ふ日の稀になる人をいかがつらしとおもはざるべき

²⁸ 拾遺集にこれと重複する歌「ひとり寝し時は待たれし鳥の音もまれに逢ふ夜はわびしかりけり」(恋二・718・よみ人しらず・「題しらず」)を収める。

²⁹ 新大系の本文は「あふことまれに」。同書が「とふことまれに」とある坊門局筆本・堀河本・承保本・正徹本などの方がよい」と記すのに従って、改めた。

(古今集・物名・433・よみ人しらず・「葵桂」)

「逢ふことの…」詠と「かく許…」詠は、内容的には恋の歌である。前者は、男の立場から、逢う可能性がほとんどない相手との逢瀬について、「まれなり」といっている。後者は、女の立場から男に顧みられないことの寂しさを「逢ふ日の稀に」と表現している。

・遠近の人目まれなる山里に家みせんとは思きや君

(後撰集・雑二・1172・よみ人しらず・「昔おなじ所に宮仕へし侍ける女の、男につきて人の国に落ちみたりけるを聞きつけて、心ありける人なれば、言ひつかはしける」)

・山里の柴をりをりに立つ煙人まれなりと空にしるかな

(千載集・雑中・1092・二条太皇太后宮肥後・「堀河院御時百首歌たてまつりける時、山家の心をよめる」)

この2首は、「山里」の寂しい様子を、人目（人の訪れ）が稀であることや、住んでいる人が稀であることを通して詠んでいる。

・心してまれに吹つる秋風を山おろしにはなさじとぞ思

(後撰集・雑二・1138・大輔・「返し」)

この歌は、朱雀天皇の命で扇を進呈したのに対し、天皇に仕える女房大輔が、「めったに作らないのに、心をこめて作った物を臣下への賜い物にはなさないだろうと思います」(古典叢書)と詠んだもの。「まれに」吹いた貴重な秋風を、大切な扇の比喻に用いている。

・君が世は天の羽衣まれにきて撫づとも尽きぬ巖ならなん

(拾遺集・賀・299・よみ人しらず・「題しらず」)

・まれにくる夜はもかなしき松風をたえずや苔の下にきくらん

(新古今集・哀傷歌・796・皇太后宮大夫俊成・「定家朝臣母、身まかりてのち、秋ごろ墓所ちかき堂にとまりてよみ侍ける」)

この2首では、「まれなり」は、「来」にかかり、来訪が稀であることを表現している。「君が世は…」詠は、天人が三年に一度降りてきて天の羽衣で岩を撫でるといふ故事を踏まえて、「まれにきて」と表現している。

「まれにくる…」詠は、妻の墓を訪ねて来ることについて「まれなり」で表現し、孤独に眠る妻の墓の寂しさを強調している。

・そのほどと契れる旅の別れだに逢ふことまれにありとこそ聞け

(後拾遺集・別・498・寂昭法師・「入唐し侍りける道より、源心がもとに送り侍りける」)

この歌は、入唐する僧が、帰国して再会することを期待できない心細さを、普通の旅でさえも再会は稀であることを引き合いに出して詠んでいる。

以上の8首に見られる「まれなり」の用法はさまざまであるが、非常に少ないということとそれをそれ自体として詠んではおらず、恋の歌や四季の歌と同様に、悲しさや寂しさを詠んだ歌が少なからず詠まれていることは注目してよいだろう。

おわりに

八代集に用いられた「まれなり」は、人の訪れや逢瀬について用いられるものと、四季の景物その他の事物について用いられたものとに大別できる。前者は、四季・恋・その他の歌の区別を越えて、人の訪れや恋人との逢瀬が「数少なく珍しいさま。めったにないさま」を表現していて、その寂しさを嘆く方向で用いられている。後者の場合も、多くは寂しさ、悲しさを表現するために用いられているが、中には希少な価値であることを表現している例も見られる。

また、同じく「数少なく珍しいさま。めったにないさま」を表現していても、それが「稀ではあるが存在する(した)」というように肯定的に用いられている場合と、「ほとんどない」というように、否定的に用いられている場合とがあることも分かった。

結び

本論第2章で行った9語の形容動詞の検討は、なぜこの9語が古典和歌に相対的に多く用いられたのかという問いを、いったんカッコにくくって、それぞれの語の使用例に沿って、和歌にそれがどのように生かされていたのかを概観することを主眼とした。

ここでは、その結果を受けて、改めて、この9語が和歌において相対的に多く用いられた理由について考え、若干のまとめを試みてみたい。

まず挙げられる点は、それぞれの語の表す意味と、和歌が取り上げる対象や主題との間に、親和性がみられるということであろう。

- ・秋の月山辺さやかに照らせるは落つるもみちの数を見よとか
(古今集・秋下・289・読人しらず・「(題しらず)」)
- ・一声はさやかになきてほととぎす雲路はるかにとをさがるなり

上の例は、「さやかなり」が月の明るさや郭公の鳴き声について親和性のあることを示す。

- ・枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ
(古今集・春・81・菅野高世・「東宮雅院にて桜の花の御溝水に散りて流れけるを見てよめる」)
- ・命をばあだなるものと聞きしかどつらきがためは長くもあるかな
(新古今集・恋五・1364・読人しらず・「題しらず」)
- ・こりぬらむあだなる人に忘れてわれならばさむ思ためしは
(後拾遺集・雑2・931・藤原長能・「元輔文通はしける女をもろともに文などつかはしけるに、元輔に会ひて忘れにけりと聞きて、女のもとにつかはしける」)

この3首は、「あだなり」が、桜のはかなさや、人の命の無常さ、人の不誠実さについて用いられた例であり、「あだなり」が和歌のさまざまな主題に適応していることが看取される。

- ・秋風の草葉そよぎて吹くなべにほのかにしつるひぐらしの声

(後撰集・秋上・253・よみ人しらず・「題しらず」)

- ・山城の鳥羽田の面をみわたせばほのかなりにけさぞ秋風はふく

(詞花集・秋・82・曾禰好忠・「題不知」)

- ・秋の夜の心をつくすはじめとてほのかなりに見ゆる夕月夜かな

(千載集・秋上・274・権大納言実家・「月の歌あまたよみ侍ける時よみ侍ける」)

上の3首は、「ほのかなり」が多様な対象に用いられている例である。

「そらなり」が、多種多様な感情と組み合わせあって、心がぼんやりする、心がうつろになる、という意味を表して、多くの歌に詠みこまれていたことなども、形容動詞と和歌の主題の親和性を示す例にあたるだろう。

「あはれなり」も、さまざまな感慨（悲しさ、寂しさなど）を表し、多くの歌で用いられている。ただ、歌には新しさが必要であるから、単に何かについて「あはれなり」と言うだけでは、陳腐で平凡な歌になってしまう危険がある。第1章の2でも見たことだが、下に引く歌が何かを取り立てて「あはれなり」といっているように、何らかの工夫がないと勅撰集に取られる水準にはならない。

- ・わけわびていとひし庭のよもぎふもかれぬとおもふはあはれなりけり

(千載集・雑中・1145・法眼兼覚・「題しらず」)

- ・しらぎくのうつろひゆくぞあはれなるかくしつっこそ人もかれしか

(後拾遺集・秋下・355・良暹法師・「いもうとにはべりける人のもとにをとここずなりにければ九月ばかりにきくのうつろひて侍けるをみてよめる」)

- ・おともせでおもひにもゆるほたるこそなくむしよりもあはれなりけれ

(後拾遺集・夏・216・源重之・「ほたるをよみはべりける」)

次に指摘できるのは、何らかの意味で欠落感を表す語が複数見られることである。「はつかなり」「ほのかなり」「まれなり」は、その典型的な例であるが、「はるかなり」や、すでに引いた「あだなり」もこれに類する言葉である。

- ・初雁のはつかに声をききしより中空にのみ物を思哉

(古今集・恋一・481・凡河内躬恒・「題しらず」)

- ・逢ふことの今ははつかなりなりぬれば夜ふかからでは月なかりけり
(古今集・雑体・1048・平中興・「題しらず」)
- ・夢よりもはかなきものは陽炎のほのかなり見えし影にぞありける
(拾遺集・恋二・733・よみ人しらず・「女に遣はしける」)
- ・稲妻は照らさぬよみもなかりけりいつらほのかなり見えしかげろふ
(新古今集・恋五・1354・相模・「題しらず」)
- ・消ぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみゆきまれにこそみめ
(古今集・冬・333・よみ人しらず・「題しらず」)
- ・ひこぼしのまれにあふ夜の常夏は打はらへども露けかりけり
(後撰集・秋上・230・よみ人しらず・「かれにける男の、七日の夜、詣で来たり
ければ、女のみて侍ける」)
- ・雁がねの帰るを聞けば別れ路は雲井はるかなり思ふばかりぞ
(拾遺集・別・304・曾禰好忠・「ものへまかりける人のもとに、人人まかりて、
かはらけ取りて」)
- ・ちはやふる神にもあらぬ我が仲の雲井遙に成りもゆく哉
(後撰集・恋六・1025・読人しらず・「女の男を厭ひて、さすがにいかがおぼえ
けん、言へりける」)

上に引いた例からも、「はつかなり」「ほのかなり」「まれなり」「はるかなり」が、恋を
始めとする欠落感（寂しさ、悲しさなど）を表現している様子をはっきり看取される。

これに対し、「さやかなり」「つねなり」は、その言葉自体が欠落感を表すわけではない
が、和歌では、打消表現や願望表現などを伴って、欠落感を表現するのに用いられている。

- ・秋の夜の月に重なる雲晴れて光さやかに見るよしも哉
(後撰集・秋中・320・読人しらず・「(秋歌とてよめる)」)
- ・あづまぢの佐夜の中山さやかにも見えぬ雲居に世をやつくさん
(新古今集・羈旅・907・壬生忠峯・「(題しらず)」)
- ・つねならぬわが身は水の月なればよにすみとげんことも思はず
(後拾遺集・雑六・1190・小弁・「同喩の中に、此の身水月の如しといふ心を」)

- ・ けふこずは見でややままし山里の紅葉も人もつねならぬ世に

(新古今集・哀傷・800・前大納言公任・「世中はかなく、人人おほくなくなり侍りけるころ、中将宣方朝臣身まかりて、一月許、白河の家にまかれりけるに、紅葉のひと葉のこれるを見侍て」)

和歌では自然を擬人化し、あるいは、人と自然を比較したり重ねたりする歌が、多く詠まれる。第2章で検討した和歌の中にも、下に引くような例が散見したことは注目してよいだろう。

- ・ 三日月のさやかにも見えず雲隠見まくぞほしきうたてこの頃

(拾遺集・恋三・783・人麿・「(題しらず)」)

- ・ さやかにも見るべき月を我はただ涙に雲る折ぞ多かる

(拾遺集・恋三・788・中務・「返し」)

- ・ 野辺ごとにをとづれわたる秋風をあだにもなびく花すすき哉

(新古今集・秋上・350・八条院六条・「摂政太政大臣、百首歌よませ侍けるに」)

前の2首は、「さやか」に見えない月を恋人に見立てた例であり、三首目は薄を擬人的に詠んでいる。

- ・ 露をなどあだなる物と思けむわが身も草にをかぬ許を

(古今集・哀傷歌・860・藤原惟幹・「身まかりなんとて、よめる」)

- ・ あだなりと思ひしかども君よりはもの忘れせぬ袖のうは露

(新古今集・恋五・1342・道信朝臣・「題しらず」)

この2首では、人と露を重ね合わせたり比較している例である。

自然と人を重ね合わせることで言えば、序詞などの修辞技法を用いた歌で、形容動詞が核になっている例が多く見られたことも注目される。

- ・ 朝な朝な立つ河霧の空にのみ浮きて思ひのある世なりけり

(古今集・恋一・513・よみ人しらず・「題しらず」)

- ・五月山こずゑを高みほととぎす鳴く音そらなる恋もする哉
(古今集・恋二・579・貫之・「題しらず」)
- ・春日野の雪間をわけて生ひいでくる草のはつかに見えしきみはも
(古今集・恋一・478・壬生忠岑・「春日祭にまかれりける時に、もの見に出でたりける女のもとに、家を尋ねて遣はせりける」)
- ・奥山の峰とびこゆる初雁のはつかにだにも見でややみなん
(新古今集・恋一・1018・躬恒・「題しらず」)
- ・逢ふことは雲居はるかになる神のをとにききつつ恋ひわたる哉
(古今集・恋一・482・貫之・「題しらず」)
- ・雁が音の雲はるかに聞えしは今は限の声にぞありける
(後撰集・恋三・777・読人しらず・「あひ知りて侍りける人のまうで来ずなりて後、心にもあらず声をのみ聞くばかりにて、又音もせず侍りければ、つかはしける」)
- ・山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ
(古今集・恋一・479・貫之・「人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける女のもとに、後に、よみて、遣はしける」)
- ・藻屑火の磯間を分くるいさり舟ほのかなりしに思ひそめてき
(千載集・恋一・645・藤原長能・「女につかはしける」)
- ・追風に八重の潮路をゆく舟のほのかにだにも逢ひ見てしかな
(新古今集・恋一・1072・権中納言師時・「鳥羽院御時、上ののをのこども、風に寄する恋といふ心をよみ侍けるに」)

以上、第2章で検討した形容動詞の用いられ方を振り返り、まとめを試みた。最初に予想したように、結局のところ、和歌に向いている言葉が和歌に用いられた、という結論に落ち着くことになったようである。

けれども、ここから逆算することによって、多くの形容動詞のどのような性質が、和歌に向かないのかということを考え始めることができると思う。また、そういう多くの形容動詞を排除している古典和歌の主題や表現とはどのようなものなのかも、興味深いテーマだろう。

それについては今後の課題としたい。

参考文献

「新日本古典文学大系」

小島憲之、新井栄蔵校注『古今和歌集』（1989年、岩波書店）

片桐洋一校注『後撰和歌集』（1990年、岩波書店）

小町谷照彦校注『拾遺和歌集』（1990年、岩波書店）

久保田淳、平田喜信校注『後拾遺和歌集』（1994年、岩波書店）

川村晃生、柏木由夫校注『金葉和歌集』（1989年、岩波書店）

工藤重矩校注『詞花和歌集』（1989年、岩波書店）

片野達郎、松野陽一校注『千載和歌集』（1993年、岩波書店）

田中裕、赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（1992年、岩波書店）

「和泉古典叢書」

工藤重矩校注『後撰和歌集』（1992年、和泉書院）

川村晃生校注『後拾遺和歌集』（1991年、和泉書院）

上條彰次校注『千載和歌集』（1994年、和泉書院）

松野陽一校注『詞花和歌集』（1988年、和泉書院）

漆谷広樹「「形容動詞」語幹構成要素の「ゲ」に関する一考察」（1988年、『専修国文』42号）

片桐洋一著『古今和歌集の研究』（1991年、明治書院）

片桐洋一著『古今和歌集全評釈』（1998年、講談社）

岸上慎二、杉谷寿郎校注『後撰和歌集』（1988年、笠間書院）

木船重昭著『後撰和歌集全釈』（笠間注釈叢刊1988年、笠間書院）

久保田淳著『新古今和歌集全注釈』（2011年～2012年、角川グループパブリッシング）

久保田淳、松野陽一校注『千載和歌集』（1969年、笠間書院）

窪田空穂著『古今和歌集評釈』（1965年、角川書店）

窪田空穂著『新古今和歌集評釋』（1966年～1967年、角川書店）

小沢正夫、松田成穂校注『古今和歌集』（新編日本古典文学全集1994年、小学館）

小島憲之、木下正俊、東野治之校注『万葉集』（新編日本古典文学全集 1994年～1996年、小学館）

菅根順之著『詞花和歌集全釈』（笠間注釈叢刊1983年、笠間書院）

杉谷寿郎著『後撰和歌集研究』（1991年、笠間書院）

鈴木一彦、林巨樹『形容詞・形容動詞』（品詞別日本文法講座1973年、明治書院）

高木和子「「～顔なり」の表現について：『源氏物語』の例を中心に」（日本語学36号 2017年、明治書院）

藤本一恵著『後拾遺和歌集全釈』（1993年、風間書房）

松田武夫著『新釈古今和歌集』（1968年～1975年、風間書房）

峯村文人校注『新古今和歌集』（新編日本古典文学全集1995年、小学館）

村田菜穂子著『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』（2005年、和泉書院）

村田菜穂子「平安時代の形容動詞—～ゲナリ～カナリ」（2001年、『国語学』第52巻1号）

・辞書類

『日本国語大辞典 第二版』（2003年、小学館）

『角川古語大辞典』（1982年、角川書店）

中田祝夫・和田利政・北原保雄編『古語大辞典』（1983年、小学館）

・索引類

『新編国歌大観』（1983年～1992年、角川書店）

『日本古典対照分類語彙表』（2014年、笠間書院）

古典索引刊行会編『万葉集索引』（2003年、塙書房）

ひめまつの会編『八代集総索引』（和歌自立語篇1986年、大学堂書店）